
二度目の勇者

ひろね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二度目の勇者

【Nコード】

N8281M

【作者名】

ひろね

【あらすじ】

あいざわ かりん

相沢花梨は高校入学前に怪我をしたため、休学していた。怪我が治り高校に通うが、クラスに馴染めなかった。

そんなとき、仲もよくないクラスメイト数人と王道パターン（魔王を倒すための勇者召喚）の異世界召喚にあってしまう。

運よく（？）勇者は免れたけど、勇者の従者にされました。仲間意識もほとんどなく関係もギクシャク…これで本当に魔王が倒せるのか？

主人公一人称で、時々別の人に代わります。多少残酷な描写有り

ます。

01 せつかく戻った日常は…？

私は課題を担任に提出し終わり、カバンを取りに教室に戻った。開け放れたれた廊下の窓から入ってくる風は、まだ少し熱気を含んでいる。九月の終わりならこんなものか、とその風を受けながら歩く。

普通の学校、普通の生活。すれ違う子もこの日常的な平和が崩れるなんてこと、露ほどにも思っていない。ふ、とあることを思い出し、そんなことを考える。

けれどすぐにその考えは捨てた。もう 考えても仕方ないことだ。頭を軽く振って現実に戻る。

階段を上って二クラス分歩いて教室の戸を開けようとして、タイミングが悪かった。と後悔した。

中にいて楽しそうに話をしていたのは、クラスでも人気のある男子、蒼井隼人（あおい はやと）と、その隣にその親友の大野洋一（おおの よういち）と女子、篠原愛美（しのはら まなみ）、堤恵理（つつみ えり）の四人だった。（って、説明が長いわ）あまりお近づきになりたくないけど、不幸なことに私の席は件の蒼井くんの隣だった。

ふう、と分からない程度にため息をついて、それからなるべく気にしないように近づく。それを蒼井くんは目ざとく見つけ、

「あ、花梨（かりん）ちゃん、どこいったの？」

と、気安くのたまった。

ちゃん付けされて軽くム力つくのと同時に、篠原さんが軽く睨みつける。本当に分かりやすい顔で。と心の中で苦笑する。

「課題を提出するの、遅れていただけ。先生に渡してきたから帰る

の。それじゃあね」

近づいて自分の席にあるかばんに手を伸ばした。かばんを手にとって、一応声をかけられたので、軽く挨拶をする。

「相沢さん、大丈夫？」

今度声をかけてきたのは、大野くん。

大丈夫、というのは、私は今高校一年生なんだけど、入学するちよつと前に大怪我をして、三ヶ月以上休んでいたから。

入学前はもう少し明るい性格をしてたしね。クラスメイトはその辺知らないし、怪我の後遺症で辛いんじゃないのかな、って思っているみたい。

でも本当に辛いのは体じゃない。心のほうがあとまでしつこく残ってる。

すでに夏休みも終わって二学期になっているけど、だからこそ、その頃にはもう仲のいいグループは決まっていて、私の入る隙間はなかった。まあ、別に一人でも平気だからかまわないけど。

ただ、隣の席（あいうえお順）になった蒼井くんはそれを気にしているのか、何かと話しかけてくるんだけど　いかんせん自分もてるのだと自覚してほしい。近寄ってくる女の子はかなりいるけど、今のところ蒼井くんから声をかけるのは私だけ、というはた迷惑なことになっている。

なにより、体の痛みより心の痛みのほうがきついんだけど……それは別の話なので割愛。

とりあえず、大野くんに「大丈夫」と短く返す。

すると、それが気に入らないのか、篠原さんが「怪我をするときんなが大事にしてくれるのね」などとのたまう。

失礼な。先ほどの心の痛みのほうがきついといったけど、体だつて全治三ヶ月の大怪我だったのよ。初めの頃は寝たきりで体力は落ちるし、よくなつてくればりハビリとかでまた苦勞するし。そんな氣持ちを少しは味わつてみてよ！

……まあ、蒼井くんたちに声をかけられることに対するやつかみというのは分かつてるんだけど。本人を目の前に言わないでほしいもつぱら身についた鉄面皮から、さらに取り繕った表情も消えていく。こうなるともうどうでもよくなつて、カバンを持ち直してその場から立ち去ろうとすした。

が、急に床が発光して、足を出すのをやめてしまった。

「なっ！？」

「なにこれえ！？」

「うわ！」

異常現象にそれぞれ叫びながら輝きを増した床を見ている。それは、光がある程度広まると、円を描き始める。

えーと、これつてもしかして……？

私個人にするとこういう不思議なことにあまり心を動かされたりしない。なんというか、靈感というものがあるらしく、影のない人たちとか、二階なのに普通に歩いている人とか　そういうたのを見慣れているせいで、靈現象は結構平氣なんだけど。

でもこれは靈現象じゃない。

そう思っている間に、光が室内に満ちて一瞬にして視界が真っ白になった。いきなり無重力になる浮遊感、そしてものすごい勢いで引つ張られる。

光が収まつたあと、一番最初に目にしたのは、どうみても外人サンな　というより、ありえない色をした（ふわふわピンク色の天然の髪に、紫色の瞳）、白一色を身にまとつた女性。

その姿を見て、私は気を落ち着かせようとして、私と彼女以外の人を探そうとして、すぐ近くになんか嬉しそうにしている蒼井くん、大野くんと、驚いた顔をした篠原さんと堤さんがいた。

「はじめまして、勇者様　いえ、勇者様と従者の方々」

彼女は少しとまどったあと、さらりと言ってくれました。
視線の先は蒼井くん。どうやら彼が勇者決定らしい。
そして、残る私たちは蒼井くんのお付き　ってことか。

お決まりのパターン　異世界召喚。

王道パターン　魔王を倒すための勇者。

百歩譲って、一人じゃなかったことと、メインが自分じゃなかったってことだけはマシなのかもしれない。

でも、なにもかも出来すぎていて、私は苦笑するしかなかった。

01 せっかく戻った日常は…？（後書き）

読んでいると刺激されて書いてみたくなりました。
王道だけ外れてる…そんなのを書いてみたいです。

02 異世界事情

私たちが呼ばれたところは、エーアストという世界の中にあるツヴェルフという国だという。

そして案の定、『魔王』を倒すための強い『勇者』が必要で、その勇者を探してこうして、召喚魔法を行ったという。

これらの話はすべて先ほどの女性　ディリアさん。この国最高位の巫女さんらしい。持って生まれた力は強いけど、基本的に癒しとかそういう系統のほうが強いため、巫女になったという。

ちなみにこの世界は『魔法』というより純粹に『力』というらしい。持って生まれた力によって、細かく分類すると火、風、水、地、光、闇などの属性に別れている。その中でも攻撃系か癒し系など別れるみたい。

さらにこの国はだいたい二百年前に同じように『勇者』を呼び出したことがあるとか。そのときは『魔王』を封印して、『勇者』は亡くなってしまったというが

普通の部屋に通されて、椅子に座ってお茶を頂きながら聞いた話だ。

で、説明が終わったあと机の上に載せられたのが、普通の大きさの剣と、それよりも細身の剣、そして緑色の大きな楕円形の石がはめ込まれているペンダント、タイガースアイのような茶色い球が連なったブレスレット。

「なんですか、これ？」

「あなた達の『力』を引き出すためのものです。こちらはヨーイチさんに。攻撃力の高い剣です。これをもっていると水系の力も使えます。」

そして、こちらの首飾りはマナミさんに。どうやらマナミさんは癒しや護りの力が強いので、それを増幅するためのものです。

エリさんは地の力を引き出してくれるもので、主に防御系などです。あと、道を示すものでもあります。道中ではエリさんに頼ることが多そうですね。

そして
「

どうやらそれぞれの力にあったものを持ってきたようで、普通の大さの剣を大野くん、ペンダントを篠原さんに、ブレスレットは堤さんに渡した。

となると、残りは細身の剣なんだけど……これは勇者の剣に相応しくないような気がする。でもそうなるとう蒼井くんが持つものがないし……あ、私はいらないってことね。

などと思っていると、「そしてこれはカリンさんに」と、細身の剣を私に差し出す。

えーと……もしかしくなくても、コレを私に使え、と？ その前に勇者ご一行様なんてご遠慮したいんだけど。

まあ、そう思っても相手が言うことを聞いてくれるなんて思っているはいけない。ディリアさんは私の気持ちなんてまったく考えず、剣の説明をする。

「この剣は、持つものの力に見合う力で敵を倒してくれるものです」
「は？」

意味が分からなかったのか、蒼井くんが間拔けた声を出す。
なんとなく想像がついたんで、仕方なく。

「要するに、その人にあつた実力くらいで勝手に動いてくれて、剣を扱う人の実力っていうか、剣技がなくても大丈夫なことじゃないの？」

「ええ、そのとおり敵意を持ったものを斬るのを手伝ってくれる剣です。その……カリンさんだけは力の系統がよく分らなかったの
で……」

困った顔をしながら説明するディリアさん。

それって、分からなかった「使えない、って判断したのかな？」
なら私は遠慮を……などと思っていると、蒼井くんがそんな気持ちをさくつと無視して。

「分かったから……その、俺の、は？」

「あの、ハヤト様のは王自らとのことです。さすがに勇者様ですか
ら」

「あ、そう？」

とたんに嬉しそうになる蒼井くん。そして、蒼井くんだけしっか
り様付けで呼んでいるディリアさん。

それにしても喜んで勇者やりそうで怖い。大野くんも同じような
感じだし。篠原さんはそれでも抵抗があるのか、ペンダントをつけ
るわけでもなくじつと見つめている。

堤さんは蒼井くんたちに近いのかな、面白そうな顔してプレスレ
ットを右腕にはめていた。ちょっと意外だった。

ディリアさんは蒼井くんに「そういうことなので、もう少しお待ち
ください」と答えた後、私が剣を受け取っていないことに気づく。

「では、カリンさん」

「お断りします」

「……」

「おい、相沢？」

あ、蒼井くん、私の呼び方が作ったような『花梨ちゃん』じゃな

くて、『相沢』になつてゐる。

やっぱり、浮いていた私に気を遣つてくれていたんだろうか？

といつても余計に浮いて（一部女子を敵にして）しまつていたけど、それはおいといて、困つた顔をしながらも、ずずずいつと私の前に剣を出すディリアさんに。

「私の力の系統が分からないってことは、みんなと比べたら微弱なものだと判断しました。なら、剣のおかげでなんとか戦えるようなのが一人いると足手まとい。それなら私はここでみんなを待つていたほうがいいと判断して、魔王討伐の参加はお断りします」

反論されないために一気に切り込む。

だいたい力の系統がよく分からないけど、一応、力があるから使おうなんていう考えが透け透けでうんざりする。「ですが…」などと困つたように呟いても知らない。

ってか、『勇者』 一人を呼び出したのに、都合のいいのがさらに三人もついているんだから十分じゃない。一人くらい、城の中で悠々自適に生活させてくれたってバチは当たらないと思う。

が、ここで異世界召喚、勇者と聞いて俄然やる気なっている三人が問題だった。

「そんなこと言わないで、一緒にここに来た仲だろ？」

「そうそう、一緒にいたほうが、相沢さんも心強いんじゃないかな？」

楽しそうに言う男性陣に、「思い切り心配だから」と思わず返してしまふほど。

それを聞いて顔を顰める二人に、堤さんは「怪我をしたばかりだから怖いんじゃないの？」と少しからかう口調で言う。

でも、それならそれを利用してもらおう。それに黙っていると、

そのまま勇者ご一行様のメンバーになりそうなので、ここは一つけん制の意味もこめて嫌味つたらしいことを言いまくることにした。どうせ一緒にいて、『魔王』を倒すなんてのを目的にしていれば、思い切り鬱憤がたまっただろうし。

「嫌よ。蒼井くんも大野くんも喜んでいるみたいだけど、私は嫌」
「だからどうして？」

「ねえ……相沢さんも一緒にいよう？　いくらなんでも一人じゃ寂しくない？」

ちよ……どうして篠原さんまでそんなこというの？　ここぞとばかりに蒼井くんと一気に仲を深めるチャンスじゃない。がんばって戦うのと、それを癒すのと……ちよ……どうでもいい関係じゃないの！？

……まあ、いきなり訳の分からないところにきて、不安なのは分かるけど。

脱線しかけた思考を戻して、私は嫌な記憶を掘り起こす。

「あのね、蒼井くんも大野くん。私は少し前に全治三ヶ月の大怪我をしてるの。そんな痛い思いをしてるのが、『一緒に戦いマス！』なんていうと思う？」

怪我のことを出すと、二人は口ごもる。そこにさらに畳み掛けるように。

「だいたいね、いくら勇者だ、強いつて言っても、聞けば相手は魔族の中でも規格外の強さの『魔王』よ？　そこまでたどり着くまで大変だろうし、怪我だってする。というか、しなないと思っているの？」

私の問いに黙り込む二人。

結局、この二人はいきなり広がったゲームのような世界の主人公に目がいつて、そこで起こりうる現実を考えていなかったようだ。「私は戦って怪我をしたらどういう思いをするか 今だったら容易に想像できるよ。大怪我した後だもの。私はもう痛いのは嫌なの」さあ、どうだ、とばかりに現実を突きつけた。

ちなみに魔族と魔王のことなんだけど、魔族とは人と違って下っ端でもかなり強い力を持つモノのこと。そして、魔王とは、その中でもたまに現れる、桁違いに力を持ったモノのこと。

逆に人は一般庶民はほとんどそういった力を使わないままで終わる。それに力を出すのに、媒体となる物がなければうまく使えないのだ。渡された剣やペンダント、ブレスレットがそれにあたるけど、結構貴重品で、一般庶民が身につけるほど数がないらしい。

さらにいえば、魔族、魔王は力に加えて瘴気を纏う。その瘴気が人にとって害悪なのだという。そして、魔王が存在するだけで魔族の力は増し、人にとっては死活問題になるので、それを倒せる人が必要とされる。

ということだ。

それならこの世界の中でやって欲しい。はた迷惑な。

「蒼井くん、大野くん、堤さん、篠原さん。それにディリアさん。私は、私たちがこの世界のために力を尽くす義務なんて、これっぽっちもないって思ってる。自分の世界ならともかく…ね」

まあ、元の世界で一介の女子高生ができることなんてほとんどないけど。

肩を竦めていい迷惑だ、という表情をディリアさんに向ける。

「相沢、お前っ！」

ガタンと椅子を倒しながら勢いよく立ち上がって、私の胸倉を掴んで持ち上げる蒼井くん。本当に熱血漢で勇者という役柄に合っている。

と、そのことはおいといて。

「蒼井くん、現実見てる？ 私たちはこの人でも困るような強いのと戦わなきゃいけないんだよ？ それに還ることができるかどうか分からないだし」

ねえ、ディリアさん？ とばかりに、蒼井くんから視線を逸らし、ディリアさんのほうへ向ける。

ディリアさんは私の視線を受けて怯み、その後「それについては…」と呟いた。

泣きそうな顔をして説明しようとするディリアさんを見て、大野くんと篠原さん、堤さんは宥めて、蒼井くんは私をさらに睨みつけた。

「おまつ……」

「だってそうでしょう？ この世界のためにがんばって、拳句に元の世界にも戻れない？ 自分の人生台無しにされているのに、こちらの世界の勝手な望みに付き合う義理なんてどこにあるの？」

冷たく言い放つと、蒼井くんは私から手を放し、「くそっ」と小さく毒づいた。

「だけど、なんで相沢さんは還せないって分かったんだ？」

「そうよね。呼び出すくらいなもの。そうだったのだって考えていそうだし……相沢さんの思い込みなんじゃない？」

大野くんは私の考えに驚いて、堤さんは還れないかもしれない
いうことを否定したくて尋ねる。

「だって、前の勇者は死亡したんでしょ？」
「ええ」

短く返すディリアさん。

でも…と付け足すように、「返還するための陣もちゃんとあるんです！」と付け足す。

「それ、使われなかったのよね？」

「はい。でも、こうして勇者様を呼び出すことはできたんですし、返すことも可能だと思います。これは召喚の陣と逆に造ってありますから」

「どうして可能だと分かるの？」

「ですから、勇者様様が呼び出されたということは、返還の陣を使
って」

「いなくなれば、元の世界に還ったと？」

ディリアさんの言葉を遮るように続ける。

「そりゃそうだろ？ だから、ディリアさんがこうして返す方法があるっていつているんだから大丈夫だって。相沢は心配性すぎないか？」

私の出した問いは少なからずみんなを動揺させていた。だから、私がとてつもない心配性で、ディリアさんの言葉が正しいように思い込もうとしている。

けど、やる気であるところに水を差すのは気が引けるけど、現実

を知ってから、それでもやる気があつたら言つてほしい……と思うから。

「蒼井くん、それってこつちの世界から見た結果だよ。現実にもその返還の陣から人がいなくなったとしても、本当にもとの場所に戻ったかどうかは、返還された人しか分からないんじゃないかな？」

「……」

「いなくなった」元に戻つてゐると思つてゐる？ でも違つかもしいないよ。対象者がいなくなったとしても、返還の陣は使うことができるとしても、それが必ずしもちゃんと元の世界に返った　　つていうことは証明されていないんだもの」

どうやら、それぞれ想像して理解したようで、一気に真剣な表情に変わったのを見ていた。

02 異世界事情（後書き）

一人空気読めない主人公なのです。
現実的：といえば現実的なのですが。

03 旅にでるまで

勇者として呼び出された私たち五人。

勇者は蒼井くん、それをサポートする大野くん、篠原さん、堤さん、そして私。

けど、私のせいで、早くもその足並みは見事にそろっていないかった。

それでも話はどんどん進んでいく。

蒼井くんは『勇者』としてツヴェルフ国王と謁見。勇者の剣を直接譲渡される。

蒼井くんが得意げに見せているので見ると、少し大きめの、でも装飾ゴテゴテの飾りモノ？と疑うようなデザインだった。でも、一応力の増幅と、蒼井くんは風の属性が強いとかで、その辺の力を使えるようになっていらしい。

本格的に魔王討伐の旅に出る前に、ある程度腕試しというか体を鍛えるとかで、その剣を使ってみたいらしいけど、装飾ゴテゴテの鞘と柄はともかく、剣はかなりの力を加えても刃こぼれしないほどしつかりしていた。

蒼井くんに合わせて、大野くんも剣の特訓。蒼井くんと違って剣なんて扱ったことがないようなので（蒼井くんは剣道部）、この城の隊長さんに一から鍛えられている。

堤さんは主に力の発動について、篠原さんは実地も兼ねて救護室（？）にて怪我人とかを治療中。

それで、私かというと。

「じゃあ、次はカリンもやってみようか？」

と声をかけたのは、大野くんにレクチャーしている隊長さん

ヴァイスさんだった。若いのにいくつもある隊の隊長を務めている。ヴァイスさんは割と爽やか青年といった感じで、赤みの強い癖のある金髪に空色の瞳、なにより目がいくのは、日に焼けた筋肉のしつかりした体だった。あ、あとにこやかな笑みはポイントが高いかな。

「はい？」

「いや、カリンも剣を使うんだろ？　なら見てないでやったほうがいいよ」

「そうだね、一緒にがんばろう」

大野くんはさすがに疲れたのか、仲間がほしいようでヴァイスさんに同意している。

だからいやだったの。

「ヴァイスさん、済みませんがお断りします」

なけなしの笑みをなんとか浮かべて、一言で拒否すると、大野くんは「えー？」と不満そうだし、ヴァイスさんも残念そうな顔をした。

「相沢さん、本当にやる気ないのね」

近くでイメージトレーニング(?)をしていた堤さんにまで言われてしまった。でも即答。

「ない」

それに対して割と大きなリアクションをする堤さん。あれ、結構面白い人？

「でも、私たちと行くなら、少しは使えないと足手まといだなんだけど」

いや、間違い。基本的なところは変わってない。

「別に何も考えてないわけじゃないけど。私が持たされたのは“敵とみなしたものを勝手に斬る剣”でしょ」

「そうだったっけ」

「そう」

ちゃんと聞いていてよ、堤さん。と思っていると、ヴァイスさんのほうが「へえ、あの剣か…」と呟いた。

なんだ、知っているんだ。あの剣。まあ、力を使うためのアイテムだからある程度の人なら知ってそう。

「まあ、たぶんヴァイスさんの思っているとおりのものだと思います」

「ああ、なるほど。だからか」

「ええ」

ヴァイスさんは割りと簡単に理解したのか、頭を上下に振って「うんうん、なら必要ないか」と呟いている。すぐに理解してくれる人は楽でいい。

堤さんはそれが気に入らないのか、少し怒ったような口調で「だから、なんで『なるほど』になるの!？」と問う。それに対して返そうとしたところ。

「いや、あれは力さえあれば、どちらかというと剣を知らないほうがいいモノなんだよ」

と代わりに答えてくれた。

「どうしても自分のやり方を覚えちゃうと、勝手に動く剣との差異が出る。使っている間に自分の動きと剣の動きが一致しないと、短い間だけど、それが“隙”になる。だから、剣に任せておくなら知らないほうがいいんだ。よく分かったね、カリン」

懇切丁寧な説明に、私は素直に頷いた。

「知り合いにそういったのをやっている人がいて。太刀筋とかそういったのって、流派ごとにあるけど、ある程度は自分がやりやすいように自己流になっちゃうって聞いていたから」
「なるほどね」

ヴァイスさんは納得。大野くんも堤さんもそれなりに納得したようだった。

「おかげで楽ですよ。そんなわけで、私はちよつと書庫とか拝見したいんですけど。ヴァイスさん、いいですかね？」

「いいと思うけど……なにするの？」

「一応、この世界について自分なりに調べてみたいですし、前に召喚された勇者のことも知りたいと思ったから」

人から聞くだけじゃ情報が偏りそうだなものね。

文献とからかでも偏りは出るけど、それでも今いる人たちのように利権を考えなくて済む点では楽だと思うから。

なんせ、蒼井くん。勇者で一番がんばって剣を使えるようにならなきゃいけないのに、あちこちの人に擦り寄られてここまで来られないくらいだし。

「普通の書庫なら閲覧できると思うよ。禁書の類は許可が必要だと思っけど」

「それだけでも十分です。最初から難しいのを見ても分からないだろうから」

「なら、あっちの塔のほうにあるよ」

「ありがとうございます」

ヴァイスさんからして右側のほうを指差して簡単な説明。

これだけじゃ分からないから、後は会った人に適当に聞けばいいか。勇者ご一行様は城の中では有名なので、腰を低くして教えてくれるし。今もすれ違った人に会釈されたので、軽く頭を下げておいた。

歩いてヴァイスさんの言った塔までたどり着いたけど、この中のどこなのか分からないので、誰かに聞かなきゃいけないかな、と思っっていると、「どうしたんですか？」と後ろから声をかけれた。

振り向くと、背の高い男の人。その人を見て少しほっとした。

だって、この人、着ている服がこう……一般庶民が着るような簡素なものだったから。城のあちこちにいる人、特に擦り寄ってくる人は豪華な服を着ていて気後れしそうな感じだったけど、この人は普通って感じだった。

蜂蜜のような明るい この場合金色というのだろうか 瞳は好奇心はあっても、そこに利権がらみはなさそうだった。

「書庫に行きたいんですけど、分かりますか？」

普通に話ができそうな人だったので、スルーしないで尋ねてみる。

「書庫？」

「ええ、ちょっと調べ物をしたいんで」

「書庫なら分かるから案内するよ。ちょっと複雑だから、一緒に行ったほうが早いし」

「じゃあ、お願いします」

話しかけてくれた人はレーレンと名乗った。名前を覚えてくれた以上、私も名乗らなくて、ってことで、「花梨カリンです」と答えた。すると、レーレンさんはちょっと考えてから、「ああ!」となんか納得した声を上げた。

「どうしたんですか?」

階段をちまちま上がりながら、レーレンさんを見ると、私を指差して。

「勇者様ご一行の中の変わり者」

ええ、確かにそうだけどね。それ、本人前にいうことじゃないから。

ということ、ついこちらと同じようなことを返してしまう。

「その勇者様ご一行の変わり者にケンカでも売るなんて、あなたのほうが勇者ですね」

「いやいや、違うって。普通なら嫌がるのは当然だと思うし。……って、カリンって結構この気配に敏感だったりしない?」

「はい?」

話がどんどん流れている気がするけど、レーレンは(もうさん付けはやめた)空を指差して。

「なんていうかなー、ほら、魔王誕生でここでも瘴気が濃くなってるんだよね。嫌な感じ……しない？」

「まあ、多少は。皆さんピリピリしてますし」

「そうだね」

うんうん、やっぱり などと勝手に納得しているレーレン。

ヴァイスさんといいレーレンといい、結構私たちのこと見てるんだな、って思う。

とりあえずどうしてそう思ったのか聞いてみると、レーレンは。

「えーと、王様との謁見あったじゃない？」

「ええ」

「あのときさ、みんな緊張してたけど、カリンだけなんか別の緊張

じゃないな、警戒しているっぽかったから」

「それがどうして？」

「元の世界では普通の人だったって聞いていたし、だからああいう大勢のところで、王様とか大臣とかいかにも偉そうな感じのがいれば、緊張するなってほうが無理だよな。みんなまだ子どもだし」

「まあ、元の世界でも私たちはまだ未成年ですから」

確かにあれだけ大勢の中に立って、期待とか利用しようかとか考えている人たち相手に緊張するなというのは無理だ。私だって多少は緊張していた。そう答えると、レーレンはちよつと意外そうな顔で。

「でも、カリンはそういつた緊張より警戒しているほうが強かった感じがしたんだよね。実際、魔族も人の姿になれるのなんか人が人の中に入り込んだりして、時たま揉め事引き起こしてるし。もしかしてそういうのを感じてるのかと思って」

ああ、なるほど。そういう警戒にとったのか。

でもあそこには瘴気は感じなかった。今、外から感じているの瘴気だとすれば。元の世界でたとえるなら、あまり良くない霊が近くにいて、鳥肌がたつような感じに似ている。

「私はどちらかというと、あそこに出る前に嫌味言っちゃったんで、警戒していた。って感じなんですけどね。あそこに瘴気は感じなかったし」

嘘は言っていない。あの場に瘴気は感じられなかった。それを言うとレーレンは私の顔をじっと見つめた。

「うん、やっぱり。力がないわけじゃないんだね」

「はあ、まあ、属性が分からないとは言われましたけどね」

なんで、あの剣を持たされる羽目になったし。と心の中で毒づいていると、レーレンはあっさりと爆弾的発言をしてくれた。

「もしかして、属性が分からないんじゃないって、全部の属性持つてるんじゃない？」

えー…全部の属性ってなんですか？

03 旅にでるまで（後書き）

実は強かったんですよー、な展開で。

04 旅の同行者

レーレンの言うことが理解できず、「は？」と間抜け面で首を傾げた。

その様子がおかしかったのか、レーレンは小さく噴出す。

「レーレン……」

「ごめんごめん。勇者ご一行様の中の変わり者、カリンは表情もあまりなくて人間っぽくないって聞いてたもんで」

失礼にもほどがある。私は元の世界では普通の人だったんだから。……あ、いや、普通というのはちよつと語弊があるかな。靈感……は、すべての人が持っているとは言いがたいし。でも紛れもなく普通の人間なただけ。

「私が人間じゃないならなんですか、まったく」

「なんだろうねえ。まあ、僕には感情を表に出すのがちよつと苦手な普通の女の子に見えるけど」

「見えるもなにも、紛れもなく普通の女の子です」

「言い切るね。結構珍しいのに。全部の属性持った人間って」

あ、さっき出てきたのだ。なら話を戻して、それを聞かなくちゃ。

「そういえば、全部の属性を持っているって？ 人が持つ力は属性が決まってるって聞きましたけど。あっても似た属性ふたつとか」

「あ、うん。その通り。で、ほとんどの人は力自体が小さくて役に立たないし、まったく力がないから属性もないってのもいるんだけど、逆もいるらしいんだよ、本当に稀にね。さっき言ったようにすべての属性を持つ人ってのが。あんまり文献にもないんだけどね」

なるほど。それにしても、レーレンは普通の格好をしているので、書庫までの案内でいいやと思っていたけど、なかなかの知識人らしい。

レーレンってナニモノ？

「えーと、それ詳しく聞きたいけど、その前にレーレンっていったい何者なの？」

「え？ 僕？」

うん、とこくつと頷く。

「いや…何者って言われるほどたいそうなもんじゃないんだけどねえ。ほら、見たまんまで」

「見たまんまじゃないでしょう？ だって、文献にもほとんどないことを知っているんだもの」

「ああ、それで…ね。うん、僕は王室御用達の品まで扱う隊商の一人なんだ。親父がその頭領だから、まあ、あちこち行くし、いろんな情報が結構手に入るから、カリンにはそう見えたのかも。あ、さっき言ったのは旅先で聞きかじった話だよ」

「そう、なんだ」

微妙に敬語とタメ口が混じりつつ、レーレンがどういった立場の人なのかを把握した。

「でね…」

レーレンがちょっと言いにくそうに、でも何か続けようとしていた。

「ん？ なに」

「だからね、僕は今回勇者様ご一行のメンバーの一人なもんで、よろしくって言いたかったんだ」

「はい？」

「あちこち行ってるもんで道詳しいから。いくら、地の属性を持つ導き手がいても、細かいところまでは分からないから、僕がある程度道案内をつて頼まれた」

「……なるほど。」

堤さんの力がどれほどかは分からないけど、確かに彼女を頼ってばかりはいられないだろう。魔族の本拠地に行くまでは普通に行けばいいのだし。

「じゃあ、よろしくお願いします」

と右手を出して、改めて言うと、レーレンは実に意外そうな顔をした。

あ、そういえば、ここでは挨拶に握手をするようなのはないのかな…？ 思わず手を引っ込めようとしたとき。

「……よろしく、カリン」

と、右手を握り返してきた。

でも、その間はいったいなに？

「ごめん、カリンが笑ったからびっくりした」

あ、そうですか。それほどまでに私の笑みは珍しいんですか。ちよっと頬がひくついても仕方ないよね。でもって握っている手に力がこもっても仕方ないよね？

レーレンの手を思い切り握ってみるものの、逆にもっと強い力握り返されてしまつて痛かつた。

失敗。男女の差があるから握力勝負は無理でした。手がものすごく痛いです。

そんなのを察したのか、レーレンは面白そうに笑つた。

「笑わないでよ」

「だって…カリンのそんな顔を見てるのは、ここでは僕くらいだろ
うから、ね？」

「一応…感情だつて表情だつてあるんです。ただ、いろいろあつて、あまり表に出さなくなつただけで」

「うん、それは分かつた気がする。他の子たちと比べても、カリンは大人びてるし」

うんまあそれなりに大変な思いはしたし。でも、『他の子』って……レーレンっていくつなんだろう？

「レーレン、年いくつ？」

「僕？ 僕は十八だよ。まだ若いから、親父に勇者の手伝いして少しは男を磨いてこいつて、この仕事を押し付けられた」

「十八……すみません、年上だつたんですね、敬語に戻します」

「別にかまわないよ。気軽に話して」

「そう？ ならそうする。普通に戻つたのを敬語で話すのもなんか変だし。レーレンというほうがほつとするから、少しは気を抜きた
い」

「うん、いいよ」

蒼井くんは私の態度に怒っているし、大野くんはまあともかく、堤さんと篠原さんとの関係も微妙だし……ディリアさんにもケンカ売っちゃつたしなあ。

聞けばディリアさんも一緒に行くって言っし。まあ、この辺も私のせいなんだけど。自分たちで何もせず、他の世界の人に押し付けると言ったら、意地になったのか一国の最高位の巫女という立場を放り出して一緒に行くと言い出して。

そんな理由で魔王討伐勇者様ご一行のメンバーは、私にとって気の置けない人がいない。このままいけば道中でぜったいストレスで胃潰瘍になる、と思えるくらいに。

だからレーレンと一緒にいてくれるなら嬉しい。

レーレンは気軽に話ができて気持ちが軽くなるし、レーレンも私のことをそれなりに認めてくれているみたいだから、レーレンと一緒にいることにしよう。

って、そうだ。属性の話に戻らなくちゃ。

すでに書庫にたどり着いたんだけど、今は書庫よりレーレンの話のほうが気になる。だって、ほとんど文献にもないって言うから、そういった本が見つかる可能性は低そうなんだもの。

「レーレン、話戻って、さっきの属性の話聞きたい」

「あ、いいよ。でも、話をするなら場所変える？ 書庫で話しているとよく響くし」

「そうする。図書室って言えば、私語禁止なものね。話したら目立つちゃう。でもちよっと待って」

レーレンにそう答えてから、胸ポケットに入れていたボールペンと手帳にここの場所を簡単な地図として記す。次に一人でも来れるように、と。

さらさらっと書き終わると、レーレンにお待たせ、というが、レーレンは私の持っていたものに興味を示していたようだった。

「レーレン？」

「あ？ ああ、ごめん。はじめて見るものだったから」
「そう？」

「じゃあ行こうか。庭に椅子とかあるから、その辺で話をしよう」
そういつて下へと逆戻りしていった。

この辺は人が少ないみたいで、廊下で三人すれ違っただけで、この庭園には誰もいなかった。

少し日差しが強いので、木陰になるような場所を選んで座った。

「はい、どうぞ」

座って話を切り出そうとしたところ、目の前に差し出されたものに驚いた。

見たら飲み物だった。どうも水筒のようなものに入れて持ち歩いていたらしく、カップがそれっぽい。

「ありがとう」といつて受け取ると、少し温めのお茶だった。保温効果はあまりないようだ。

「いつも持ち歩いているの？」

「うん、癖だね。基本的に必要最低限な持ってるよ。移動中で仲間とはぐれたりすると困るから」

「用意周到。」

「うん、旅をしているとそれなりにね」

「なら、旅に出たらレーレンの側にいることにする。なんでも持つてて便利屋さん」

「はは…はつきり言うね」

苦笑しながらもレーレンは嫌な顔をしない。

「僕もカリンに興味あるから、別にいいよ」

その言葉はある意味爆弾発言です　　と言おうとすると。

「さっき言ったように、全部の属性を持つ人間みたいだし。でも誰も気づいていないみたいだしねー。ほんと、気づいたらどうなるのかな？　ある意味、勇者として見られているハヤトって子より強いんじゃない？」

矢継ぎ早に言われて、口を挟む隙がなかった。

「それ知ってるの、僕だけみたいだし、カリンはなんか知られたくないみたいだし……そう思うと楽しいな」

私はオモチャか。

レーレンはかなりいい性格で、でも、人が嫌がることをぺらぺら喋るわけでもないようだ。個人的な密かな楽しみにするタイプらしい。

でもまあその方が私もいいんで、そのあたりに対して突っ込むのはやめておこう。

でも、もらったお茶をすすって喉を潤した後、少しだけ訂正しておく。

「蒼井さんと私のどっちが強いかな　ってのははっきり言って不明だよ。すべての属性を持っているのは、まだ可能性の一つだし、元の世界では私は剣とかそういうたのを使ったことないから、やり方が違っても慣れているほうが強いと思う」

現に五人いたのに、ディリアさんが勇者だと認めたのは蒼井くんだったし。

「んー… 現段階ではそうかもしれないけど、力の使い方に慣れてきたら変わりそうだと思うけど。 と、そうだ。カリン、これをつけてみて」

そういつてレーレンがごそごそと袋から取り出したのは、十センチ程度の小箱だった。

「なにこれ？」

「すべての属性が入った特性の指輪」

と、箱を開けて見せるレーレン。

中にはカラフルな石がついたものが一つ、それと乳白色の石が付いたものと、黒い石が付いたものが一つずつの、計三つが並んでいた。ちなみにリングの部分は透明で、これは増幅するためのクリスタルっぽい。

「これが火、風、土、水の属性の指輪。後は光と闇。こっちは強いからまとめられないんだよ。さ、はめてみて」

と言われても、ここでそれが分かってしまうのもなあ…… いや、ないかもしれないし。

などと思っていると、レーレンは私の右手をとり、四つの属性を持つ指輪を中指に、光と闇の指輪は左手の中指と小指に勝手にはめる。

ってか、これじゃあ私、成金趣味というか、無類のアクセサリー好きのようじゃないか と三つの指輪をはめた手を見る。

すると、指輪は淡く光、それぞれ共鳴するかのように、互いに点滅し始めた。

えーと……これって、私の力に反応しているってことでしょうか？

知りたくもなかったけど、レーレンは興奮しながら「やっぱりだ」と呟いたのを見ると、やっぱりそうなんだろう。

05 商談成立。

「で、レーレンはそれを知ってどうするの？」

「ん？ ただ単に本当にいるのか知りたかっただけ」

「なら、もういいね。これ、ありがとう」

一応お礼を言ってから、指輪を引き抜こうとする。
力を使うためのアイテムは馬鹿高いお値段なので、いくら属性が分かってても簡単に買える物ではない。

かといって馬鹿正直に説明して、勇者経費でレーレンから購入してもらおう気もない。明らかに面倒が増えるだけだ。

「待つて待つて。カリン、気が早すぎるって」

「レーレン？」

「全部属性がないんだったら返してもらったけど、あるからあげる」
「……………レーレン、気前良すぎ。アイテムの値段、聞いたことあるよ」

しかも指輪。

なんていうか…………『結婚してください』的なときに渡す婚約指輪のお値段より、はるかに上回ると思うんだけどね、これ。

しかもこんなもの持ってたら、いくら私と距離を置いている人だつて、あれこれ詮索してきそうだし　と、指にはめられたままの指輪をマジマジと見つめた。

「別にタダって言ってないけど？」

僕は駆け出しでも商人だしね、と付け足すレーレン。

「……異世界の人がこの世界のお金持つてると思う？」
「ぜんぜん。そうじゃなくて、僕が目につけたのは」

そういつて私の胸元を指差したとき、レーレンは陽気な青年じゃなく、商人の顔になっていた。

間違いがないように言っておくが、胸元といっても、左胸 胸ポケットのところを刺している。

そこには先ほど使ったシャープペンとボールペンが一つになったシャーボと手帳。

「……………これ？」

「そう、インクをつけなくても使えるペンなんて見たことないからね。ぜひともそれを手にして作れるかどうか調べてみたいんだ」
「なるほど、商人だ…………」

別にシャーボくらいあげたって別に問題ないけど。

あるとしたら、やっぱりこれを身につけていること なんだよね。属性が分からないから、今のところついでに呼ばれたおまけ状態だけど、レーレンの言うように属性すべてを使い切れたら、また話は変わってくる。

でも、こういう便利なアイテムがあれば怪我とかも少なくなりそうだし…………あーなんかジレンマだ。知られたくないのと、身の保全と どちらのほうが重いだろうか。

「あ、悩んでる？」

「悩んでる」

「なら、その指輪をしているのを隠せばいいんじゃない？」

「は？」

先生、すみません。初心者にも分かりやすいように教えてください

い。

どうもレーレンは私の間抜けた顔を見るのを楽しんでいるようで、情報を小出しに、こちらが思わず「は？」と思ってしまうようなところで止める。

にやついてるのが分かるから、レーレン。結構、性格悪いね。

「その指輪には『光』の属性もあるから。目くらましみたいなのをしておけば見えなくなると思うよ。そういったのは比較的力量を使わないけど、常に使っていると力に慣れる練習にもなるし」

「なるほど。でも、同じように力を持っている人には分かっちゃうんじゃない？」

「うーん……どうだろうね。それほど大きな力を使うわけじゃないし」

まあ、大々的なマジックショー！ってわけじゃないけど。

「カリンの場合は全部あるから……なんていうかな、属性が相乗効果しあってるんじゃないくて、けん制し合っている感じで……だから、デイリア様も分からなかったんじゃないかな。あ、あと、カリン自体が無意識に押さえてない？」

う……レーレンけっこう鋭い。

靈感があるせいか、変なところで幽霊なんかを見ても驚かないように、いつの間にか身についた平常心を保とうという心。それが、今は自分の力を抑えているのは、無意識に感じていた。

だって、私、ここにきてもすぐ自分を落ち着かせてたし。嬉しそうなのとか驚いているみんなと違って。厄介ごとに関わりたくないって、瞬間的に悟ったんだよ、うん。

とりあえず、隠すこともできるみたいだし、シャーボと比較するなら高価なアイテムのほうがいい。

ということ、あっさりと商談成立した。

その後、レーレンの指導の下、目くらましをかける。すると、指輪は見えなくなって普通の手に戻った。

「一回でできるとは……なかなか優秀だね、カリン。その調子でどんどん覚える？」

「いやそこまでは……って、いろんなことに詳しいレーレンのほうですごいよ。レーレンはどんな力を持ってるの？」

持っていないと分からないよね、この感覚。

「うーん……エリって子と同じようなもの……？」

「なんで疑問系なの？」

「一応地の属性のアイテムも持つてるけど、使わないというか……ね。工作上、力で道を探すより、地図を頭に叩き込んで道どおりに行ったらほうが正確だし、それほど使えるわけじゃないし」

「なるほど、理解した」

一般人は力があっても小さい。王族は、力の強い者が礎になっているし、血を重ねることにより更なる力をその身に宿す　　といていたつけ。

それが正しいなら、レーレンは商人だから、力があっても自由自在に使えるほどあるわけじゃない、ってことか。

でも、あちこちで仕入れる知識により、レクチャーするくらいはできるという。実際、力を使うのは感覚的なものが一番みたいだし。魔法じゃないから、呪文や基礎とか関係ないみたい。

「だから、無意識に力を抑えることを知っているカリンのほうが、力があっても使い方を知らない勇者、ハヤトより、今は一歩先に行っていると思うよ」

「そうかな？　なら、すぐに抜かされるね」

「うーん。でも抜かされる可能性は低いと思うけどなあ。持たされた『剣』に、すべての属性の指輪　それらを上手く使えば、かなりのものになると思うけどね」

「いやいや、そんな力要らないから。できれば後ろのほうで見守っているほうが楽でいいよ」

実際、敵とみなしたものを斬る剣を持たされている以上、前線に出されるんだろうけどね。私以外の女性陣は基本的に後方支援の人が多いし。

なんだかんだ言いながらも、レーレンは簡単な説明をしてくれた。力を使うにはとにかくイメージ。だってそうだよな、魔法みたいに呪文とか決まっているわけじゃない。アイテムを通して、いかに自分の思うとおりに力を使うか　ってことだから。

でも、聞けば呪文じゃないけど、言葉にもアイテムになるような力を含んだ言葉があるだって。言葉って言うのかな？　日本にも似たようなのがあるよ、って言って説明したら、「そんな感じかな」と返ってきた。

本来の力に、イメージとアイテムと、そして、思いのこもった言葉　これらを総合すれば、かなりのものになるという。

「まあ、カリンの属性は全部あるけど、僕にはそれが他の人より強いのか弱いのかってことまでは分からないから」

「私も分からないよ」

「でも、一つに集中すればかなりのものだと思うし、場合によっては組み合わせることも可能だと思うんだ」

「あ、そっか」

今使っているのは『光』。科学がある程度発達していた世界にいた私には分かるけど、目に見えるものは光の屈折によって見えている。その角度を『光』の力で見えないように変えた　というわけ

だ。

ただし、すべての角度から見えないようにってことを考えると、結構面倒くさい方法なんだよね。慣れれば力の使い方をマスターできるんだろうけど。

「たとえば……蜃気楼みたいなのは、『火』と『水』があってできる。『水』と『闇』で氷を作るとか」

「なるほど、勉強になるわ」

「でも、実際できる人ってほとんどいないんだけどね」

「じゃあ、駄目じゃん。使ったらばれちゃうもの」

「そこはカリンの腕の見せ所じゃない？ ばれたくなかったら上手く隠すことを覚えそうだしね」

「他人事みたいに」

「ぼやくように言うと、レーレンは「所詮他人事、楽しむもの」と笑った。

コイツ…あとで覚えとけ…。

その後もレーレンに簡単な力の使い方のようなものを聞いて、それから再び書庫へ向かった。

05 商談成立。（後書き）

とりあえず次の話で一区切りなので、続けて更新。
その後はストックためつつのんびり予定。

06 古い本「魔王考察」

人から聞く情報もいいけど、古い書物から得られる情報も必要だからってことで書庫へ。

書庫へはすんなり入れてもらえて、受付のおじさん（おねーさんじゃなかった）に魔族と歴史に関する書物がどのあたりにあるか尋ねる。

左側の奥のほうだといわれて、そちらへ足を向けた。

古臭いにおいが充満する中を歩いていると、だんだん背表紙は破れたりしてるし、手に取ると黄ばんだ紙が目に入る。これだけでも年季が入ったものだと分かる。

その中で、勇者という単語が入ったが見えたので、とりあえずそれを手に取ってみた。

出だしは人間と魔族との関係について書かれていた。

だいたい説明どおり、魔族は力が強く、存在するだけで放つ瘴気というものが、人の精神を蝕むため、人から恐れられていた。

そして、魔族からの被害を食い止めるためにできたのが『勇者制度』。

制度なんて笑っちゃう　と思うものの、書かれている内容はいたって真面目なものだった。

この世界に存在する『力』を強く持つ者を探すため、武術大会のようなものをはじめた。そこで優勝した者が『勇者』になる。

この大会は勇者を生み出すためのものだったけど、人は希望と、そして娯楽の二面から大会を楽しんだという。

確かに、暗い世の中、こういったものは一大イベントで盛り上がるだろう。そして最後に残った強い者が、『勇者』として希望を与えてくれる。

優勝者には多額の賞金が与えられるが、次の大会で新たな勝者が出るまで、勇者として魔族討伐の任につかなければならない。それ

は二年毎繰り返され、勇者の数は二桁まで言っていたという。

ここまで読んで、ふと『勇者を召喚する』ということがないのに気づいた。

書かれている内容は、すべてこの世界でのことばかり。異世界から呼び出すというところがなかった。

仕方なく別の本を探した。すると、薄めの本が目に入った。背表紙にタイトルは見られないので、手にとって見る。

タイトルは『魔王考察』。なんとも分かりやすい題名だ。見ると、歴代『魔王』と呼ばれた者たちについて書かれていた。

『『魔王』とは、魔族の中で桁違いの力を持って生まれるもの。』

うん、これは一番最初に聞いた。

『『魔王』とは、力が他のものより強いというだけで、人のように寿命というものがある。勇者によって倒されなくても、寿命で亡くなるものは多数存在した。』

いや、寿命で死んだもののほうが多いだろう。その力ゆえに、短命のものが多い。

『魔王』とは、『魔を統べるもの』ではない。

『魔王』とは、あくまで力の強いものである。』

これは初めて聞いたよ。

寿命があるなら、放っておけばいいのに。しかも短命なら。

『しかし、ツエーン暦七百九十九年に変わる。』

今までにない強さを持った『魔王』の誕生によって。』

えっと、ツエーン暦というのはこの世界の年号で、今は千三年年

だっけ。

ってことは、大体二百年前で、初めて異世界から召喚された勇者のときの魔王だ。

頭で整理しつつ、ページを捲る。

『人間と魔族　種族が違うのだから仕方ないだろう。共存とはいかないが住み分けはできていたはずだった。

だが強力な魔王のせいで、瘴気は増し、人は精神が侵されていった。勇者を出しても、その瘴気の強さに魔王の居城までたどり着けなかった。再び勇者を選定したが、その者は途中で放棄した。

人々はより魔族を恐れ、恐慌状態に陥った。

そして最後に残った案は、力と力を持った言葉によって、勇者に勝るものを呼び出す『召喚陣』なるものを造り上げた。誰でもいい、助けて欲しいと願って。

そして呼び出されたのは異世界の子どもだったという。しかし、見た目は子どもでも、その力は強く、魔王の居城までたどり着き、そして殺せぬものの、封印するという偉業を成し遂げた。

だが、惜しいことに、その子どもは封印が限界で亡くなったものとされている。』

強ければなんでもいい、か。

でも、強いのを呼び出したら、魔王が出ましたーなんてことはないのかな？

魔王を倒せるほどの強い者　ってのがいない場合、強さだけ求めたらどんなのがでてくるか分かったものじゃないと思うんだけど……うーん。

そこまで深く考えてなかったんだろうなあ。精神的にきてたみたいだし。

そんな感想を抱きつつ、さらにページを捲った。

『魔王の封印のせいかな、それから百年経った今も、新たな魔王の出現は見られない。』

魔族も人の住むところにまで出てきて、蛮行をしない。百年前と比べたら、まさに平和と言えるだろう。

今では勇者も魔族討伐という危険な仕事が少なくなっている。

二年に一度の大会も、人々にとって娯楽になりつつある。』

おいこら、娯楽って……思わず手に取った本を破り捨てたくなつたわ。

んー…でも、封印されていても『魔王』が存在すれば、新たな『魔王』は誕生しないのかな？ 一代に付きお一人様限定？

あ、でも二百年経って新たな魔王が現れたんだし……その辺どうなんだろう？

『封印されていても、魔王はこの世界に居るからなのだろうか？ 百年経った今、新たな魔王の出現は見られない。』

あ、やっぱり同じことを考えていた。

『だとしたら『魔王』とは、ある意味この世界にとって必要な要素なのだろうか。』

人はそれまで魔族の脅威に晒され、平和を願っていた。

そして、それが叶ったのに、今では人々の中で争いが生じている。それを元に考えてみよう。

共通の敵がいるため、人間の間で大きな争いは起こらない。国同士が戦うということがまずなかったのだ、と。』

あれ、この世界って大きな戦争はないんだ。

まあ、魔族に襲われていたらおいそれと戦争なんかで戦力を削れないんだろうし。

そういう意味では役に立ってる？

……まあ、それも微妙だけど。

『だが、百年経った今、人と魔族の間での大きな問題はないが、人の国同士で国境沿いの小競り合いが始まっている。

魔族という脅威がなければ、人は欲が出るのだろうか？

だとしたら 私は『魔族』とは、『魔王』とは、人が一つにまとまるためにある、必要悪であるように思えてならない。』

うわー言い切ったよ、この人。『必要悪』だって。

『人が魔族に襲われるのは心苦しいと思う。できればそのような光景などあってほしくない。

けれど、人々が争うのは、それよりもはるかに見苦しいと思えてならない。

百年前の強すぎる魔王では困るが、その前に存在したという歴代の魔王がいてくれれば と、馬鹿なことを考えてしまうほどに。』

確かにそれは危険思想だ。

でも、こういうのを知ってる。『仮想敵国』だっけ？ あれと似ている気がする。

そういうのがいるから、一つにまとまるって感じが。

この場合は人と魔族との二つだけ。

『けれども、百年前のように異世界の人間を犠牲にするようなことが、あってほしくもないと思う。

勇者にされた異世界の子どもは、その軀を残していないほど凄惨な最後を迎えたと聞く。

このまま、人々が『魔王』の恐怖を忘れてしまい、そして突如それが出現したとき、再び愚かな選択をしないことを切に願う。

ツエーン暦九百二十年 マロー著』

薄い本だったのですぐに読み終えた。

伝える文面は少ないものの、それでもなんともいえない気持ちを与える本だった。

それに最後の文面 『再び愚かな選択を』 ってのは、召喚陣があるから、強いやつ呼んで、そいつに倒してもらえばいいや、という考えじゃないだろうか？

前の魔王のときは最後の苦肉の策のように感じられた。でも今度は？

新たな魔王が現れたというだけで、大きな被害はあまり聞かない人が魔族に襲われているというだけで、国が滅ぼされるほどの脅威はない。

魔王がいて恐ろしいため、それを倒して欲しい。倒せる強い『勇者』を、という感じだ。

しかも、蒼井くんはじめ私たちが召喚される前に、別の勇者を魔王討伐に出したというのも聞いていない。

だから魔王がどれだけ強いのかとか、魔族の数とかそういった具体的な情報はほとんどない。

そう考えると、不安だけが心の中に広がっていった。

06 古い本「魔王考察」(後書き)

とりあえず一区切り。

次から力の使い方と、主人公ケン力売りまくりな話になる…かも(汗)

07 精霊たち

複雑な気持ちで書庫から出たあと、部屋に戻らずそのまま塔の上
に上った。

こういうところなら、たいてい屋上とか、バルコニーとかに出ら
れる場所があるはずだ。階段を上りながら、人気のない適当なこ
ろを探した。

三階分くらい上った後、光が見えたのでそちらへ向かった。人も
いなかったのちょうどいい。そのまま外に出ると、物見のための
場所なんだろうが、小さな面積でバルコニーという印象を受けな
かった。

そこから下を見ても人の姿は見えない。うん、ちょうどいい。

元の世界では第六感とか、第三の目とかいう霊などを見ることが
できる超感覚と呼べるもの。霊を見るのが嫌で、いつも抑えていた。
ここに来てからも同じように抑えていた。でも今、抑えていたそ
れを開放する。感覚だけのことなのに、いつもより視界が明瞭にな
った気がした。

……いや、間違いじゃない。

遠くにはどろどろしたようなモノは前よりはつきり見えるし、な
により 空中にふわふわ飛んでいる小さなイキモノたち。

「……妖精？」

ふわふわと飛んでいたそれらは、私が呟いたのに気づいたのか、
いつせいにこつちを見る。こういう世界ならいるかなと思って“視
”てみたら、やっぱりというか……いた。

小さくてどちらかというとかわいと思えるんだけど、いつせいに
見られると、ちょっと驚くって。思わず後ずさるけど、それらは

一向に気にすることなく。

“あら、わたしたちのこと、みえてる？”

“みえてるみたい？”

風に乗って声のような、音のようなものが届く。

「風の精霊…？」

“うん、そう”

“みえるひと、ひさしぶり”

“やっぱり、ゆっしやは、つよいひと、おおいね”

なんていうか……子どもが拙い言葉で話しかけてくるような、そんな感じ。

でも、風の精霊って肯定したよね。となると、やっぱり風の精霊なんだ。

「見える人いないの？」

“いない”

“いないね”

“すごく、ひさしぶり”

やっぱり拙い言葉で返ってくる。

まあ、一応目の前の小さいのは風の精霊。そうになると他にもいるのかな？

「精霊ってことは、風のほかにもいるの？」

“いる”

“いるよ、したをみて”

「下？」

精霊たちに促されるまま、下を見ると、高さにくらりとする。そういや、高いところはあまり好きじゃないんだっけ。

“ね、いるでしょ？”

“あなたの、めなら、みえるよ”

私の目って……普通の視力じゃないんだろうね。

もう少し感覚を研ぎ澄ますと、庭のあちこちにもそそと動くものが見える。たぶん、これって……

「土の精霊？」

“そう”

“あたり”

風の精霊たちが楽しそうに答える。あとで見に行ってみよう。所詮好奇心には勝てないのだ。

あ、そうだ。

「ねえ、頼みごとでもいい？」

“いいよ”

尋ねると風の精霊は楽しそうに答えた。

あ、その前に、精霊について少し聞いておこう。力との関係も知りたいし。

ってことで、尋ねてみると、風の精霊たちは言葉遊びのように答える。要約するとこんな感じかな。

力ってのは人や魔族が持っている自身の力で、別に精霊たちを使役するものではないようだ。

ただ、相性が合うとその精霊たちが手助けしてくれるから、属性というものが出てくるみたい。自分の気性などが絡んでくる相性みたいなものらしい。風と相性がいいのは、気まぐれ、おしゃべり好き。でも突風のようにまっすぐな性格の場合もある。

まっすぐといえば、火の精霊もすぐ熱くなるまっすぐな人を好むらしい。

と、まあ、あまりこういう性格だからこの属性　と一括りにできないみたいだった。血液型占いみたいだ。

と、軌道修正して精霊といっても、風の精霊なら世界を巡って風を作っているという（しかも超適当に）。

さっき見た土の精霊なら地盤強化かな。土の精霊がいなくなると地盤が緩んだりするらしい。でもそれも適当。定住するのもいれば、移動するのもある。

で、一番驚いたのがこれ。精霊の中で特に序列はないってこと。一番上の精霊王に始まって、高位から下位まで　と思っていたけど、精霊とはみんな目の前にいるのしかないんだって。

精霊王つてのを見てみたいと思ったから、ちよつと残念だった。

……って、ここまで聞き出すのに、すごく時間がかかって、もう空が赤く染まりだしていた。

「いろいろありがとう。で、お願いんだけど……」

“なに”

“なんでもいって”

「じゃあ、魔族の様子を知りたいの。できる？」

なんとつてぜんぜん情報ありませんから。ってことで、世界を巡る風の精霊たちに聞くことにした。

でも、聞いてたら夜になりそう……でも聞かなければ始まらないし。

“ わからない ”

“ わたしたち、あまり、そこへはいけないの ”

「 どうして？ 」

“ わたしたちでも、こわいから ”

魔族の瘴気は精霊たちにも有効なんですか、と思いつつ、はあとため息をつく。

でもまあ、それなら力と精霊を使いつてのと分けて考えることができるのか。要するに、アイテムを媒体にするけど、超能力のようなもんなんだろうね。

“ ごめんね ”

“ やくに、たてなかった…”

ちよつと残念がっている精霊たちに、そんなことないよと答える。

「 なら、人の近くでの魔族の被害状況なら分かる？ 」

“ それなら ”

“ わかるよ！ ”

という、意気のいい返事をもらったので、またもや長々と聞く羽目に。気づくと早くしないと夕食に間に合わない時間になっていた。土の精霊にも話を聞いてみたかったんだけど、それは明日かな。どうせ、私はすることないし、調べものと称してあちこち調べますか。

……と、第三の目を閉じてしまうと、精霊たちは見えなくなっちゃうのかな？ この目なら見えるって言ってたし。

「 ねえ、話しかける前みたいになると、あなたたちと話ができなく

なっちゃう?」

“ たぶん ”

“ だって、いままで、きづかれなかったもん ”

ちよつと拗ねた感情と一緒に返事が返ってくる。そんなに気づいたことが嬉しかったのかな。

でも情報は逐一欲しい。今の状態を維持しなければいけない。

これも『力』に入るのかな。だとしたらこのまま戻ったらヤバイよねえ?

“ やみを、つかえば ”

“ ひかり、じゃなくて、やみ、よ ”

“ まく、を、はるの ”

「膜?」

闇の膜 うっすらと、闇を纏って見る側の視界を鈍らせる……
って感じかな。それを使えば、私自身の存在も希薄な感じになりそう。人にあまり気づかれないうにしたいっていうならいいかもしれない。

闇、闇……暗闇で視界がよく見えない状態を思い浮かべながら、周囲に薄い闇を作る。そしてそのまま、肌ギリギリまで近づけて、固定するようにイメージした。

うっすらと、肌に触れる闇のひんやりとした空気。

「 こんなもんかな? 」

“ すごい ”

“ かわった ”

“ でも、わたしたちのこえ、きこえる? みえる? ”

「 うん、見えるし聞こえるよ、大丈夫 」

精霊たちに向かって答えるけど、心のうちは複雑だった。

だって、なるべく面倒ごとに巻き込まれず、力もばれないようにしながら　って思ったのに、気づいたらアイテム手に入れ、光、闇と強い二属性の力をあつさりと使ってしまった。

どうして嫌だと思っているほうへと行く羽目になるのか。

もしかしたら、あそこでヴァイスさん相手に剣の稽古でもしてたほうが無難だったかもしれない。

いやちよつと待って。下手に剣を覚えてしまうと、持たされた剣との動きの違いが出て、下手すりや怪我をする羽目になる。

……どっちもどっちだ。

まったく、どうして私の人生ってこんななんだろうか。せつかく怪我が治って学校に行き始めたつてのに、馴染めない（これは自分の性格だから仕方ない）し、拳句にこの世界におまけで呼ばれて、戦うという選択肢しかない。

いやまあ逃げるって手もあるけど、逃げても元の世界に戻るチャンスは少なくなる。見たことはないけど、この城にあるという返還の陣　それが一番楽な方法だろう。

でも逃げ出せば、それを使うことはできないというジレンマ。

で、結局、なるべく怪我をしないよう、生き残れるようにと、こうやってあれこれする羽目になるのだ。ああ、蒼井くんのようなお気楽な性格が羨ましい。

“どうしたの”

“なにかあった？”

「いや、なんでもないよ。あ、そういえば名前聞いてもいい？　さすがに『精霊さん』って呼んでたら怪しまれるから」

空中向かって「それでね、風の精霊さん」などとやっていたら、この世界なら頭がおかしいとは思われないだろうけど、新たな力つ

てことで、さらに面倒が増えるに違いない。

“ なまえ、ないよ ”

「 え？ 」

“ すきに、よんで ”

「 いいの？ 名前を付けたら主従になるなんてことはない？ 」

“ いいよ、わたしたち、まぞくじゃ、ないから ”

話の中である名前を与える、もしくは知られることによって、主従関係のようになってしまつのが思い浮かんだので、念のため確認した。

でもその辺は大丈夫みたい。精霊王がいないのに続いて、名前に關しての主従関係もないのに驚いた。精霊たちについては王道パターンから外れた。

あ、でも。

「 魔族はあるの？ 」

“ うん ”

“ だから、きをつけて ”

“ とくに、まおう、の、なまえは ”

「 うん、気をつける。……と、そうだ。あなたたちのこと、 “ リート ” って呼んでいい？ 」

楽しそうに歌うように話をするので、自分の中の語録からそれらしいものを考えた。一応これなら名前っぽく聞こえるよね。

“ それが、なまえ？ ”

“ そう、わたしたち、リート、っていうのね ”

“ いいね ”

“ ありがとう ”

あ、なんか喜んでる。楽しそうにくるくる回りながら、互いに『リート』『リート』と呼び合っている。この雰囲気は和むわ。

風の精霊たちは比較のおしゃべりで、拙いながらもいろいろ話をする。しかも小さくていかにも妖精って感じで、私にとって癒しになってくれそう。

……と、和んでいる場合じゃない。もう日が落ちて夜に近い時間だ。書庫に行くといってあるけど、夕食に遅れて何をしていたのか詮索されるのは嫌だ。

「じゃあ、さつきいったことお願いね」

“うん”

“まかせて”

「あ、あと、なるべくその報告は人のいないところでお願い」

“わかったわ”

「じゃあ、みんなのところに戻るから、またね」

“ええ”

“また”

楽しそうに答えるリートたちに背を向けて、暗い階段を下りていった。

08 不協和音

夕食にはギリギリ間に合った。一番ビリだったけど、ずっと書庫にいて時間を忘れたということを通したら、それ以上言われなかった。

夕食は召喚された五人にディリアさんの六人で食べる。そのときにこの世界の話をしつづ聞くのだ。あまり人が多いと疲れるだろうという配慮から。

けど、今日はその席にレーレンとヴァイスさんがいた。

レーレンは私を見ると軽い笑みを浮かべる。人懐こそうな彼の笑みは、人の心に入りやすいだろう。異性として意識するというより、警戒心が薄れるんだよね。

席に座ると、ディリアさんが口を開いた。

「明後日出立の旅に同行してくれる、ヴァイスさんと道案内のレーレンさんです。ヴァイスさんのことは皆さんもご存知ですよね？」

そりゃそうでしょ。剣の手ほどきされてるんだから。説明しているディリアさんに蒼井くんたちは素直に頷いた。

レーレンのことは知らないのか、「はじめまして」と挨拶している。

「ヴァイスさんはハヤト様たちの指南と、魔王討伐の手伝いのため、レーレンさんはあちこち旅をする商人なので、道案内にと頼みました。それと、私を入れて八人での旅になります」

うん、はつきり言う。しょぼい。

魔族でさえ手を焼くのに、魔王討伐だよ。それなのになった八人しかも、そのうち半分は戦力にならない後方支援。これでどうやっ

て魔王のいる居城まで行くというのか。

大群率いてつても嫌だけど、これはこれでどうかと思う。

とにかくこの人数で、なるべく死人が出ないように気をつけなければならぬわけだ。

そうなることやっぱい情報なんだろうな。とりあえず魔族相手は最低限にとどめて、被害の少ないところを通って魔王の居城に行くのが一番手っ取り早いでしょ。

この世界は人と魔族の二種族で成り立っているんだから、魔族全滅が目的じゃないのだから。

「ディリアさん、今のところの魔族による被害状況と、魔王が現れてからの魔族の固体数や強さの変化はどうなってるんですか？」

魔王がどれだけ魔族に影響を及ぼしているのか。また、その魔族がどれほどの被害を人に与えているのか。とりあえずその二点の確認を取る。

が、またもや蒼井くん、「仲間が増えたつてのに喜ぶんじゃないくて、またそんな心配かよ」とぼやく。しっかり聞こえてるから。顔が引きつりそうになるけど、無視してディリアさんに催促。

「あの、そこまで細かいことは……」

「どうして？ 切迫していたからあの召喚の陣で勇者を呼び出したんだよね？ 書庫で昔の勇者についての文献を見たけど、二年に一度勇者を選んで、それで魔族討伐してたんでしょ？ わ…蒼井くんが召喚される前にいた勇者は？ 今、どこで何をしているの？」

矢継ぎ早に尋ねると、ディリアさんはおろおろした。

ディリアさんが知らないはずがないんだ。魔族の被害状況はともかく、この世界で選ばれた勇者については。

でもこのうろたえ具合から、選ばれた勇者は魔王を討ちに行つて

いないようだった。

「相沢、お前、巻き込まれた腹いせにつてディリアさんをいじめるなよ！」

あー出たよ、蒼井くんお得意の正義感。

悪いことじゃないんだけどね。正しいことは正しい、悪いことは悪いってちゃんと言えるのは、とてもいいことだと思う。それに誰にでも声をかけることができるのは、見習いたいと思うし、最初に学校に来たときは、隣の席だからというだけで話しかけてくれて嬉しかったよ。

でも正義感や優しさだけで、すべて通るわけじゃない世界じゃないよ、ここは。少しただけで分かる。元の世界の平凡といえる日常とはまったく違う世界なんだ。

そして一番大変なことを押し付けられようとしているんだよ、蒼井くんは。

そういうのをやめて、あえて挑発するようなことを言う。

「蒼井くんのいじめの定義が分からないけど、私は別にいじめているとは思ってない。正しい情報の把握は必要なこと。それを聞くのに一番適しているのはディリアさんしかない。できないなら他の人を呼んで説明して」

蒼井くんが睨んでいるのをさらりとかわして、もう一度ディリアさんに向きなおした。ディリアさんからは返答に窮しているといった感じが見える。

どうやら、あの本の著者が懸念した通りになったんだろう。長い間不在だった魔王。それが突如現れて、冷静に対応する前にかかく強いものといった、まず召喚の陣が使われた。この世界で、魔王に立ち向かう勇者を選ぶ前に。

デイリアさん以外のこの世界の人　レーレンは苦笑しているし、ヴァイスさんは顔を顰めている。その様子を見れば、だいたい予想通りなんだろう。

なら、誰を呼んでもあいまいな答えしか返ってこない。ふう、と深いため息を吐いた。嫌な予想ほどよく当たる　とはよく言ったものだ。当たってほしくなどないのに。

呆れてものが言えないでいると、蒼井くんと堤さんがキレた。

「相沢！　お前、いつもいつも…」

「本当ね。私、相沢さんと一緒に行きたくないな。いつも人のこと探って……はつきり言って不愉快」

別に痛くも痒くもないけどね、怪我を負うことや死ぬことに比べたら。

クラスでは馴染めなくておとなしく思われていたけど、言われたら言い返す。私はこういう性格なのだ。黙って見過ごすほど大人じゃない。

「別に堤さんに嫌われても結構。一緒にいたくないは私も同じ。それより　」

あっさりかわされたのが気に入らないのか、堤さんが睨みつける。が、それも無視して蒼井くんのほうを向く。勇者としてもう少ししっかりしてもらわなければ困るんだから。

「問題は蒼井くんだよ。勇者としての自覚あるの？」

「な……？」

「勇者として、どんなことを望まれているのか本当に分かっているの？」

「そ…そりゃ、魔王を倒すことだろう！　んなこたあ、分かってる！　それまでの間、仲良くやろってこっちが手を出してるのに、ケンカ売ってる相沢のほうの問題だろ！？」

蒼井くん、マジギレしたよ……。

手を出してる　その一言で、自分は相手より上にいると思ってることに気づかないんだろうか。そしてそれが一方的なものだということも。

そんな心情は出さずに。

「私はただ情報収集してるだけ。あるとないとだったらあるほうが絶対いいから。そもそもディリアさん自体の説明がなさ過ぎる。突然現れたから魔王を倒すために勇者を、ってのは聞いている。でも、勇者に魔王を倒して欲しいなら、それなりの協力が必要でしょう？　それをないがしろにしてるのに、おろおろしているディリアさんを見てもかわいそうなんて思わないよ」

嫌われるなら徹底的に　　ってことで、思い切り鬱憤を吐き出した。

そう…嫌われてしまうほうがいい。時と場合によっては、自分の身を守るために、この仲の誰かが代わりに傷つくことがあるかもしれないのだから。下手な罪悪感なんて感じなくなるほど、相手のほうから嫌って、自分も嫌いだと思えるようなものが欲しかった。

裏切られるという行為には、何度あっても心が傷つくことには変わらない。でも、傷の深さは相手への気持ちで変わるから。

「だいたいね　　」

返答に窮しているみんなに向かって、さらに辛らつな言葉を重ねる。

「書庫で『勇者』とは二年に一度の大会で優勝したものに与えられる称号みたいなものらしいけど、蒼井くんにはそれに見合う力がある？」

「カリン、言いすぎ……」

私の性格と力を多少なりとも知っているレーレンが、それ以上はやバイといった雰囲気ですぐに止める。

でも私はやめる気はない。

「こういうとヴァイスさんに失礼だけど、ヴァイスさんは隊長だよ？ この国の隊をまとめる何人かいる隊長の一人。この国で一番強いわけじゃない。その人に稽古をつけてもらっている状態で、どれだけのことができると思ってる？」

言葉というのは、ある意味凶器だ。それをふるって蒼井くんを傷つけている。

「デイリアさんだって、旅についていくっていったけど、なにができる？ 確かに後方支援ならできるだろうけど、でも前線に立つのは蒼井くんなんだよ。みんなを護れる自信……ある？」

しん……と、室内が静まり返った。そして暗い雰囲気包まれる。あ、暗いといえば、闇をまとったこととか、第三の目のこととか誰も気づかなかったつけ。

思ったより隠すのは簡単なのかな？ などと思っていると。

「なら、相沢。俺と勝負しろよ。俺のこと信じられないなら、戦ってみれば分かるだろ？」

はい？ どうしてそんな話になるわけ？

「いや、カリンの持った剣は試合には向かないものだからやめておいたほうがいい。勇者が旅に出る前に怪我をした、なんて噂にはしたくないからな」

きょんとしているとヴァイスさんが蒼井くんにやめるようにと説得していた。

けど、なんとなくその言い方が蒼井くんのほうが怪我をする前提っぽくて、それが余計に蒼井くんを刺激した。

「そんなこと分からねえだろ！ 相沢だって俺の実力をしりゃ少しは黙るだろっ！」

「なら、明日の稽古中に互いの力を確認する ということはどうですか？ 私も、少しそういったものが必要だと思います」

蒼井くんはやる気満々みたいだし。含みのある内容をこちらを向いて話すディリアさんもいるし。

「別にいいよ、好きにすれば」

投げやりに答えて、私は席を立った。食事は中途半端に残っているけど、これ以上彼らと顔を合わせていたくなかった。

立ち上がった私に誰も何も言なかったため、そのまま一人部屋から出た。

そしてため息をつく。自分の時いた種とはいえ、出るのはため息だけだ。

本当に嫌なら静観していればいい。適当なところにいて、適当に力を使って。でも、それができるほど、私はまだ達観できてないん

だ。

08 不協和音（後書き）

傍観者でいたいけど、傍観者になりきれないという状態。
次は幕間で別の人一人称の予定です。

08・5 知ろつとしないと見えないもの（前書き）

8と9の幕間で、篠原愛美^{しのはらめぐみ}視点の話です。

08・5 知ろつとしないと見えないもの

私は篠原愛美。しのはら まなみ 高校一年生。

高校入学したてで気になる人ができた。蒼井隼人くん 顔もいいけど、明るくて誰とも気軽に話ができて、たまたま好きなアーティストが同じだったことから、他の子より少しだけ話をするのが多くなるようになった。

同じ中学出身の友だち、恵理えりは私の気持ちに気づいたのか、協力してくれた。恵理はさっぱりとした性格で、男友達も多い。だから私を引っ張って、蒼井くんたちに話しかけてくれた。すごく嬉しかった。

でも、普通に話をするというそんな些細なことでも嬉しくなる気持ちは、ずっと休学していた相沢花梨あいざわ かりんが出てきたことで終わった。はじめて見たとき、あ、嫌だなんて思った。だって彼女はかわいいというより綺麗といえる顔立ちに、高校一年生とは思えない落ち着きを持っていて、教室にいただけでも存在感があった。

賑やかに話をして人を惹きつける蒼井くんとは別の存在感。一人でも大丈夫なしっかりとした“自分”というものを持っている人。

無口な相沢さんを蒼井くんは心配して、よく声をかけていた。「花梨ちゃん」って。

そのたびに嫌な気持ちになって、気づくと嫌味を言ったりしていた。しまった、と思っても、口に出した言葉は消えず、きつと相沢さんを傷つけていたと思う。

でも相沢さんは一瞬表情を変えた後、すぐに気にしてないような風で嫌味を流してしまう。それが余裕に感じさせて、また相沢さんに対して理不尽な気持ちを抱く。

それが元の世界での日常で、はつきりいって私は相沢さんが苦手

だった。

相沢さんが出ていった後、蒼井くんと恵理がブツブツと文句を言っていた。

私はといえば、面と向かってケンカを売ってくる相沢さんに何も言えず、ただ黙って成り行きを見ているだけだった。

私は、相沢さんの考えていることは理解できないと思ってた。でも理解できる一面を、今日少しだけ知った気がした。一日けが人の治療をしていた私には、彼女の心配もなんとなく理解してしまった。

複雑な心境のまま夕食を終えて、恵理と一緒に部屋に戻った。

恵理と私は仲がいいから相部屋になった。蒼井くんと大野くんも相部屋。相沢さんだけが一人の部屋。私たちの関係がギクシャクしていることからの配慮かららしい。

最初は安心したけど、知らない世界でただ一人で過ごす世界は、相沢さんにこういう気持ちにさせるんだろう。一人でいるのなら、私たちとの関係も改善なんかされないのに……複雑な気持ちで窓の外を見ていると、恵理がベッドにぼすんと座って。

「まったくム力つくよね。そう思わない？　愛美」

「相沢さんのこと？」

「そうよ、相沢さん！　自分が中途半端だからって、蒼井にケンカ売ってばかり。愛美だってあの子のこと、嫌ってたよね。ム力つかなかった？」

ベッドに寝転がって仰向けになりながら大声で文句を言う恵理。そりゃ私だってここに来るまで、相沢さんに嫌味言った。蒼井くんが構うから。焼いて、馬鹿みたいに。

でも、ここにきて、蒼井くんが声をかけてたのは、ただ単にクラスに馴染めない相沢さんに対して気遣っているだけだって分かった。ここに来てからは、相沢さんのことを「花梨ちゃん」と名前で呼ばないで、「相沢」と呼んでいる。

蒼井くんにしたなら、前は馴染めない相沢さんに気軽に話をするこ
とで、仲良くしようとしていたんだ。そしてこっちではみんなと同じように苗字で呼んで、仲間として接してる。

それにケンカを売るような言い方をする相沢さんには、女の子に
対して接するような態度じゃなかったし。

相沢さんのほうはどう思っているのかよく分からないけど、本当に嫌だったら私たちから離れると思う。一人でもいられる人だもの。でも険悪な雰囲気を作っても一緒にいるってのは、本当に心配しているからじゃないのかな。そう思ったら、私は相沢さんに対して、前のような文句とか嫌味を言う気にはなれなかった。

できれば多少の協調性は持つてほしいとは思っけど。

「聞してる？ 愛美」

「聞してるよ、恵理。私は」

「分かってるって、愛美はあの子のこと嫌ってたもんね。でもあれだけ言われれば、口を挟めるスキってもんがないわ。蒼井くんは頑張って文句言っただけさ」

あー、明日が楽しみ。きっと蒼井にコテンパにされるよ、と恵理は笑う。

「恵理……私は、別に怒ってないよ」

「……え？」

「相沢さんの言うことも一理あると思うから」
「なに言ってるの？」

とたんに気に入らなそうな顔をする恵理。

そうだよ。ここへ来るまで、私のほうが相沢さんのことを嫌ってて、恵理のほうが宥めるほうだった。

なのに、あんな台詞を聞いたのに、怒ってないという私に、恵理が変に思ってもおかしくないと思う。

「あのね、私、今日一日救護室にいたじゃない？」

「そりゃ知ってるよ」

「うん、そのときね……怪我するってホントに怖いなって思ったんだ。怪我っていつても、消毒して絆創膏貼ってればいいって怪我じゃないよ？」

もっと大きな怪我だよ、と念押しして。

「ここじゃ、身を守るために剣とかで稽古してるみたいなんだけど、弱いといじめじゃないけど、的にされるんだって」

「……は？」

恵理の顔が少し歪んだ。

でも、救護室で同じように手当ををしている人と話をしながらしてたから、ある程度私なりに入った情報ってものがある。

聞いて怖いと思ったのが、魔王が現れたことを恐れて力をつけなきゃって思うものの、すぐにそれが身につくわけじゃない。だから弱い人を相手にして勝って、強くなったって思い込もうとしている人が多いんだって。

だから救護室に来る人は自然と決まる。弱い人は何度も来る。た

まに戻りたくないと言ぐ人もいるって、苦い顔をしながら救護室にいたおじさんが教えてくれた。

そのことを恵理にも説明したら、恵理の表情はさっきより複雑になった。

「だから、相沢さんの言うこと全部に共感はできないけど、怪我をしたくないから自分ができる範囲であれこれ考えているんじゃないかなって思ったの。剣の稽古とかしなくていいなら、他にすることといったらやっぱり情報収集じゃないのかなって」

ここまで言うつと、恵理はしかめっ面をしながらも反論はしなかった。

「相沢さん……たぶん、転ばぬ先の杖って感じなんじゃないのかな？ やる気になっていいる蒼井くんにしたら鬱陶しいって思うんだろうけど」

怪我が治って出てきた相沢さんを見たとき、同じ高校一年生なのに、どうして大人びて見えるんだろうって思った。

それは怪我の痛みに耐えて、そして大変なりハビリをして そんな経験をしたんだと思う。その経験が、相沢さんを一人でいられる強さにしているのかもしれない。

それに相沢さんが言ったように、この世界のためにがんばる必要なんてどこにもない。でも、そんなこと、私だったら言えない。反感を買ったら怖いから。役に立たないと思っても、ケンカを売るようなことをしたら、どんな扱いされるか分からないもの。

でも相沢さんはそれをした。

したのに、みんなと離れないで別の方向から情報を集めたりしているのは、みんなが気にしないことまで考えて、何かあったときにすぐに対処できるようにしようとしているから……？ そう思うと、

相沢さんってすごいって思った。

「どうかなあ。どちらにしろ、それならもう少しやり方ってのを考えて欲しいよ」

恵理は稽古中のやり取りも見ているせいか、相沢さんはやる気なしと思っっているみたい。代わりに

「蒼井くんはやる気になったよね」

「そりゃ、あれだけ言われればなるって」

相沢さんに対して反感を持って怒っている恵理。その気持ちが分からないわけじゃない。

でも、相沢さんの気持ちが理解できるわけじゃないけど、救護室に一日いて、怪我をするってことを知って少しだけ見方が変わったのは確か。

「とりあえず問題は明日だよな」

「まあ、蒼井が勝つでしょ。そうすれば相沢さんも考えを改めるんじゃない」

「そうかな」

「そうあってほしいね」。私は相沢さんのことよく知らないけど、相当性格悪いんじゃない？ ホント、相沢さん一人のせいですごく険悪だし。でも蒼井に負けたら言うこと聞くしかないんじゃない？」

知らないなら、少しは知ろうとする気持ちも必要だよ、と言いかけてやめた。そういった気持ちは、自分から気づかないと意味ないから。

できるならみんなと仲良くやっていきたいんだけどな と思う中に、相沢さんも入っていることに気づいた。

ここに来て、
少しだけ相沢さんの見方が変わっていたんだ。

08・5 知ろうとしないと見えないもの（後書き）

今まで影の薄かった愛美一人称の話です。

主人公の花梨以外では、彼女の一人称が少しずつ入る予定。

09 模擬試合

次の日、夕食のときにいったように蒼井くんと模擬試合をするこ
とになった。

名目なんて『稽古』の一言で済む。それを聞いた周りの人は物見
高く集まってくる。

二年に一回の大会ならもっと派手なんだろうが、そんなものに出
たいとも思わないので、この見世物のような状態に、すでにうんざ
りしていた。

「おい、相沢。やめてほしいって言うんなら、やめてもいいぜー」

もらった勇者の剣を肩でとんと叩きながら言う。蒼井くん、
それ、悪役の台詞だから。ツッコミどころ満載な気がして、ふーと
ため息をついた。

嫌味たらしく蒼井くんの台詞を流して、ヴァイスさんとディリア
さんのほうを向く。

「あの、本当にいいんですか？ この剣、抜き身にしたら蒼井くん
を“敵”とみなしますよ」

なんたつて、私に対して敵対心燃やしてますから と心の中で
付け足す。

この剣は抜かないと意味がない。鞘をつけたままでも反応すると
厄介だから、抜き身にしたときだけ力と敵に反応する。

そんな剣を持たされたのだから、互いの『力』で模擬試合と
なると、代わりのものも使えないし、鞘をつけたままでも意味ない。
互いに抜き身の剣でやりあう以上、大怪我をする可能性もあるのだ。
その意味合いをこめて大丈夫かと問う。

ディリアさんは蒼井くんが負けるわけがないと思って「平気です」といい、ヴァイスさんはなんともいえないのか、あいまいな笑みを浮かべるのみだった。

止める気ないんかっ!?

せめてヴァイスさんには少し期待したんだけどな…。ディリアさんのほうが立場は上だから、ディリアさんがオーケー出しているのに反対するのは難しいらしい。

私もこの剣がどれだけ使えるか分からないから、その辺は知りた
いし……。ま、いいか。

ただ、この剣がかなり優秀だった場合、勝敗は私も分からない。
剣を見ながら自棄気味に鞘から抜き放つと、蒼井くんの怒気に剣が
反応して小刻みに震えた。

「はじめ!」

ヴァイスさんの声が響く。同時に蒼井くんがこっち向かって駆け
出した。力で風を使っているのか勢いがいい。すぐに私のところま
で来て剣を振り下ろす。

その剣に対して、私は体を軽くひねりながらかわした。この剣は
大きな動作については、避けるという選択肢も持っているらしい。

その後も私の力では劣る場合は、避ける、受け流すなどといった
動作であまり動かずに蒼井くんの剣からすり抜ける。たいした動き
もない私に対して、蒼井くんは大きな動作と『力』の消耗のため、
少しだけ息が上がり始めていた。

それにしてもこの剣　私の意志も伝わっているんだろうか。あ
まりやる気がないために、流す、かわすといった選択ばかりしてい
る。

無闇に敵を葬る危ない剣かと思いきや、使い手の意思を汲み取ってそれに応じた動きをする。思ったより優れものかもしれない。そうすると、ここで攻めに転じたときどうなるのか気になってくるわけで。

剣もそれを感じ取ったのか、受けて流して蒼井くんの姿勢が崩れたときを狙って動く。蒼井くんは慌てて持っている剣でそれを防いだ。

大剣とまではいかなくても大振りの剣と、細身の剣とではぶつかり合ったときに長引けば不利になる。蒼井くんが受身になっている間に一度引いて、もう一度チャンスを探う。

すると蒼井くんは息を整えて剣を構えた。剣道をやっていただけあって構えはしっかりとしている。けれど、いざ斬りあいになったとき、いちいち構えてなんていられない。

剣は私の意志を汲み取ったのか、前に踏み出し攻撃する形を見せる。蒼井くんはそれを見て、剣を振り上げた。抜き身だということを忘れてるな—と思わないでもなかったが、そこはとりあえずおいておこう。

三步目で体を思い切り低くし、蒼井くんの剣をかわして、立ち上がる動作と同時に蒼井くんの懐に飛び込む。そのときに、素早く剣を短刀のように持ち直し、中腰の状態のときにはから空きになった蒼井くんの胴体に剣を横にピタリとつけて、“止めた”。

「待て！ 終わりだ！」

ヴァイスさんが慌てて間に入って止める。

“敵とみなしたものを斬る剣”だから、蒼井くんが怪我をすると思ったのだろう。でもちゃんと止めていたんだ。蒼井くんの服に触れるかどうかのところで。蒼井くんに向けていた剣を下ろして立ち

上がってから、剣を鞘に収めた。

蒼井くんはこうなるとは思わなかったのか、目を見開いて固まっていた。

そっぴや、蒼井くん、剣道やってるけど、大会で優勝とかまでは聞いてなかった気が……五人の中では一番剣に慣れてはいるんだらうけど。

でも一番やバイ結果になった。『勇者の従者』が『勇者』に勝っちゃったよ。はー……もういいや、悪役に徹してやるよ。面倒くさい。

はあ、と大げさにため息をついて。

「で？　たいした腕だね、蒼井くん。それで『勇者』なんだ？」

嘲るように言うと、蒼井くんは悔しそうに歯噛みする。それに追いつきをかけるように。

「“おまけ”に勝てないようじゃ、もう少し頑張ったほうがいいんじゃない？」

馬鹿にしたような口調で止めを刺して、ディリアさんに一言「もう、用ないよね」とだけ告げると、私はその場から立ち去った。

私は稽古場から立ち去ったあと、昨日レーレンと話した庭に来ていた。

木々の合間に土の精霊たちがもそもそと動いているのが見える。

さて、どうやって話しかけようかと考えていると。

“すごいね”

“やっぱり、ゆうしゃ、は、すごいね”

リートたちが楽しそうに言う。

「いや、私は『勇者』じゃないよ。あ、私の名前は花梨^{かりん}ね」

“かりん？”

“それがなまえ？”

「そうだよ。それに私は勇者についてたおまけだよ」

蒼井くんにだって『巻き込まれた』と言われたし、蒼井くんにも勝つても、自分が勇者になりたいわけじゃない。ただ、身の危険つてのを知ってほしかっただけ。

“おまけ、だって”

“ゆうしゃより、つよいのに？”

“ちゃんと、ちからを、つかえるのに？”

こちらの複雑な心境なんて関係なく、リートたちは楽しそうにおしゃべりしている。

……って、ちゃんと力を使える？ みんなだって力を使ってるのに？ 気になってリートたちに話しかける。

「ちゃんと使えるってどういう意味？」

“そのまま”

“ちから、は、ちから”

“それを、ちゃんと、つかえるのは、かりん、だけ”

あまり言葉遊びをしたい心境ではないんだけど、唯一の情報源が
リートたちなので、根気よく耳を傾ける。

“ほんとうは、ひとがいう、ぞくせい、なんてない”

“そうそう。ちゃんと、つかえないから、ひとがつくった、かつて
な、おもいこみ”

“けいとう、つてのは、あるていどあるよ”

“でも、こうげきてきか、ほしゅてきかの、ちがいだけ”

身も蓋もないような話だ。

でも精霊が見える人はいないし、魔法とかで精霊とかを使つてす
るのじゃないなら、自己の力になる。たとえば、相手を押し出すつ
もりで圧力をかけた場合、それが人にとって『風を操った』と取れ
るのかな？

そもそも『力』そのものがどういったものなのか、人がよく分か
つてないんだろう。

「でも難しい言葉知ってるね」

“ひとのことは、あちこちで、きくから”

“きいてみると、たのしいよ”

好奇心旺盛な風の精霊はくすくすと笑いながらしゃべる。

そんな風の精霊と違って、土の精霊は無口で近寄って来ない。警
戒しているのか、見ていることに気づいてないのか、どちらか分か
らないけど、リートたちと話しても自分から口を出そうというのは
いなかった。

“しょうがないよ”

“つちのせいれいは、むくちで、のろのろ”

“そうそう、ころがすと、おもしろい”

なかなか物騒なことを平気で口にするリートたち。風の精霊、リートは気まぐれで、楽しいことが大好きらしい。

土の精霊は、あまり動かないで仲間同士ともあまりおしゃべりしない無口な存在らしい。まあ、大地とか地の属性とかいえば、我慢強いとか、しっかりしているとかそんな風に言われるし。その辺はどこへ行っても同じなのだろう。

「いや、それはどうかと思うから……それよりも少し力について聞かせて？」

脱線しかけて話を元に戻すために、私はもう一度リートたちに『力』について尋ねた。

09 模擬試合（後書き）

迷ったけど、結局勝たせてしまった；
なんか後ろから勇者を育てる存在になりつつある…？ 苦勞性な主人公になりました。

10 嫌な存在として

リートたちの会話はイライラしていた気持ちを緩和させた。いや違う。会話はなかなか進まないから疲れるけど、懐っこいリートたちに和まされる。手を出すとその上にちょこんと座る。手の上に重さは感じないけど、存在感は感じる。

今話しているのは力のこと。

この世界でいう『力』が超能力のようなものなら、リートたちが言うように属性なんて関係ない。ってことで、その説明を根気よく聞いている。けど、飲み物でも持ってくればよかったな……と、ちよっと後悔している。

“それでね、きづくと、そうなってたの”

“でも、わたしたちのこえ、だれもきこえないから”

“そのままになっちゃったんだよね”

「そ、そう。でも、昨日私に『闇』を使えばいいって言わなかった？　ってことは、属性ってあるんじゃないの？」

第三の目は闇をたとえば気づかなくなる、と教えてくれたのはリートたちだった。その前の指輪を見えなくさせるのは光だったし。それらの説明をすると、リートたちはくすくすと笑う。

“だって、それは、あたりまえ”

“それを、つかってるから、あたりまえ”

と、似たような答えが返ってきた。

さて、考えてみよう。闇を纏うというのは微妙に違う気がするけど、自分自身を他人から分かりにくくするというのは、薄暗い中にいるのに似ている。

それにレーレンから教わった目くらましは、光の角度を変えることで見えなくなるというもの。どうしたらいいか分からないから、適当に乱反射するようにしたけど。光の屈折によって目は物を認識するから、『光』を使っている。

同じように考えて、相手を吹き飛ばす場合は空気が動く風を使う。川とかで流れを変えたりとかすれば、水を使うつて感じなのかな？

そんな解釈でいい？ と尋ねると、リートたちは肯定する。

“でも、それは、こういうふうにしたい、つておもったけっか”

“わたしたちが、ちからをかす、わけじゃないよ”

「なるほど。あ、そいえば治療系は属性なんて関係ないよね。それらしい光とかだつて本当の光にはそんな力がないし」

でも力の意味をちゃんと分かってないから、それを発動させるアイテムが必要になるんだろう。そうすることによって、自分から力の『属性』を狭めてしまうんだろう。

“そう、よくわかったね”

“かりん、べんきょうねっしん”

夏休み前にはある程度リハビリを終えたものの、学校に通うまでにはならなかった。でも、担任の先生が親切で、何度も見に来てくれたし、復帰後のテストで及第点を取れば何とかしてくれるよう交渉してくれた。だから、夏休みはほとんど勉強三昧で

「はは…ちょうどどこに来るまで補習やらなにやらでね……つて、あんまりいい記憶じゃないから、その話はやめよう」

掘り出した記憶をパタパタと手を振りながら頭から払い出した。

それから椅子から立ち上がって、木の下に向かう。もそもそしている土の精霊に「こんにちは」と話しかけた。

土の精霊はころころ丸っこいのとか、毛糸玉を連想させるようなもこもこしたのとか。人を小さくしたようなリートたちとだいぶ違う。

“こ…ちは？”

“だれ…？”

なにより……反応がのろいし言葉も少ない。

リートたちのいうことが分かる。でも、丸っこい体にくりくりの目で見られると、撫で回したくなるかわいさだ。思わず掴んでぐりぐりしてしまう。

“なあに〜？ なあに〜？”

「そういうこと言われると余計かわいいから！」

パニックになっているけど逃げることもしないので、かわいいからぎゅうぎゅう抱きしめてしまう。するとリートたちが。

“つまんなーい”

“かまって、かまって”

と、頭の上にどかどかつとまとまってくつついてきた。なんか…リートたちにはずいぶん懐かれたようだ。「とりあえず待っててね」とだけ伝えて、土の精霊にも魔族による被害の情報収集の協力を頼んだ。

土の精霊たちはあまり動かないのでここにいる子たちは知らないというけど、近くの土地にいる子と多少の交流があるらしい。その子たちへ伝えてくれるのと協力を承諾してくれた。

……………どちらかという和无理やり？ 土の精霊はリートたちが言うように無口なので、リートたちに輪をかけて気長に待たないと話にならない。それが待てなくて、さくつと勝手に決めさせてもらった。

ついでに土の精霊の呼び名は『エルデ』にした。これまた自分の少ない語録から合いそうなのを。

残るは、火、水、光、闇なんだけど、水はともかく他の精霊たちは情報収集には向かない気がする。そもそも、光と闇の精霊ってどうやって話すんだろう。情報収集は水の精霊だけで終わりにすることにしよう。

芝生のように整えられた草の上で座っていると、篠原さんが走ってくるのが見えた。

うーん……もしかして、文句を言うために探したのかな。篠原さんにはチクチク嫌味を言われたからなあ。でも今回は蒼井くんが『負けた』のが原因だし。なんて思っていると。

「相沢さん！ やつと見つけた」

ん？ どうやら文句のためじゃない？

でもこれだけじゃ分からないから、リートとエルデは目に入れないようにして（見ると何か言いたくなるから）、改めて篠原さんのほうを向いた。

「なに？」

「なに、じゃないよ。謝りにいこう！」

「……………は？」

話の展開についていけず、間拔けた顔で答えるのがやっとだった。

「相沢さんは知らないけど、あのあと大変だったんだよ。蒼井さんとデイリアさんは恥じかかされたって思ってるし、大野くんとヴァイスさんは一応もつと頑張ろうねって励ましてたけど……」

「いや、別にそれでいいんじゃない？」

負けて悔しがる気持ちがあるなら、もつと強くなるうって思うはず。デイリアさんはともかく、大野くんとヴァイスさんも励ましてくれたんだから、別に問題ないと思うんだけど……

「だから！ 怒ったデイリアさんが相沢さんのことを仲間として認められないって！」

「なんか……ツツコミどころ満載な発言だね。無理やり連れてこられたのに、仲間もへったくれもないし」

馬鹿馬鹿しいにもほどがある、と無然とした表情で答えただけど、篠原さんの顔はかなり真剣だった。

どうして今になって心配するんだろう？

「確かにそうかもしれないけど……でも、デイリアさんとエリは相沢さんのことを助けないって」

はい？

分からないでいると、篠原さんは話を続けて。

「これから旅に出るのに、貴重な戦力だから連れて行くけど、でも護らないって言うの。それに私にも、相沢さんが怪我をしても治さなくていいって……なんか怖くなって、そんなのおかしいよって言

つたのに、仲間じゃないから護る必要なんてないって。デイリアさん、巫女なのに……平気でそんなこと言うんだよ。怖いよ……」

うん、まあ……篠原さんの話はある程度は予想内のことだった。デイリアさん、妙に蒼井くんに肩入れしてるし。堤さんも白黒はつきりさせたいタイプの人だから、こっちの回りくどいやり方にイライラしてるのも分かる。だからある程度予想してたんだよね。ただ、予想外だったのは篠原さんが心配してくれたことだった。

「なんか、子どものケンカみたいね」
「相沢さん？」

心配している篠原さんには悪いけど、私は小馬鹿にするような口調で大げさに肩を竦めて見せる。

篠原さんはそんな態度を見て、緊張していた顔が間抜けた顔になる。

「幼稚、ってこと。馬鹿馬鹿しい。高校生にもなってガキ過ぎるよね。デイリアさんも最高位の巫女ってことで奢ってるみたいだし。別に私、助けてくださいなんて頼んでないよ。あくまでちゃんと元の世界に返せとしか言っていないもの。寝言は寝てからにしてほしいわ」

嫌味を長々と語ると、篠原さんは顔を顰めた。うん、これでまた私は嫌な子に戻ったかな。

「まあ、わざわざ言ってきたことはありがとう。でも、別に自分が悪いことしてないのに、謝る必要なんてないから」

「そんな単純なことじゃないよ！ みんな変だよ！？」

「あー…もしかしたら、魔族の瘴気にやられて頭おかしくなったん

じゃない？」

「なんで……」

「ん？」

「相沢さんだって、なんでそんなケンカ売するようなことばかり言ってるのよ！ もう知らないっ！」

泣きそうな顔で叫んだ篠原さんは、それだけ言って走り去っていった。

その姿を見て、ふーとため息をつく。

私の心配をしたり助けようとすれば、篠原さんだってやばいんだよ。

さつき篠原さんに言ったのは嘘じゃない。第三の目を開いてから、より濃く見えるようになった瘴気は、この城の中でもあちこちに見かける。

最高位の巫女であるディリアさんの周りにも、勇者の蒼井くんの周りにも

「だからまともな考え方ができてないんだよね。そんなものの餌食になる必要なんかないんだよ、篠原さん……」

呟くように言うと、いつも楽しそうにしゃべるリートたちが、少しだけ悲しそうに“かりん”“だいじょうぶ？”と心配そうに声をかけてくれていた。

10 嫌な存在として（後書き）

感想ありがとうございます。今回は精霊のお母さん（笑）です。

精霊の名前。

風の精霊『リート』 歌う から。

土の精霊『エルデ』 土壌、地球 から。

次回はレーレンとの会話で、カリンの態度の理由がちょっとだけ出てくる予定。

11 ただ単に、守りたいだけ。

ぐるぐると視界が回る。倒れて意識をなくしてしまったほうが楽な気がした。

第三の目を開いてから、周囲に漂う瘴気と、まともな考え方ができなくなつて好戦的になつていている人たちを見て、逃げ出してしまいたいと思つた。

でも、篠原さんみたいな人もいるんだ。治療系が得意な彼女の周りには、浄化作用があるのか瘴気がなかった。だから他の人の変異に気づいて、気になつて来たんだろう。

でも、私が謝つて終わる話じゃない。

今ここで適当に話をあわせても、どうせ、またぶつかる日が来る。彼らが瘴気に蝕まれている限り

「あ、ここにいた。大丈夫、カリン？」

頭上から声がする。声の主は……

「レー……レン」

俯いていた顔をゆっくりと上げると、最初に話したときと変わらないレーレンの顔。

なにより、彼も瘴気に蝕まれていなかった。

「大丈夫？ カリン、顔色が悪い」

「ちよつと目が回るだけ。大丈夫だよ」

頭を押さえながら座りなおすと、レーレンが隣に座る。

「ずいぶん苛々してるみたいだったけど、本当に大丈夫？」

「まあ、一応……だいぶ瘴気の濃さにうんざりはしてるけどね。レーレンこそ大丈夫なの？」

「まあ、こっちなんとか。あ、このせいかな？」

といってズボンのポケットをこそそやって取り出したのは、携帯のストラップのように何かにつける紐がついた、三センチくらいのクリスタルの玉、その下に小粒のタイガーズアイに、ふさふさとした紐のかたまり。たぶん、これがレーレンのアイテムなんだろう。

「でも、なんでクリスタルのほうが大きいの？」

属性なんて関係ないってリートたちから知ったけど、人が持っている知識でいけば、レーレンは地の属性だと言っていた。だとしたら、玉の大きさは逆だと思うんだけど……

「言ったよね、僕の力は弱いつて。使えるほどじゃない。でも、クリスタルは力に関係なく、浄化や守護、増幅という力を持つからね。カリンの指輪も土台がクリスタルなのはそのせいなんだ」

「了解」

だからクリスタルのほうが大きいんだ。それを常に身につけているから、レーレンは瘴気にやられないんだ。

……………ん？

「それなら、クリスタルをみんなに配れば、瘴気でおかしくなることはないんじゃない？」

「まあそれは考えられたよ。でも、アイテムとして使えるほど純度の高いクリスタルってなると、また話は別だね。気休め程度のものならみんな持つてると思うけど」

「そうなんだ」

確かに宝石には内包物や大きさと値段変わるものね。アイテムの場合は特に内包物かな。余分なものがあると、それが邪魔するのかもしれない。

考えていると、レーレンが軽く頷く。こちらの考えが分かっているみたいに。

「一応、旅に出るときにはみんなに持たせるから、うちも純度の高いのを仕入れたけどね。瘴気にやられちゃっている場合、そのクリスタルでどこまで浄化してくれるか……」

「分からないってことね」

「そう、デイリア様まで……だからね」

「知ってたんだ」

「一応ね」

知ってても、何もできないのって歯がゆいね　と、レーレンが付け足す。

うん、そうだね。その気持ちは分かるよ。素直に頷くと、レーレンが尋ねる。

「どうして悪役ぶってまで、カリンはみんなを守りたいの？　頷いたのが理由？」

レーレン……鋭いよ。でも、レーレンから言わせると、普通の人が見ればあからさまに分かるような接し方を、私はしてるらしい。

「さっき来たマナミって子。あの子を突き放したのも露骨過ぎるよ。まあ、みんな冷静な判断つてのができなくなっているから仕方ないと思うけど」

冷静な判断　確かにそのとおり。篠原さんだって、瘴気にやられてはいないけど、不安は感じているのか、いつになく敏感だし。瘴気に蝕まれている人たちはなおさらだろう。

「でも、レーレンはその『冷静な判断』ができるんだよね」

一介の旅の商人　の割りに、物事をきちんと把握し、また瘴気にも蝕まれない精神。それだけで普通じゃないよ、はっきり言って。そう返すと、レーレンは目を丸くしたあと、くすくすと笑う。

「レーレン」

「いや…ごめん。確かにそう思われても仕方ないと思うけど……逆に考えてみてよ」

「逆？」

「そう、僕は旅の商人だ。いつてしまえばどこにでも行ける。分かる？　この国が強い『勇者』を他の国より望むのは、魔王の居城が近いから　だよ」

「あ…」

一番最初に地図を見せてもらったとき、魔族が固まって存在するところがあった。それがこの国の北西のほう。大きさは小さいけど、魔族にとつて国といつていいほどの大きさ。そして、魔族の地にとつて南がここで、東は海、西は他の国に隣接しているけど、魔族を警戒しているため、近くに村はない。北は凍りに閉ざされた地なので、ここも人はほとんどいない。いるのは極寒を好む魔族のみ

いつてしまえば、この国の北西国境付近が一番魔族の住む地に近い。魔族の地のほかに、あちこち魔族は存在するけど、数の多さや魔王の居城（代々の魔王はそこにいるらしい）などから、一番魔族の脅威を感じるのはこの国だろう。

でも……

「要するに、レーレンは逃げるんだ？」

「まあね。逃げてみつかは被害に遭うだろうけど。まあそう思っているほうが気が楽だと思うことにしてる」

それじゃあ意味ない　そんな私の気持ちを見透かしたように、レーレンはため息交じりの笑みを浮かべた。

「言いたいことは分かるよ。それに対して非難されても仕方ない。要するに気持ちの問題なんだよ」

「なんか複雑な気持ち？」

確かに力がなければ、逃げ回るのも手だよね。それに人と魔族の二種族がいるけど、歴史上どちらか片方が完全に支配されたという記録もなかった。

魔王が短命なら、その間だけ、逃げるという選択肢もある。ただそれができるのは、レーレンのような自由な人のみなんだろうけど。

「実は今回案内を買ってでたのも、そんな弱腰な自分が嫌だったのもあるんだ。あと、勇者だって言われているのが僕より年下なのに、僕は逃げるんだっていう劣等感とか。カリンのいうことは正しいから、余計に痛いんだよね」

「……ごめん、ちょっと気をつける」

「いや言われても仕方ないことだから。あ、でも実際の問題は、魔族の地より点在している魔族のほうが活性化していて、他国での被害のほうが大きいから、逃げて意味がないんだけどね」

「……は？　ここより他の国のほうが被害が多いの」

「うん、実は。だからディリア様も全部把握してないんじゃないかな？」

なんで魔族の地に近いこの国より、他の国のほうが被害が多いのかな。

魔族の地、魔王の居城、そこが魔族の拠点だろうに、その近くじやなくて遠くの地で　うーん……考えられるのは、点在している魔族が、魔王の誕生によって活気付くってことだけど。

悩んでいると、レーレンが「確かな情報じゃないんだけど……」と前置きしてから話し出す。

「二百年前に封印された魔王ってまだそこにいると思うんだけど……」

「う、うん。下手に動かさないほうがいいかって聞いたけど……それが何か？」

二百年前の魔王と聞いて、ドキツとした。今の魔王じゃなくて、前の魔王のせい？

「いや、封印しているのはクリスタル。要するに浄化作用があるんだよ。だから二百年もの間封印できてるんだろぅし……そのクリスタルの影響が、魔族の地にも影響を与えているんじゃないかなって僕は考えてる」

「浄化作用……ね。でも、完全じゃないよね。魔族はいるし、魔王も誕生した」

私の問いに、レーレンが肯定するように頷く。

各地を旅するレーレンはディリアさんよりほど情報通で、ためになる情報をくれる。

二百年前に魔王が封印されてから、魔族は彼らの地から出て各地に散ったものが多いという。で、今暴れているのは、魔王の誕生によって濃くなった瘴気を取り込み凶暴化した各地の魔族で、二百年

前より各地の被害は大きくなっているらしい。

んー……そうすると、他の国のことだから、本当に把握できてなかったのかな。ディリアさんを責めるように言っただけ、それならそうと言ってくればいいのに。

しかめっ面で考えていると、目の前に前に見たカップが差し出される。「少し休んだほうがいいよ」と、レーレンの声付きで。

「ありがとう」といってカップを受け取ると、今回のお茶は冷たくて砂糖を入れた麦茶のようなものだった。

「カリン、疲れてそうだったから、甘いものにしたんだ」

「ありがとう」

少し照れくさくて、レーレンの顔を見ずにカップに口をつける。

甘くて冷たい飲み物は、潤いとそして冷静さを取り戻してくれた。

『冷静な判断』を欠いていたのは自分も同じかもしれない。悪役に徹するといいいながら、それでも彼らの言葉に傷つつかないわけがない。それに苛々していたのは確かだ。

「ね、話は戻るけど、どうしてそこまでの？」

「うーん……まあ、いろいろ思うところがあってね……」

気張りすぎて限界近いかもしれない。だから、レーレンには悪いけど、少しだけ愚痴に付き合ってもらおう。

「ここに来るちょっと前、怪我をして痛い思いしてるってのもあるんだけど……なんていうかな、人が信じられなかったの」

「カリン？」

「見張られて、騙されて　そんな中でも、たったひとつだけ信じられるものができた。私は……自分の中のそれを守りたいんだと思

う」

怪我からの復帰も、馴染めない学校生活も、それがあから耐えられた。

「あと、そんな人ばかりじゃないって思いたいから、私は人を騙すようなことはしたくないって思うんだよ。隠し事はしても……ね」

レーレンの問いに、ちゃんと答えないなっていないことは分かっている。

でも、今の私に答えられるのはこれが精一杯だ。

「そう思って動いた結果が、レーレンの目からそう見えるだけ。私がそうしているのは、ただの自己満足にすぎないよ」

レーレンに答えながらも、私はそのときのことを思い出して、自分の胸に手を当てて目を瞑った。

11 ただ単に、守りたいだけ。（後書き）

投稿サイトは初めてなので緊張してるんですが、そんな中でお気に入り登録していただいたり、感想をいただけて励みになってます。

とりあえずぱらぱらと伏線らしきものはばら撒いてきたので、そろそろ旅に出て回収する方向へいく予定です。

12 勇者の剣

レーレンはそれ以上深く聞いてこなかった。誰の心にだって触れてほしくないことや、知られたくない大切なことがある。それを察したからだろう。

でも、篠原さんは突き放したけど、レーレンはどうしようか？
いまさら……な気がするし、レーレンのほうが上手く立ち回ってくれそうな気がする。

……分かってる。これは甘えだ。悪役に徹する　なんて威勢のいいことを言っただって、本音ではそう思われたくないから。だから、理解してくれるレーレンなら……と、思ってしまったんだ。
払いのけなくちゃ……いけないのに。

「僕にまで気張る必要ないよ」

「レーレン？」

「カリンがどんなものを抱えているか知らないけど、カリンは一人で抱えすぎてると思う。一緒に持ってあげられるほどカリンのことを知らないから偉そうなことは言えないけど……でも、一緒にいることくらいはできるよ？」

思わず目を見開いてレーレンを凝視してしまう。

さっきまでヤバイなら逃げるとか、そういったことを言っていたくせに、なんでそんなこと……

「僕には……先頭に立って戦う力がない。後方から守る力もない。でも、側にいることくらいできるよ。ごめんねカリン、そんなことしかできないけど……」

優しい笑顔とぽんと頭に置かれた手。どこか子どもをあやすかの

ような仕草だった。何か言おうと思っても、どういつていいのかわからなくて、軽く頷いたまま、しばらくの間、レーレンの顔が見れなかった。

しばらくすると落ち着いたのに気づいたのか、レーレンが頭から手を放した。

「あ、そうだ。ひとつ朗報だよ」
「ん？」

レーレンは何事もなかったのかのように振舞ってくれた。だから私も普通に戻って尋ねる。

「勇者ハヤトは属性が『風』なのに闘争心をめらめら燃やして、ヴァイス隊長とやりあってるよ」

「はあ、まあ、蒼井くんは熱血漢なところがあるように見えるから……どちらかというと属性が風ってほうがあってない気がするんだけど、もしかしたら火も扱えるんじゃないかな？」

「なるほど『火』の属性もあるのかもしれないってことだね。一人ひとつとは限らないんだし」

レーレンの目は「全部の属性を持っているのが目の前にいるしね」と語っている。いや、属性なんて本当は関係ないけど。適当に「そうだね」と答える。

でもまあ、見なくてもそのシーンが目には浮かぶようだ。やる気になるのはいいことだから、この際揉まれておいで、蒼井くん。帰ったら県大会優勝なんて目じゃないよ。

と、その話は終わりにさせようとしたら。

「で、ね。もうひとつおまけがあつて」

「なに？」

「ヴァイス隊長が今まで相手に合わせてきたけど、手を抜かなくなつた」

ヴァイスさん、手を抜いていたのか。まあ当然かな。いくら勇者として呼ばれても、剣道をやっている蒼井くんは何も知らない大野くん相手じゃ　などと分析してるけど、勝手に意思を汲み取って動いてくれる剣を持っている私が語れることではないけど。

「とりあえず、結果的に良かったと思うことにするわ。なんか考えるの、面倒くさい」

「あれ、意外な答えだね。もう少し心配するかと思つてた」

「ん？　自分の実力に気づいてやる気なつたならいいんじゃない？　ヴァイスさんにやられたらそれだけの実力つて分かるだろうし。とにかく強くなつてもらわなきゃ始まらないでしょ」

魔王討伐の旅に出ました。魔族にあつてやられました。おしまい

じゃ、お話にならない。

そう思つたから模擬試合と称したものに付き合つたし、剣の力を借りた私にでさえ勝てるような腕だったから、遠慮しないで勝つことにした。そのせいで、やる気になつて強くなつたら、少しは心配が減るつてももの。

どうせ最初から仲がいいクラスメイトでもなかった。だから、帰るまで適度な距離を保っていたほうがいい。

……つて、適度な距離とは言い難いのが現状なんだけど。その辺は置いておこう。あまり気にすると考え込むだけだ。

「そつえば、レーレンはそれを言いに来たの？」

「あー…まあ、カリンの様子が気になつたのと、その報告と……も

うひとつ気になることがあってね」

「気になること?」

「うん、あ、カリンの剣を見せてくれる?」

「それはいいけど……」

と横においておいた剣を手に取り、レーレンに渡した。するとレーレンは剣を鞘から抜き始めて

「レーレン、抜かないほうがいいよ!」

「大丈夫、抜かないよ」

そういつて鞘を少しずらした後、何かやっているのは見えただけ……剣、分解してる!っ!?

「レーレン、なにやって……!?」

「いや、ちよつと確認。………あ、やっぱりそうだ!」

「なに?」

レーレンの手元を覗いてみると、どうやら剣の柄など余分な部分を外して銘などが書かれているところを見ているようだった。そこに書いてあるのは……

「e i n s? これを作った人の名前?」

でも、e i n s どうかで聞いたことがあるような……どこだっけかな? と思っていると、レーレンがいつもより引き締まった表情で。

「いや、アインスe i n sはこの剣の名だよ」

「この剣の?」

「ああ」

私の問いに答えながらも、レーレンは分解した剣と、アイテムと交換した手帳（シャーボだけではなんだったので、手帳もおまけにつけた）を交互に見ている。長さがどうのなの、細身なのも一致するだの独り言をブツブツと呟きながら。

仕方なく、レーレンが納得いくまで待つことにした。でも、アインス、アインス……どこかで聞いたことがあるんだけどな。どこだったかな　と考えている間に、レーレンのほうに納得したのか、「やっぱりだ…」と感嘆の声を漏らした。

「レーレン？」

「カリン、すごいよ、この剣！」

「は？」

一人で興奮しているレーレンについていけず、眉を顰めた。

するとレーレンは気づいたのか、手帳を私に見せた。右側のページには手書きの剣の絵が二つ。デザインなどはぜんぜん違う。そして、左側のページには、細かく書かれた文字。もちろん文字も読めるので、その文字をなぞるように見て

「勇者の剣……？」

この剣と見た目が違う剣のことは、最初に呼び出された『勇者』が使っていた剣の詳細で、そこから、私が持つこの剣に行き着くまでの変遷が書かれていた。

「ちよつ、レーレンこれ本当なの！？」

「間違いないよ！ カリンの剣のことが気になって調べてたんだ。そしたらどんどん出てくるじゃないか」

と、さらにヒートアップしていくレーレンは、持っていた袋から何かを取り出した。ガサガサと乾いた音から紙のようなものだろう。案の定、手の中には少しくしゃつとなった紙が数枚。

「勇者を呼んだら来たのが五人。とりあえず、勇者と思しき力の持ち主には勇者の剣を、他の人にはどうしよう　ということ、アイテムの管理室で急いで四人に合いそうなのを選んだんだ。で、これがそのアイテムの説明書」

そついいながら、それを手渡すレーレン。

それにはやはり『敵とみなしたものを斬る剣』と書いてあり、この剣の絵もあった。詳細には属性不明、敵とみなしたものをすべて斬る。担い手に見合った力であるとあるが、その下の持ち主の履歴の短さを見れば、担い手の力に見合うという言葉がいまいち信じられない。

持ち主の履歴を見ると、たいてい死亡して返却が多い。アイテムは貴重だから、国で管理しているらしく、力があり勇者希望の人がいれば、登録して貸し出すというシステムらしい。だからアイテムの詳細もあるし、借りた人の履歴もある。

この剣、百年以上前には頻繁に借りる人がいたけど、だんだん減って、ここ六十年ほど管理部屋から出したことがないほどの、使ったら死ぬ確立高し、な剣だという。

「……つてえ、めちゃくちや危ないものを、属性が分からないからつて押し付けるな！　あの巫女め！」

あのやろ…守らないって言うけど、こっちこそディリアさんの前に魔族が立ってもそのまま知らぬ振りしてやるわ！

怒り心頭にしている私に、レーレンが落ち着いてとまた甘いお茶を差し出す。それを一気に飲み干して、はーっと深いため息を吐いた。

「カリンの気持ちは分かるけど……話を進めてもいい？」

「あーうん。どうしてこれが前の勇者の剣だって分かったの？ 見た目だってぜんぜん違うじゃない」

刀身が細身なのはともかく、柄も鞘もまったく違う。どちらも替えがきくものだけど、ぜんぜん違うものに見えるほど替えられているし、勇者の剣ならもう少し大事に扱ってもいいはずだ。と、ブツブツとこぼす私を他所に。

「あ、もしかして歴代勇者の肖像画を見たの？ 確かにあの絵だとこっちの形になるけど」

と、手帳に描いてある別の形のほうを指差す。それに慌てて頷くと、レーレンは次に進める。

「剣を作ったのは当時有名な刀鍛冶のシュタールという人物で、その中でも精魂こめて作った力作らしいよ、このアインスは」

なんとたつて、魔王討伐のためだからね、と付け足す。

「魔王討伐のための勇者の剣……ね」

「うん、剣は残っていたみたいで、後から回収されたみたいだ。でもボロボロで、何度か修理しているうちに今の形になったみたいだよ。魔王封印という偉業を成し遂げた勇者の剣を使いたいってのが多くて、抽選になるほどの勢いで貸し出してたらしいんだよね」

……絶句。何も言葉が出てこない。

「魔王がいなくなつてある程度平和になつたけど、魔族はまだいるから勇者制度はなくなつてないし。そんな中で、勇者の剣を持てるつてのが、自慢だつたみたいだね。前の勇者の属性は不明になつているから誰でも借りれたみたいだし」

「……」

なんかもう……馬鹿らしくて聞いていたくないんだけど。

とにかく、勇者が使つていた剣を持つことがステータス、みたい
に思われて、自分の力のことなんか無視して、その剣を持てば強
くなると思い込んだのか。

あぐく、いざ敵と遭遇すると、自信満々に剣を抜くが、剣は力を
勝手に引き出し敵と戦う。敵が倒れるまで力が持てばいい。でも持
たなかった場合、また複数を相手にできるよう力がなかった場合、
剣の強さ以前の問題だ。

結局、そんなことを繰り返したあと、勇者の剣などんでもない。
自分以外の人間が使うのが気に入らないから、勇者がとり付いてい
るんだ、呪いの剣だといつて借りる人がいなくなったという。

その呪いの剣を押し付けたのは誰かしらねー？ と台詞棒読みな
感じで呟き、私の中でもディリアさんは敵とみなした。

あ、でも

「レーレンが言うようにそんな風に思えなかったよ、この剣。私の
意志をちゃんと汲み取つて、私が動きやすいようにしてるって感じ
だったし、蒼井くんとやりあったときも、ぜんぜん疲れなかったし」

まあ、ほとんどかわしたりしてたから、動きも力も最低限。疲れ
るほどやってないといえばそれまでだけ。

「たぶん、カリンの力がそれだけ大きかったんだと思うけど」

「分からないって言っていたのに……」

「僕には相手の力を図る能力なんてないからね。あ、あと、カリンってその剣に対しても自然体だよ。気構えることもないし、かといって呪いの剣だと恐れることないし」

まあ、抜かなければ問題ないし、適当にしようと思ったからなんて正直に答える気もなく、「そう見える？」と適当に返した。

「うん、見える。だから他の人と違って、その剣が自身の担い手として認たんだと思う。だからカリンの意思に従ってくれてるんじゃないのかな？」

私の意志に沿ってくれるのはありがたいけど……よりもよって、勇者の剣ですかい。

そんなのがばれたら、またいらぬ敵が増えそうだな、とため息をついた。

12 勇者の剣（後書き）

お休みが終わってしまったので、次からもう少しのんびり更新予定。
でも勢いは残ってるから、打ち込みだしたら早いかも。

剣の銘の部分は今回、製作者じゃなくて剣の名前にしました。

13 旅のはじまり

蒼井くんの特訓のため、出発は数日延びた。

その間、ディリアさんと堤さんからは刺すような視線を感じる。つてか、ディリアさん、あなたは巫女なんだから、そんな私情入りまくりな状態でいいのか、と問いたくなる。

篠原さんはまだ心配しているのか、気になってちらちらと窺うような視線を感じる。

問題の蒼井くんは、大野くんと一緒にヴァイスさんとしごかれていたので、私のことまで気にしてられない といった感じだった。それでも裏で着々と旅の準備は始まっているわけで、あれこれと荷物が増えていく。はつきりいつて、最高位の巫女様がいるせいで荷物が増えるばかりだ。野宿できないだのなんだのいつて。勇者ご一行は八人だけど、その後ろにバックアップがつくという、周囲から見たら実に間抜けな光景になるだろう。想像するだけでうんざりする。

その間、私は特にやることがないので、レーレンから情報を引き出したり、リートたちから各地の状況を聞いたり、情報収集が仕事のように（私が勝手にしてるだけだけど）になっている。

魔王の居城は魔族の地の中心にあつて、そこまではおおよその距離は日本でいえば八百キロ弱くらい。東京からだどれくらいだろうか。地理に詳しくないのでよく分からない。しかもメートルとこちらとでは長さが違うので、いちいちメートルに換算しなおしてかじらないと把握できないから、思わず電卓が欲しくなる。

とりあえず距離はそんな感じだけど、この世界ではよくて馬車のような乗り物しかない。だけど、そんなのに乗っていたら、いざ魔族が出てきたときに対応できないということ、徒歩になった。そのため、距離が出てても何日でたどり着けるのか分からない。

ここまで状況を理解すると、もう面倒くさいのでそれ以上考えるのはやめた。あとはその場で対処していくしかない。そうして、だらだらと数日過ごしたあと、蒼井くんはじめ勇者一行はやつと旅に出た。

この世界は緑が多くて一見すると穏やかなところに見える。魔族の被害などの問題もあるけど、アスファルトに阻まれた地面に比べると、なんかのどかなイメージがする。そんなところを歩いていたら、荷物の多さにうんざりしてディリアさんに抗議して、隊商で旅慣れているレーレンの援護、プラス大野くんの口添えもあって、何とか一台の馬車に留めさせた。

その馬車に、後方支援だからとディリアさん、堤さん、篠原さんが乗っている。残りは旅に必要な荷物で、貴族が乗る豪華な馬車じゃなくて、幌のついた荷馬車といったもの。

で、何かあったらすぐに対処できるようにと、蒼井くん、大野くん、ヴァイスさんは歩き。私も剣を持っているので、徒歩になった。まあ、あの女性陣の中にいるより、疲れても歩いたほうがよっぽどマシだ。

といっても、私たちも特に歩きなれているわけじゃないから、人のことはあまり言えない。ばてない程度に休みを入れて、足の筋肉の凝りをほぐした。

ちなみに私たちはここに来たときの制服のままだった。なんでこうなったのかというと、制服が（蒼井くんたち男の子の）この国の王様に気に入られてしまったから。一応布地自体を強化させているし、必要なところは防具を付けている。

あえてこちらの服にしたいとも思わないので、口を挟まなかった。こちらの服はちょっと……というより、還るチャンスがあるなら還りたいので、そのときにこちらの服を着ていると都合が悪い。私はまだ、還るということを諦めてはいないから。

それに普通と違う格好というのは、人の目を自然に引くもので、希望の光　勇者一行が魔王討伐に出た　と、町に出てすぐに歓声が沸き起こった。

そうか、王様、この効果も期待してたな。

勇者の存在で人が希望に満たされるのなら、魔族になら敵対心、闘争心、恐怖心などが生まれるだろう。その辺を考えているんだろうか。こんなノロノロしている旅なら、すぐに魔王に勇者の存在を知られるだろうに。

歩いている間、蒼井くんと大野くんは異世界を堪能しているかのような会話を繰り返して。想像の域での話は、ヴァイスさんが途中で訂正したり補ったりと、自然にこの世界の知識が身につくように仕向けていた。

何気ないところでも二人を鍛えてこの世界でやっていけるように仕込むあたりがすごいな、と私は少し後ろで感心している。

そして、さらにその横で「面白い光景だね」とのんびりした口調で語りかけるのはレーレンだった。彼は約束どおり一緒に歩いてくれた。

「面白いというより、私はレーレンがものすごくお人よしに見えるよ」

「そうかな？　そう思っているのは僕だけじゃないよ」

「そう？」

「うん、ほら見てごらん。ヴァイス隊長が気にしてる。あと、ヨーイチって子も気にしてる。馬車に乗ってるマナミって子は今は分からないけど。完全に無視しようとしてるのは、勇者とディリア様と

エリって子だけ」

まあ、確かにレーレンが言った四人はこちらのことが多少なりとも気になるのか、意識している。篠原さんなんか旅に出る前も、気にして何回か声をかけようとしてた。私としては露骨に避けたのに、それでも心配するなんて本当に意外だ。

まだ町から近いせいか、旅の一日目は何事もなく終わった。ただ、ほとんど進んでないんだけどね。魔王の居城にたどり着くまで、いたいどれくらいかかるんだろうか。

旅の二日目。やっぱり筋肉痛になった。というより、足にできた肉刺が痛い。まだ夜明けだったので、疲れてみんな起きていない。そつと天幕の中から抜け出して外に出て、少し離れたところで足の肉刺に治療の力をかける。

魔法じゃないので、いちいち呪文が要らない（覚えなくてもいい）のが便利なこの力。頭でイメージする。ただ、治れ治れと念じるだけけど。一応成果があったのか、しばらくすると血が滲んでいたところは赤みが残っているものの、普通の皮膚に戻っていた。

「ま、こんなもんかな？ 他の人たちは篠原さんの力で治っているだろうし」

彼らはいったことを本当に実行していた。ご飯を食べた後、みんな（レーレンとヴァイスさん除く）集まって、篠原さんに足にできた肉刺の治療をしてもらっていた。

レーレンが「いいの？」と聞いたけど、別に構わないと答えた。

篠原さんも気にしているのか、私に声をかけたけど、堤さんによって止められた。振り向いた私に「なんでもない」と、辛そうな表情で言う篠原さんに「そう」とだけ返した。

見事にバラバラです、はい。いや、私のせいなんだけど。

戻ると大野くんがもう起きていて、戻ってきた私に声をかけた。

「おはよう、相沢さん」

「……おはよう、大野くん」

普通に声をかけてきたので、普通に返した。

そういえば、大野くんはあまり茶化すわけでもなく、普通に気遣ってくれたっけ。こっちに来てからはヴァイスさんにしごかれているのを見るだけで話はしなかったけど。

「よく……眠れなかった？ その……」

「別に、ただ単に早く起きただけ。こっちは向こうと違って空気はきれいだし、この場合は……」

「早起きは三文の徳？」

「そう、それ。なんか気持ちいいからそんな感じ」

一人のほうに気が楽だし、みんなが起きてくる間、リートたちと話しながら時間をつぶそうと思っていたんだけど……まさか、大野くんが起きてくるとは思わなかった。

とりあえず話をあわせながら適度な距離を保とうとするけど、大野くんはやっぱり今の状態を気にしているんだろう。「大丈夫？」とか尋ねてくる。

「ハヤト（あいつ）も悪いヤツじゃないけど、下手に熱血漢なところと優しいところがあるから。あいつにしたら、無理やり呼び出さ

れたのにこつちの世界のことを心配しちゃってるし」

「まあ、それは分かるよ。教室では私によく声かけてきたもの。それに熱血漢でお人よしじゃなきゃ、『勇者』なんてできないでしょ」

それでも少しきいているところがあつたので、大野くんが『優しい』といったところを、私は『お人よし』と代えて返した。

その意図に気づいたのか、大野くんは後頭部をなでるようにして「参ったな」と呟く。

「堤さんだつて仲のいいクラスメイトがそんな状態のところに、仲良くないのがいてしかも非協力的なら文句も言いたくなるよ。問題はディリアさん。私からすれば、あの人、最高位の巫女さんなのに」

「私情入りまくってるよね、あの人」

私の言葉にかぶせるように、大野くんは同意する言葉をさらりと口にした。

なんだ、同じようなこと思ってたんだ。

13 旅のはじまり（後書き）

やっと旅に出ました。

14 『忌み地』

大野くんは意外に周囲を見てる人だった。

ただ、どうしても知らない世界で、しかも猪突猛進……じゃないけど、『勇者』街道一直線な親友を見捨てられないようで、なんか複雑な気持ちを抱えているようだった。

でも、世の中にそんなに単純思考な人は少ないと思う。あちらを立てればこちらが立たず、なんていうけど、まさにそのとおり。けど、どこか一箇所とだけ交流していればいいわけじゃない。そのためにはあちらに合わせ、こちらに合わせ……ということになる。今の
大野くんはそんな感じだろう。

「そういえば、あの、レーレンって人と仲いいけど、大丈夫？」

大野くん、何度も「大丈夫？」を連呼されると少しうんざりするんだけど。それに、なんの「大丈夫？」なのか。

いつも体調を気遣って「大丈夫？」と聞いてきた大野くん。でも、レーレンとのことは、体調は関係ないはずだ。

じゃあ、恋愛？ いやありえないでしょ。レーレンの目にも私の目にも、そんな色はどこにもない。大丈夫かと心配されるようなことは、見ていれば分かるはずだ。でもそれを心配してるっぽい……
よね？ はあ……とりあえず。

「レーレンは商人だからね。最初会ったとき、シャーボのことをすごく興味深そうに見てて、それで話するようになったんだけど。元の世界の話とか聞くのが面白いみたい。特にその中で、こつちの世界で応用できて商売になりそうなのとか、ね」

代わりに私はこつちの世界のことを教えてもらっているよ、と答

える。

半分はレーレンの好奇心と、私にとっても気が抜ける場所というものもあるんだけど。その辺を言っと、また話が元に戻ってしまうので表には出さない。

それとアイテムの指輪と交換したのは内緒にしておいて、単に情報交換の一環として互いに利害が一致しているから話をするのだということにしておいた。

大野さんのレーレンに対する変な思い込みは消えたけど、替わりに蒼井くんやディリアさんの状況報告や説得をするから、自分にもそれらを教えてほしいと言われた。

「自分で聞けば？」

「だってあの人、相沢さんとは仲良く話すけど、僕たちには事務的にしか話さないから」

「普通に話せば、普通に返ってくるけど？」

「だから、それが事務的ななんだって」

「そう言われても……」

レーレンは最初から好意的だったし、こつちの世界、元の世界と話題は尽きないし、よくしゃべる人なんだけど。

まあレーレンは私に対して好奇心（属性全部あるという）と多少の同情からだろうけど。私もレーレンと話をしないと、ぜんぜんしゃべらなくなるから、レーレンの存在はありがたい。だから会話も弾む。

でも、そこにそういったモノはないと思うのよ……うん。

「レーレンは商人だから有益な情報があれば食いつくと思うよ。そういう話をすればそこから話は膨らんでいくし。同性だからその辺りでも私より話が合うんじゃないかな？ 気構えないで気軽に話してみるといいよ」

ね、軽く笑いながら言うと、大野くんが目が丸くなっていた。

「お、大野くん？」

「……あ、ごめん。相沢さんのそういう顔、はじめて見たから……びつくりした」

……レーレンに続いてまた一人。

そんなに私の笑顔は珍しいのかっ！？

そりゃ、今の私はあまり笑わないけど、レーレンにも言ったように感情がないわけじゃない。楽しければ笑うし、頭にきたら怒るりもするただの人間なのに。これじゃあ、まるで珍獣のようじゃないか。

ふう、とため息をつくとき、大野くんは。

「相沢さんがなにを考えて動いているのか分からないけど、たまには笑ったほうがいいよ」

と言った。その顔には嫌味の欠片もなかった。

が、そう簡単に笑えるなら、いくら休学していたとはいえクラスの中で浮くわけがない。でも好意からの言葉だったので「善処する」と答えた。

返事とほぼ同時に、ヴァイスさんとレーレンが天幕から出てきて、この話は終わった。

朝食をとったあと荷物をまとめてまた動き出す。昨日と同じように、徒歩と馬車で。

でも、馬車が入れないような場所になったらどうするんだろう、とふと考える。レーレンがいるし、ある程度は広い道を行くだろうけど、魔族の地に入ればそうはいかないだろう。歩き組はその頃には歩きなれているだろうからいいけど、馬車組の三人はどうするのか、意地悪い興味が沸いた。けど、篠原さんがいるから、足にできた肉刺は治してもらえばいいだろうし、と深く考えるのをやめた。なんか馬鹿らしくて。

小休憩を二回ばかりとった頃、数人の人が道の前に現れた。盗賊とかじゃなくて、その辺りに住んでる村人といった服装。なによりこちらを見てすがりつくような視線にまず目がいった。

これは……魔族が出たからどうかしてください、的なお話？ と思っていると、どうやら違うらしい。勇者の格好をした蒼井くんじゃなくて、巫女がいると聞いてきたという。

「なにごとです?」

馬車の中から顔を出すディリアさん。キリツとした表情は、作ってるなーと思わせるものだった。そりゃそうだね、この国最高位の巫女ともなれば、普通の人ではないように振舞わなければならないだろう。どちらかというと、私が見てきたディリアさんのほうが感情豊かで人間味があるのかもしれない。

まあ、そんなことはどうでもいいけど。

「巫女様をお願いします」

「どうか……」

「村の近くにある『忌み地』を、『浄化』していただきたいのです」

村人達は言葉をつなげるように手を合わせながら順番に口にした。まるで伝言ゲームだ。いや違うか。あれは同じ言葉を伝えていって、最後まで同じかどうかというヤツだった。

それにしても『忌み地』？ また新しい単語が出てきた。

首を傾げると、横にいたレーレンが小声で説明してくれる。

「『忌み地』ってのは、魔族によって穢れてしまった土地のことだよ」

「魔族によって？」

「うん。魔族によってたくさんの人が殺された、とか、逆に魔族を追いつめ殺せたのはいいけど、その魔族の瘴気によって穢れてしまった場合の二種類かな」

レーレンの説明では、そんな事件のあった土地だと、草木も生えてこなくなつて人からも敬遠されるような場所になるそうだ。

ちなみに前者だと殺された人たちの無念がもとで、後者の場合は、きちんと瘴気が浄化されないために、残った瘴気が凝つてできるのだという。しかも、瘴気のせいで魔族が集まりやすい地になつてしまふという二段攻撃。各地に点在している魔族は、こういった地を拠点にしている。

どちらにしろ『忌み地』になつてしまうと、巫女などを呼んで浄化してもらわないと無理だという。そのため魔族討伐の仕事につく人には、たいてい他のアイテムと一緒にクリスタルが支給されるらしいが、この土地はそのときにきちんと浄化されなかったらしい。

「そうですか、しかし、私は現在、魔王討伐の任に就いています。他のものを派遣するよう、神殿に連絡しましょう」

「そんな、今すぐお願いします！」

「先を急ぐのです。こうしたところをなくすためにも、ハヤト様に

早く魔王の居城まで行っていたくのが最優先です」

毅然とした態度で自分の意見を貫くディリアさん。

でも、村人達は今すぐにでも何とかしてほしいと粘る。そりゃそうだろう。レーレンの話のとおりなら、もたもたしてると新しい魔族が来てしまう。

魔王を討つことも大事だけど、身近なこういったことを放っておいていいものなの？ ディリアさんは魔王討伐しか頭にないようだけど……さて、いつもの嫌味を再開してみますか。

「ディリアさん、本当は自信ないんだ？」

「なっ!？」

私の独り言のような台詞に、ディリアさんはすぐさま振り向く。そして。

「自信があるとかないとかの問題ではありません。私たちにはするべきことがあって、そしてそのために足止めされては困ると言っているのです！」

「じゃあ魔族に襲われている人がいても、魔王じゃないからって無視して行っちゃうんだ。いやーすごい英断だわ」

と笑いながら返すと、ディリアさんは真っ赤になった。

そして案の定、「そんなことありません！ それくらい簡単です！」と意気込んで、村人に『忌み地』の場所を聞き始めた。

ふふん、口だけでなくその力を見せてみるっての、とぼやくと、隣にいたレーレンが笑いをかみ殺すのに口元を押さえた。

「なによ？」

「いや…人を動かすのが上手いな、と思って」

笑いを抑えながら、レーレンは小声で答える。それに対して私も小声で返した。

「神殿に伝令出して出直すより、最高位の巫女のデイリアさんがしたほうが、被害が少ないと思ったんだけど？」

「まあそうだけど……『忌み地』になってしまった土地を浄化するのはすごく大変なことなんだよ」

「そのための巫女でしょ。最高位の」

使えるものはなんでも使わなきゃ、と言うと、レーレンはふき出した。

その間にデイリアさんは村人達から詳細を聞いたのか、私のほうを振り返って。

「場所は聞きました。すぐに行って浄化します。カリンさんも浄化というのをご覧になったほうが、どんなものか理解できるでしょう」

それは私にも来いって言うことかしらね。しかもこの場合、『忌み地』の浄化を見せるんじゃないくて、自分の力を見る、って意味で断る理由もないし、自慢するその力を見てみたくなくて頷いた。

そして、デイリアさんと私の二人で『忌み地』に向かうことになった。

14 『忌み地』（後書き）

嫌味までもや復活。

今回は2人きりの初イベント。

…って、たまにはと思って恋愛フラグっぽいのを立ててみたけど、主人公の心の中ではへし折ってそうだし、

15 浄化

『忌み地』までディリアさんと二人きりの間、とてつもなく冷えた雰囲気の中、嫌味の応酬をしながら歩いた。

救いだっただのは『忌み地』が近かったことだろうか。しばらくすると瘴気が濃くなっていくのが分かり、『忌み地』に近いのが肌で感じる。

「カリンさんは『忌み地』というのをご存知ないと思いますが」
「ええ、元の世界では魔族自体がいませんでしたから」

『忌み地』なんて初めて聞いたんで。でも、こういう場所は知ってる　ということまでは答えなかった。元の世界でも心霊スポットとかになっている場所に近い。

いや、それよりも酷い。まだそこへ行き着いてもいないのに、体に纏わりつく瘴気はねっとりとした嫌な雰囲気で気持ち悪くなる。こんなところに長居したら、それこそおかしくなりそうな、そんな感じ。

「『忌み地』はその言葉通りのところです。忌むべき土地。穢れた地です」

「先ほどレーレンに聞きました。どうしてそうなるのかも。なので、一刻も早く浄化をしたほうがいいと思ったんですが？」

だからどうした、といった顔でディリアさんを見た。

ディリアさんが言いたいことは知っている。それでも早くしたほうがいいと思ったから急かした。

「……『忌み地』の浄化は、神殿にいる神官や巫女数人で行うもの

です」

『忌み地』の浄化はそれだけ大変なのだと何度もいうディリアさんに、私はそっけなく答える。

「だから？ ディリアさんはこの国で最高位の巫女なんですよ。だったら数人分の仕事をしたっておかしくないと思うけど？」

「ええ、確かにそうですが村人にも言いました。最優先は魔王討伐です。こんなことで足止めされていたら困ることくらい、カリンさんだって分かりますよね？」

「さあ？ 私は見えない魔王より、ここに漂う瘴気のほうに寒気を感じますが？」

私が瘴気を感じているのが少し意外だったという表情を一瞬するが、すぐに元に戻る。

「魔族から発せられる瘴気は、確かに人の心を蝕みます。でも、その源は魔王なんです。カリンさんは目の前の人のせいで、だいぶ視野が狭くなっていますか？」

「そうかもしれませんね。私には目の前にいる人を放って先に進むほど、大きな目的には思えないですから。ディリアさんはなんのための魔王討伐だと思ってるんですか？ こういう人たちをなくしたいからじゃないんですか？」

「それは……」と言いよどむディリアさんに横槍を入れられないように矢継ぎ早に話を続ける。

「魔王を討てたとしても、その間に人がいなくなれば意味ないです。それに魔王を討つことばかりに気をとられ、勇者は誰も助けてくれなかった」と言われるほうが問題じゃあ、ないんですか？」

あなたの国としては　　ということを匂わせながら、冷めた目で
ディリアさんを見る。

「ああ、あと、ここで言い訳してやめるようなら、ディリアさんの
巫女としての格はそんなもんだと思いますから。まあ、誰にも言う
つもりはないから、私が思うだけですけど」

私はディリアさんのプライドをチクチクと刺激して、「やる」と
しかいえない状態に持っていつていく。言葉尻を取って、ひっくり
返して反論の道を封じた。

冷静なときなら、他に反撃の余地もあっただろう。でも、『忌み
地』が近く、瘴気が濃い。冷静な判断などできるわけがなかった。

ディリアさんは唇をかみ締めて怒りを我慢している。しばらくし
てディリアさんは顔を上げて。

「この辺でいいでしょう。カリンさんは巻き込まれないよう、そこ
から動かないでください」

その声は怒りで震えていた。それでも、逃げることはせず、向か
い合う気になったのは認めよう。おとなしく指示に従って、その場
に立ち止まった。

ディリアさんは私から離れて瘴気の濃い部分へと向かう。そして
クリスタルを取り出して、それを両手に持って目を瞑った。クリス
タルが淡く光りだすのを見て、ディリアさんが力を使い始めたのが
分かる。

でも……

「あの力じゃ、無理そう……」

ディリアさんの力は弱い。ディリアさんだけではこの地を浄化するのは無理だろう。

「それにしても、最高位と呼ばれるのがこれじゃあ……ね。そう思わない？ リート」

“ほんとだねー”

“だって、しかたないよ”

“そうそう”

“いかいのかべを、こえてきたひとには、かなわない”

「あー、そんなものもあつたねえ」

世界と世界の間には簡単に行き来できないように壁というか断層というかそういったものがあるという。

そして不幸なことに、この国にある召喚陣は、とにかく強いものを呼び出すという無謀な陣で、その陣の対象は近くの世界も入る。そうして呼ばれた人は世界の壁を越えてたどり着く。呼ばれて気づくところに来てるけど、実際は世界と世界の間の壁を乗り越えるという荒業をしてるので、そこで一気に力がつくという。

だから、勇者として呼ばれた蒼井くんも力の使い方をきちんと覚えれば、ヴァイスさんなんて目じゃないほど強くなれるはずなんだよね。今の蒼井くんは反射的に力を使っただけでも、意図して使っていない。自分の意思で力を使えば、格段に強くなる。

まあ、異界の壁越えの話はたぶん知らないはずだから、私も自分から口にしないけど。情報の出所を探られたら、私もいろいろヤバイんです、ってレベルのモノだから。

「うーん…、ねえ、リート。瘴気って、火で焼くことはできないの？」

“なんで”

“どうして”

「あー私の世界では浄化っていうか、そういった類のは、火とか塩を使うのがあったから。クリスタル通して力で浄化するより、焼いちちゃったほうが早いんじゃない？」

『火で浄化できないものはない』っての、本か何かで見たことがあるんだけどな。できるならそっちのほうが楽だし。

“うーん…それはやったことがない、かも？”

“わたしたちのように、いしをもって、ひのせいれいが、ちからをかしたら、べつ、かも？”

「疑問系なんだ」

まあ、精霊に見える人自体がいなかったんだから、直接精霊に話をして「瘴気を焼いてみてください」なんてのはなかったんだろうな。

……試してみよっか？

そう思っている間にディリアさんの力が尽きたのか、どさりと倒れる。

ああ、やっぱり無理だったか。さて、このまま火の精霊に「試してみて」とお願いした場合、ディリアさんも巻き添えになるのかな。さすがにそこまでしちゃうのはマズイか。

仕方なく、まずはディリアさんを安全な場所まで移動することに決めた。

“わたしたちが、やろうか？”

“てっだうよ”

「できるの？」

“かりんが、なまえをつけてくれたから”

「は？」

あれ、主従関係はないって言ってなかった？
ヤバイぞ、どんだん道を踏み外している気がするーっ！？

“ちがう、ちがう”

“まぞくとの、しゅじゅうかんけいじゃないよ”

リートたちはくすくす笑って説明してくれた。

要するに、私が精霊に名前をつけたことによって、主従じゃないけど繋がったという。精神的にリンクしているという感じか。

たとえば魔族の地で精霊が入れないようなところでも、私がリートたちの名を呼べば、私を通してそこに移動して、私の力で存在できるという。

“よほど、つよいちからがなければ、むりだけどねー”

“でも、かりんは、つよいから”

「あ、そう…」

話戻して、私の力を使うけど、私自身が意識して使うんじゃない、精霊たちに力を預けて勝手にやってくれるという。そうすれば一度にいろんな力を使えるけど、自分で制御するわけじゃないから、いきなり倒れることもありそうだ。

といっても、とりあえずそういうのができるのは、風の精霊リートと、土の精霊エルデのみ。残りの精霊たちとも話をして、名前をつけて気に入らなければじまらない。

「まあ、とりあえず……できるならお願い」

“りょうかい”

“まかせて”

嬉しそうに了承すると、ディリアさんの体が宙に浮く。

うわーこんなこともできちゃうんだ、と感心しながらも、私はディリアさんから目を離してレーレンにもらった火打ち石を取り出した。

ライターとか便利なものがないので、火をおこすにはこれを使うしかない。最初はなれなくて何度もカチカチやっていただけ、コツを掴むとすぐに火をつけることができるようになった。

それを使って、近くにあった枯れた草にカチカチとやって火をつける。

じつと見ると、眩しい火の中で小さな赤い小人みたいなのが踊っているのが見えた。

15 浄化（後書き）

異世界の人と召喚された人の力の違いをちょこっと。
情報の出所はまだ内緒で。

16 新たな魔王

「えーと、とりあえず……こんにちは？」

最初に挨拶は基本でしょう、ってことで挨拶する。

それにしても眩しい。サングラスほしい。早めに話をつけよう。

“これって、わたしたち、に？”

“ちがうんじゃない？”

声をかけるといっせいにこっちを見て、それから勝手に結論付けられた。決め付けるの早いよーっ！

「待つて待つて、キミたちに話してるからっ！」

そりゃ話しかける人がいなかったみたいだけど、火に向かって話しかける人はいないから　とツツコミを入れたい。

でも眩しくて目がおかしくなりそう……と、思った瞬間、闇をサングラスみたいに使えばいいんだと気づく。日食を見るときみに、薄くて黒い半透明のプラスチックみたいなのを想像すると、火の精霊を見るのに眩しくなくなった。

「えっと、火の精霊で、いいんだよね？」

“うん”

“みえる？”

「見えるよ。手伝ってもらいたいことがあって話しかけたんだけど

……いいかな？」

“できることなら”

「ありがとう」

見てすぐに手伝ってといったのに、火の精霊は素直に頷いてくれた。

風と土の精霊たちはかなり友好的だったけど、性格を考えると、火の精霊と難しそうな気がしたけど、そうでもなかった。おかげで長々と説明をしなくて済んだことには感謝。

とりあえずこの瘴気だけを焼いて消すことはできないかと尋ねてみると、火の精霊たちは少し考え込んでから、“むり”と答えられてしまった。

“ここまでなると、わたしたちだけじゃ、むり”

“ほかのものまで、やいちゃうよ”

“まぞくだけなら、なんとかなるけど”

“ごめんね”

「そつか。じゃあやつぱりクリスタルを使って浄化するしかないのかな？」

『忌み地』を火で浄化するとなると、全てを焼き尽くすことになってしまう。そこに漂う瘴気を含んだ大気も、土地も、生えている草木もすべて。

さすがに無謀な策だったか。クリスタルに代わる浄化方法がないかなと思っただけだ。

あ、でも。

「魔族とかならできるの？」

“うん”

“それなら”

「じゃあ、力を貸してほしいとき、貸してくれる？」

火の精霊はこっちをじつと見た後、“いいよ”と了承してくれた。

それから呼びやすいように名前をつける。

「で、呼ぶときに困るから……グリユーエンって呼んでいい？」

“ いいよ ”

“ うん ”

こっちは快諾。よく分からない反応。

とりあえずこれで火の精霊の力も借りれることになったので、力の幅が広がりそう。やっぱり攻撃的なものは火を連想するからかな？

「じゃあ、これからよろしく」

握手はできないので、手を振ってさよならした。

「さて、んじゃあ浄化を始めますか」

気合を入れ直して、制服の内ポケットから元の世界ではよくお守りとして売っている水晶のブレスレットを取り出した。

靈感なんてものがあつたせいで、身を守るためにと元の世界から持っていたブレスレットは、こっちでもらったクリスタルより自分に馴染んでいる。

それを手に持って前にかざし、この地が草木が生えてどこにでもある心和む森をイメージした。そうして目を閉じてしばらくの間、イメージし続ける。

肌にピリピリとくる瘴気がなくなったのを感じると、ゆっくりと目を開けた。

目の前には瘴気のなくなった大地と、そしてそんな大地から芽吹いた小さな草の芽がちらほらと見える。

「エルデ、来て」

地の精霊がいなくなると、『忌み地』ではないけど、土地は荒れていくといったので、だめもとで呼んでみた。コロコロとした地の精霊が現れる。

「ここをお願いしてもいい？」

現れた数人？に頼むと、彼らはゆっくり頷いた。

これで少しずつでもこの地は回復していくかな、と思うと、やっ
と一息つけた。

隣で横たわっているディリアさんに目をやってから、まだ起きそ
うにないと判断した。彼女の場合、治療の力は効かない。本人の力
の回復が必要だから。

いつになったら目覚めるまで回復するだろうか、と思っていると
リートたちが教えてくれる。

“かりんがさわってればいいよ”

「は？」

“さわることによって、いしによって、すこしなら、ちからのいど
うができる”

「なるほど」

ディリアさんが起きてくれなければみんなのところには戻れない
もんね。

そつとディリアさんの手に自分の手を重ねる。これで力の移動が
できるのか分らないけど、私からディリアさん何かを渡すイメー
ジをする。一緒に、ディリアさんに纏わりつく瘴気の浄化も行った。
ふわふわとしたピンク色の髪にきれいな顔立ちは、元の世界では
アニメのヒロインでできそうな感じ。意識のない今は見下したよ

うな視線はなく、素直にきれいだと思う。

「……はー、駄目だなあ」

“なにが”

“どうしたの？”

リートたちが独り言を聞いて好奇心丸出して尋ねてくる。

それに対して、「ちよつとね」と笑って誤魔化した。

「それにしても、『忌み地』ひとつでこれかあ。この先大変そう」

旅に出て二日目、『忌み地』。今回はディリアさんの力が必要とされていて、蒼井くんの出番じゃなかった。瘴気相手じゃ勇者は必要ない。

……ん？　なんか…嫌な予感がする。

「ねえ、リート。今回の魔王ってどんなのか分かる？」

魔族の地にいけないのは分かっている。それでも多少なりとも情報がないだろうか、ともう一度尋ねた。

“まおうは、よく、わからないけど…”

“かりんたちがでてから、こういったひがい、おおくなつた”

“いままでは、ほかのばしょばかり、だったのに”

「じゃあ、今まではあまり危機感なかったけど、勇者召喚で身の危険を感じたから、勇者の行く手を阻もう　ってことかな？」

“わからない、けど…”

“あたらしい、まおうは、こうせんでき、って。にげてきた、つち

のせいれいがいつてる”

“わたしたちのなかも、おなじようなこと、いつてた”

「好戦的？　ちよつと待って」

リートたちの話を整理するために、情報を一時ストップさせる。

今まで被害はこの国よりも他の国の点在しているところのほうが被害が強かった。

あと、これは以前にリートたちから聞いていた話だけど、そのせいでこの国は勇者召喚を出し渋っていたらしい。この世界にいる人よりも強いものを呼べる召喚陣は、この国にとって外交上、大事な切り札だから。

でも業を煮やしたほかの国が、同じような召喚陣を作り始めたと聞いて、慌てて勇者召喚をしたという。他の国に、同じような召喚陣があつたら、この国に残るのは魔族の拠点が一番近いという不利な点だけだ。

そんな思惑の結果、蒼井くんはじめ数人が呼ばれたんだけど、それからこの国の城から魔族の地までの間に被害が急に増大した。

しかも瘴気は城の内部の人まで蝕んで、皆冷静な判断ができないよう、少しずつ狂い始めている。

あまりにも早く、今回のように、すでに魔族はいなくなり『忌み地』が残っているところがいくつかあるみたい、とリートたちが呟くのが聞こえた。

……つて、この状況、本当にやばくない？

この地を浄化するだけでディリアさんは倒れちゃうし、浄化はできないままだったし。

なにより、こんなのが続いたら、ディリアさんの力の消耗だけで蒼井くんの経験値が上がらない。蒼井くんをはじめとするこの勇者一行は、まだ完成された強さを持っていない。

そんなところに、魔王が現れたら　　？

「ディリアさん、起きて！　早く起きて！」

いまだ目覚めないディリアさんの体をゆすって無理やり起こす。小さく「ん…」と声が聞こえて、目覚め始めているのに気づく。さらに揺さぶって無理やり起こした。

「ディリアさん！」

「…あ……カリン、さん…？」

まだちよつと焦点が合わない目で私をみる。

「ここは…」

「村の人に言われた『忌み地』のところです」

「そういえば、浄化しようとして……」

意識がはつきりしてきたのか、ディリアさんは頭を押さえながら起き上がると、周囲を見回した。

「うそ……」

周囲の光景に信じられないようで、目を大きく見開いた。

そういえば、最初に芽吹いた草は、今はかなり成長してる。やっぱりエルデがいるとこないじゃ、差が出るのかな、と思っていると。

「これは……私が……いえ、ちがいますね。………カリンさん、あなた……ですか？」

状況把握は早いのか、ディリアさんは自分がやったという考えをすぐに捨てた。

そのため私も隠すことなく、「ええ」と短く答えた。

「どうやったらこんなことが……？」

「まあ、ずっと身につけていたこれと自分の力で」

と、水晶のブレスレットを見せた。

ついでに「浄化が一番得意ですから」と付け足すと、ディリアさんの目がまた大きくなった。

「それより、ディリアさんにお願いがあります」
「な、なんですか？」

隠しておきたかった自分の力。

でも今はそんなことを言っている場合じゃない。

私は、誰一人欠けることなく、元の世界に戻りたい。

そのためには、魔王のところへたどり着くまでに、みんなが強くなければならない。

「これから先『忌み地』の浄化は引き受けます。だから、それ以外にも魔族の被害などを聞いたら、それを受けてほしいんです」

『忌み地』の浄化を引き受けるというのと、魔族の被害を聞いたらその願いをすべて受けてほしいと言われて、ディリアさんはとまどっているようだった。

「カリンさん、あなたはいい……？」

「私は、元の世界で幽霊　こっちで言うと死霊といったほうが分かりやすいですかね。それを見ることができました。身を守るため

に、こちらで言う『浄化』の力も強くなったんです」

これだけ見れば、どちらかという私は剣を扱うより、巫女としてのほうが合っているだろう。

けど、手渡されたのは剣だった。私の力の確認もなく。

「カリンさんのことは分かりました。でも、ならどうしてそういった願いを聞き入れると言うのですか？ 瘴気が見えるのなら、この状況がまずいことは分かりますよね？」

ディリアさんの問いは、私の力を認めた上での問いだった。

私も話すと決めた以上、自分の力を出し惜しみする気はない。だから、自分が思っていることを素直に口にした。

「確かに瘴気は人を蝕みます。でも、このまま進んでも、それでは魔王のところへ向かうだけで、蒼井くんたちは強くないから」

篠原さんと堤さんはイメージして力を使うことを覚え始めている。このままいけば、どんどん力に慣れていくだろう。

でも、蒼井くん和大野くんは、ヴァイスさんに剣の手ほどきを得ているだけで、力の使い方で習ってない。だから、剣の腕は上がっても、それを最大限にするための力をほとんど使えていないといっている。

でも実戦を経験すれば、おのずと必要になってくる。死にたくないと思えば、それだけでも力が増す。

その説明をすると、ディリアさんは大きく目を見開いていた。

「カリンさん、あなたはいい……」

「いったいもなにも、勇者召喚に巻き込まれた一人ですけど」

他に何かありますか？ と軽く問うが、デイリアさんはまじめな表情で。

「それは……違うと思います。どうして今まで気づかなかったか不思議ですが、最初に呼び出された時点で、あなた一人だけ信じられないほど冷静でした。今も、数人で行う浄化を一人でこなし、先のことまで考える余裕　あなはた、いったい何者なんですか？」

瘴気を取り払ったせいか、物事をしっかり考えられるようになってたのだろうか。

デイリアさんは今までのことを分析しながら、真剣な表情で私に尋ねた。

16 新たな魔王（後書き）

タイトルがバラバラでんがなーと思いつつ；

17 花梨とディリアの問答

参ったな、というのが第一感想。

最初の頃のディリアさん、どうやらあの時から瘴氣にやられていたらしく、きれいに取り払った後は、落ち着いて状況を分析できるようになっていた。

おかげで突っ込まれてます、やばいです、ってなほど。

「えっと、実は元の世界でも知る人ぞ知る賢者だったり」

「嘘ですね」

「……どうして即答ですか？」

「今まで隠していたくらいですから、簡単にばらすわけがありません」

「あー…そうですね」

本当に冷静になっちゃったんですね、ディリアさん。思わず心中まで敬語で話してしまうわ。

これが駄目なら。

「さっき言ったように、私は霊退治のエキスパートで……」

「言葉の意味が分からないところがありますが、他の方たちとご学友ということから、恐らくそれも嘘かと」

「いえいえ、副業みたいなものでして。実は数ヶ月休んでいたのも、依頼で手ごわい霊を相手にしていたからで」

「どこまで話を膨らませるつもりですか？」

……てっ、手ごわい。こっちがあれこれそれらしいことを言っているのに、ディリアさんの目はぜんぜん信じてない。

うーん、いつそ別の手でいつてみるか。

「実は、新たな魔王だったり」

「え？」

「召喚時に紛れ込んで、ちょちょいのちょいで、みんなの記憶操作をして」

「まさか……だったら、どうして勇者を強くするためになどというんです？」

魔王という言葉に驚いたのか、今度は少し気になって尋ねてくる。とりあえず話を逸らしたいので、それに乗って種明かしをするかのように話し始める。

「だって、せっかく来てくれるのに、弱かったらつまらないじゃない。もっと経験つんで強くなってくれなきゃ、つぶす楽しみがないんだけど？」

まあ、途中でやられたらそれまでだけどね　と笑みを浮かべながら付け足すと、デイリアさんは眉を顰めた。

警戒し始めた様子に信じ込んだかな、と思っているとしばらくして。

「それも、嘘……ですね？」

「どうしてそう思うんです？」

「下級の魔族といえど瘴気を纏います。なのに、カリンさんにはそれが無い。それどころか瘴気の浄化まで行う　それは、魔族でなく、神に属する側の力です」

いや、神に属するなんて、そんなすごいものではないですよ、と心の中で否定する。

でもすでに勇者召喚に巻き込まれたその他一名に収まらなくなっ

ているようで　やりすぎたなあ、といまさらながらに後悔した。
はーっと深いため息をはいたあと、軽い口調に戻して。

「んじゃあ、実は真の勇者は蒼井くんじゃなくて自分だ、とか？」
「……先ほどのことを見るとそう言えなくもありませんが……それは力みの話です。他にも納得のいかない点がいくつかあるんですが」

う…、冷静すぎるよっ、ディリアさん！
もう面倒くさくなってきた。いずれどこかでばれそうだしな……
もう、自分からばらしてしまおうか。

「なら、勇者は勇者でも、二百年前に召喚された初代の勇者」
「それも嘘……ええっ!？」

あ、スルーしてくれなかった。
これもさっくり嘘だと否定してくれればいいのに。

「まさか……」
「あれ、嘘だと否定しないんですか？」
「いえ、だって……二百年前の勇者はこげ茶色の髪と瞳、まだ子どもといえる年齢、そして名前はリン、と。カリンさんの名前に似て……、でも、二百年前の話で……」

やばい、そこまで知ってたのか。
書庫で見た本にも詳しいことはあまり載ってなかったのに。さすがに最高位の巫女の情報を侮ってはいけなかった。

あーもう、仕方ない。ディリアさんには話せるところまで話そう。
諦めは早いほうなんだ。

「こちらの……世界と元の世界では時間の流れが大幅に違うようですね」

「え？」

本当にそうだと思わなかったのか、ディリアさんは驚いた表情になった。

私が最初呼ばれたのは、中学卒業してまもなくだった。そして、ここで『勇者』をやらされ、今の道のりを一年近い時間をかけて魔王の居城にたどり着き、そして封印した。そのあと、自力で元の世界に戻ったけど、戻った時点で数時間の誤差しかなかった。

「そして、約半年後、蒼井くんを初めとしてまたここに来たのが、その二百年後ってことですね」

と、指を二本立てて説明する。半分諦め、半分ヤケで。
でもディリアさんは私の話を真剣に、だけど興味深げに聞いている。

「では、どうやって戻ったのですか？　勇者は亡くなり、城に帰還したという話は聞いていません」

「はあ、まあ……戻ったら厄介そうなんで、自力で召喚陣を作り上げてですねー、んで、帰還と同時に召喚陣つぶすように設定して、証拠隠滅　ってわけです」

あの頃は、今ほど穿った考えをしてなかったけど、一年かけてたどり着いた道のりをまた戻って、あれこれ説明する気になれなかった。

早く還りたい、その気持ちだけで。

今なら、戻ったら歓迎だのお祝いだのと称しながらなるべく引き止め、勇者を外交手段に使うんだろーな、と想像してしまう。リー

トたちから勇者召喚の話の裏話を聞いているからなおさらに。
ディリアさんもその辺りを察したのか、表情は暗くなる。

「まあ戻ったら戻ったで、怪我の治療やらなにやらで、三分の二は療養だったんですけど」

元の世界ではこれほどの力は使えないから。ただ、幽霊が見える、靈感があるというだけで終わってしまう。攻撃する力も、傷を癒す力もこのように使えない。

「前のことがあるから……黙っていたんですか？」

「まあ……、ああそれと、最初はこの世界が前に呼び出された世界と同じかどうか決めかねてたので」

二百年前　あの時、瘴気はあたりに漂っていて、精霊たちはほとんどこの国には存在してないほど荒れていた。国中が『忌み地』といっているほどに。そんな中を魔王のところまで行くのだから、今より魔族との対面は多いし、やりあう数も多かった。

なにより一番の違いは、その人に属性があって、その属性のアイテムを使ってその属性しか力を使わないということだ。

二百年前は、そんなものは関係なく想像するままにいろんな力を使っていたから。アイテムはあっても、そんな風に力の使える範囲を自分から狭めたりしなかった。

私の属性が分からない　となったのは、たぶんその辺りからだろう。二百年前は他の人も、いろいろな属性を普通のように使ったから。

「それは、初めて聞く話です」

「どこでどうなったか分からないけど。でも……」

と、途中で言うのをやめて、横に置いておいた剣を取り上げた。

「この剣が、属性が分からなくても使えるように、そうやってみんな、アイテムを使っているんな力を使っていたんです」

剣 アインスを抱きしめるようにして当時を思い出しながら語る。

そう、この剣は以前私が使っていたものだった。当時、刀鍛冶としての腕は並ぶものがないといわれたシユタールが、心血注いで私に合ったように作り上げた一振りだった。

剣を知らない私でも戦えるようにと。でも力を極力押さえるために、闇雲にきるだけじゃなく、臨機応変できるような機能もある。見た目が変わりすぎてたんで、すぐに気づかなかったけど。危険だと思って抜かなかったし。

そんな感じで、昔は前からあるアイテムなら、その人に合ったようにカスタマイズして使うか、または最初からその人に合うように作るかして、属性がどうのといった制限はなかった。

この辺りが、似ているけど違う世界かも？ と思う一因だったと説明した。

「そもそも、ディリアさんの『浄化』とか、篠原さんの『癒し』はどこにも属さないものですよね？」

「ええ、確かに」

「それに勇者は蒼井くんになっていたし、私は属性が分からないからおまけ程度に見られていたから、それなら適当にしようと思っただんですよね。下手に口を出せばどこでそんな情報を？ なんて言われかねなかったんで」

おまけに見られているということを見ると、ディリアさんは「そ

れについては済みませんでした」と謝った。

それから前の話に戻って、蒼井くんたちを強くするために、魔族退治はなるべく引き受けることにしてもらった。魔王のところにとり着くのが遅くなっても、強くなってからでなければ、魔王と一戦交えるのに必要な力が身につかないから。

「今回の浄化の件はどうでしょうか？」

「うーん…、ディリアさんが主で私が手伝ったくらいにしてほしいです。私が表に出るとなると、昔のことまで話さなくなるから」

それに、ディリアさんは瘴気にやられていた分、百パーセントの力がでてなかった。今ならさっきより力を出せるはず。

あと属性が分からないとなっている私に、浄化ができるか試してみたことにすればいい。

「いいんですか？　ここをこれほどまでに綺麗にしたのは、あなたの手柄ですのに」

「別にいいです。私は、誰一人欠けることなく、元の世界に戻りたいだけだから」

仲がよくななくても、数ヶ月一緒に教室に一緒にいて、それなりに会話をしたことのある人たちだったから。相沢花梨個人に対して話しかけてくれる人たちだったから。

だから、自分ひとりで還れると思っても、還る気にはなれなかった。

17 花梨とディリアの問答（後書き）

とりあえず正体ばらしたところで一段落。

18 初、魔族退治（前書き）

登場人物が簡単すぎて必要ないと思ったので、編集しなおして18話に。

今回魔族退治なので、ちょっとそういったシーンが入ります。

18 初、魔族退治

みんなのところに戻って、ディリアさんが浄化が終えたことを報告した。

ディリアさんは自分の手柄にするのが気になったのか、私が手伝ったからできたのだと言った。そのせいで周りに奇妙な目で見られる。

レーレンだけが、力のことを知っていたので納得した顔だったけど。

村の人からはものすごいお礼の言葉と、そして遅くなったので村の宿に無料で泊らせてくれることになった。

ディリアさんが目覚めるまでだいぶ時間がかかって、そのあと話をしてたからみんなのところに戻ったのは夕方近かった。ディリアさんの力が回復してないのと、この先泊れるようなところがないということ、村の人たちの好意を受けたのだった。

そして夜はベッドの上でゆっくり休んで、次の日を迎えた。

なるべく何事もなかったかのように、ディリアさんともほとんど話をしなかった。他の人に対しても同じだった。

レーレンだけが別で、普通に話しかけてくる。昨日のことも特に詮索することもなく、他愛無い世間話と、そして元の世界でこちらにとって商売になりそうなものがないかという、隙あらば美味しいところを持っていきたいという感じが見え隠れしていた。

まあ、別に向こうの世界の特秘事項など持っていないからいいやということ、いろんな話をした。

そんな時、今度は魔族の襲撃があった。

遠くで悲鳴が聞こえたのに気づいて、慌てて蒼井くん、大野くん、ヴァイスさんの四人で向かう。もし馬車のほうに襲撃があっても、防御くらいはできるということで、護衛に誰かを残すことはなかった。

行ってみると、襲われている人たちは商人たちだったのか、大きな荷馬車から出て逃げようとしていた。護衛の人たちは魔族と奮闘しているも、あまり芳しくない。荷物より人命をへというか、魔族は人の荷物に興味がない（優先ということで、先にたって逃げる商人の後ろを守りつつ後退している状態だった）。

魔族はというと、一言で表すなら獣人。といっても、茶色い長毛に覆われた体には服など身につけていないし、武器もない。ただ、その鋭い牙と爪のみで人を襲っていた。

大型犬でも十分怖いのに、二足歩行で理性のない獣に襲われたら堪ったものじゃない。ヴァイスさんは半ば錯乱している商人の人の後ろに追いやり、蒼井くん、大野くん、あと私は今戦っている護衛の人の援護に入った。

「大丈夫か!？」

切り裂いた場所から魔族の血　少し透明で、黄色というかオレンジというか色　が噴き出す。人の赤い血とは違う。

けど、魔族の叫び声と飛び散る血を見て、ほんの少し動揺の表情を見せた。稽古だと実際に傷つけるまでしないし、こんな悲鳴を聞いたのは初めてだろう。魔族といえ、動物を傷つけたという罪悪感からか……。

それは自分にも、見に覚えがある感覚だった。深く息を吸い込み、余計なことを考えないようにする。そして剣を抜き放ち

「行くよ、アインス」

剣の名を呟くと同時に、近くにいた魔族に切りかかった。

細身の剣は“断つ”というより“斬る”ほうがあっている。けど、この剣は硬度もあるから“断つ”こともできる。腕力は力を使って補って。剣に自分を委ねて、力の解放だけを意識すると、剣は私にあつた速度と力で敵　魔族を斬る。

二匹片付けている間に、蒼井くんは立ち直ったのか次の魔族に立ち向かっていた。

大野くんといえば、剣に慣れていないこともあつて苦戦している。魔族の爪が横から伸びて大野くんの脇を狙おうとしたのを見て、きびすを返してその魔族を斬りつけ、こちらへと意識を向けさせた。

この剣のこういうところは変わらない。“敵を斬る剣”なのに、必ず私の意志のほうを優先してくれる。最初の説明では物騒な剣と思ってしまったけど、剣の名を呼んだ時点で、剣はすんなり私の意志を尊重するようになった。やっぱり私用に作ったものだからだろうか。

戦闘には必要のないことなのにあれこれ考えてしまうのは、私も魔族といえど、生き物を殺しているという事実から目を逸らしたいからなのかもしれない。

剣で切り裂いたときの感触、断末魔の悲鳴は、何度聞いても慣れるものではない。また、慣れたくもない。

なんだかんだいいながらも、ある程度の時間で魔族はすべて片付けた。

とはいえ、魔族といつても赤い血と、残る亡骸を見ると、なんともいえない気持ちになるが。

蒼井くん和大野くんもそう思ったのか、怪我もなく魔族を屠れた安堵より、罪悪感とも後悔とも取れるような表情をしていた。

そんなところに、助けてもらった商人は。

「いやー助かりました、ありがとうございます！」

と、にこやかな笑みとともに明るい声で礼を言った。

そのお礼に少しばかり心が軽くなったのか、蒼井くんが「……いえ、間に合って何よりです」と答えた。こういったときはお礼を言われたほうが心が軽くなるものね。二人はさっきより表情がよくなつて、やっと人を救ったというのを感じはじめたようだった。

初めて魔族と戦ったことで、ほんの少しだけ前進した気がした。

その後は残った魔族の骸の処理と、浄化が必要になる。

けど、浄化しているところを見られたくないんだけど……ディリアさんに任せてしまってもいいだろうか。前回の『忌み地』ほど範囲は広くないし、瘴気も少ないし。

などと思っていると、ディリアさんは助けた商人たちをはじめ、蒼井くんたちも目に見えない程度の距離まで遠ざけた。

「デ、ディリアさん？」

「これならカリンさんも遠慮する必要がないでしょう？ 今後このような形でやっていきたいと思っています」

「えと……本気ですか、ディリアさん？」

これじゃあ、前線で戦うのと浄化の二つの作業をこなすことになるんですが……私一人だけ超過勤務ですか！？

「カリンさんの力はとても便利ですもの。知ったからには存分に働いてもらいます。それに、カリンさんがもう少し協力的でしたら、みんなとの連携だってもう少し楽になりますのに」

マイナスの分を帳消しにするよう、頑張ってくださいね、と笑みとともに言われて、私は口元を引きつらせた。

どうやらデイリアさんは使えるものは何でも使う主義らしい。話す人を間違った　と思ったのは仕方ない。とはいえ、後悔先に立たずで、いまさらどうにも　ん、いつそ殴って記憶消去とか、なにと物騒なことを考えていると、デイリアさんに。

「カリンさんは思ったより表情が出る方だったんですね。今なにを考えているか分かるような気がします。これからは背後には気をつけることにしますね」

と、さらりと言いやがりました。

この巫女さん、瘴気がなくなったら別人じゃん！　ってなほど頭が回るようになって厄介だったらありやしない。

でも、最初からなにコイツ！？　と思うような態度と口調で大嫌いだと思ったのに、今はその気持ちも薄れて、少々嫌味を含んでいるものの、相手を認めての会話になっている。

あ、そっか。私はデイリアさんが嫌いだったんじゃないで、前のデイリアさんのように上にいて自分より下だと思う人を見下していた人だったんだ。でも今のデイリアさんにはそれがなくなったから、普通に話せるようになったんだ。

自分の人間不信も治さなきゃな……　と思いつつ、ブレスレットを手にして浄化を始めた。

こんな感じで、進むと魔族にあつて退治して浄化して、それを繰り返しながら、十日くらい過ぎた。

といっても、魔族退治と浄化でほとんどみんな疲れちゃうので、思ったよりその歩みは遅かったのだけど。

それでも前よりは早くつきそうだと心の中で思っていた。

18 初、魔族退治（後書き）

これくらいなら、別に『残酷描写有り』という仰々しい注意書きは要らないかな。

自分の筆力ではこのくらいがせいぜいです；

18・5 勇者の苦悩（前書き）

番外編っぽいので、今回は勇者にされた蒼井一人称な話です。

18・5 勇者の苦悩

俺は蒼井隼人、高校一年生だ。あおい はやと

親友の洋一と一緒に、クラスの中では割と中心にいたと思う。友だちも結構いたし、女子ともよく話をした。成績は中の上くらいか。容姿端麗・頭脳明晰　なんて嘘でも言えないが、それでも学校生活は充実してたほうだ。

けど、ずっと休学していた隣の席の相沢花梨が復学したとき、衝撃を受けた。あいざわ かりん

高校に入る前に怪我で入院していたとかで、一学期の終わりになって初めて登校した彼女を、担任はまるで転入生のように紹介した。病院にいて日に焼けていないせいか色白の肌、同じ高校一年生とは思えない落ち着いた態度、顔立ちが素直にきれいだといえるくらい整っている。が、何よりも印象的なのは、髪の色より明るい茶色い目だった。

なぜそう思ったのか、よく分からないが。

そして一学期の終わり、期末テストで上位に入ったことにも驚いた。だって今まで怪我して病院にいたやつだぞ。どうしてそんなに点取れるんだよ？

きれいで頭も良くて　できすぎてないか、と思っていると、案の定というか、クラスの女子の中から浮き始めていた。

相沢のそっけない態度も一役買っているだろう。休み時間はたいして一人で本を読んでいて、話しかけても二、三回のやり取りで会話を終わらせる。そんなことをしていれば、みんなよく思わないだろう。俺も気になっては話しかけるものの、返ってくるのはそっけない言葉だけ。

それが、ここに来るまでの相沢との関係だった。

城からでて二日で魔族と会い、そこからは坂から一気に転げ落ちるように（ん、この表現はいまいちか？）魔族と遭遇する数が増えた。多い日には四回というのもあったしな。

俺は日本では剣道を中学のときからやっていて、一緒に来た中でも一番上手く剣が使えると思っていた。

でもそれは自惚れだった。いくら剣が勝手に動いてくれるといっても、相沢の流れるような動きと、その後に倒れていく魔族を見て俺の自信は見事に砕けた。

頭が続いて剣までかよ、と心の中で毒づく。

いくら剣のおかげだといっても、結果を見れば明らかだろ。俺が魔族一匹を何とかしとめている間に、相沢は身近にいる魔族のほとんどを片付けてるんだぜ？

どっちが『勇者』だか分かったものじゃない。ってか、あいつが選ばれれば良かったんだ。でなければ、形だけの勇者にならなくても済んだのに

旅に同行している巫女であるディリアさんにどうして俺を選んだのか問い詰めたこともある。

でも、五人の中で一番力を感じたから　という曖昧な答えしか返ってこなかった。確かにこの世界では力がモノをいう。力といっても魔法とも、腕力とも違うがな。

で、ディリアさんに言わせると、今の俺は剣の腕を磨くのに精一杯で、力を使ってないという。力を使うということを身につけてください、と言われた。

でも風の力なんてどうやって使うんだよ？　俺はただの高校生だったんだぞ。せめて魔法で呪文なんかがあれば、まだイメージしやすいのに……今の俺は、成果を目に見えて出すことができず、焦り

しかなかった。

今も相沢との力の違いを見せつけられて、近くにあった樹に八つ当たりで殴りつけた。

「蒼井くん、大丈夫？」

そんな俺を心配して尋ねてきたのは、前からよく話をしている篠原だった。

「いや、怪我はしてない」

「でも疲れてそうだよ。何か食べる？」

癒しを得意とする篠原に、怪我はないからというと、じゃあ食べ物という。でも、放っておいてほしかった。だから、俺は伸ばされた手を振り払うように。

「喉が渴いたから水飲んでくる」

とだけ言つて、近くに川があるといったのでそこへと向かった。後ろで、「水ならあるのに……」とぼやく篠原に、慌てて「冷たい清水がほしいんだ」といつて手を振った。これ以上心配かけさせたら、俺がいる意味なんかねえってことに気づいたから。

草を踏み倒しながら乱暴に進んでいくと、川幅がおよそ一メートルくらい（こつちでの計測単位は面倒だから割愛する）の澄んだ水が流れる川にたどり着いた。

川のすぐ側で膝について水に触れようとした瞬間、ビリッとまる

で感電したような感覚にあつ。なんだ、と思つて、目を凝らすと、ところどころ瘴気が混ざつていた。

あまり力を使いこなせない俺でも、ディリアさんの指導のおかげか、瘴気の把握くらいは多少できるようになった。瘴気が分かれれば魔族がいるとかそういうたのが分かるといつて、旅に出てからまず最初に教えてもらったことだ。

まあ教えてもらったとかは別にしても、こんな瘴気混じりの水じや飲む気になれない。もう少し上流に行けばきれいな水があるだろうと思つて立ち上がった。

川の流れに沿つて歩く間、目は川の流れを追う。だんだん瘴気が少なくなり、そろそろ飲めるところがありそうだな、と思つて視線を上げると、上流には相沢がいた。

川のすぐ近くにある樹に寄りかかりながら、片方の手を水につけて、もう片方は地につけて体を支えているようだ。

……疲れてるのかな？ ……まあ、当然か。俺たちと一緒に戦つて、その後はディリアさんの浄化の手伝いだし……相沢のしていることを考えると、自分の八つ当たりがすごく醜く見えるよな。

なんともいえない気持ちになつて手で頭をくしゃくしゃというか、ガリガリというかそんな行動をしてしまう。

それから、篠原のところへ連れていって回復してもらふようにしようと思つて相沢にもう一度視線を戻す。

「マジかよ……」

相沢は疲れて寝ているんじゃないかと、川と地面を同時に浄化していた。

ディリアさんに言われて瘴気を見る癖をつけたから分かる。辺り

に漂う瘴気の中、相沢の周りの地面はきれいになっていて、しかも枯れたはずの草も勢いを取り戻している。川も、手を入れている先から瘴気が消えて元通りの清水になっていつているのだ。

最高位と呼ばれる私でさえ、『忌み地』ひとつ浄化するのは難しいのです。

最初、『忌み地』を浄化して戻ってきたとき、ディリアさんが恥ずかしそうに告げた。そして、そのために相沢に手伝ってもらったとも。

ディリアさんでさえ大変だという『浄化』をこんな自然な状態のできるコイツはなんなんだよ!?

信じられない目で見てると、ゆっくりと目を開けた相沢とバツチリ目が合ってしまう。すげえ、気まずい。

「蒼井くん? どうしたの」

だけど、相沢はそんなことを気にせずに普通に話しかけた。

しかもさっきまで浄化していたことなど微塵にも感じさせないような普通の口調で。

「水飲みにきたら、瘴気で汚れていたからここまで来ただけだ」
「そう? この辺なら大丈夫だよ」

立ち上がって何もなかったかのような顔をして立ち去ろうとしている相沢。

思わずその手をとって。

「蒼井くん?」

「どうして平気な顔してられるんだよ!？」

「……は？」

きょとした顔をしている相沢に、いろんな思いが混じりあつて溢れた。

「どうしてそんなに力を使えるんだよ！？ それにみんなから仲間はずれにされているような感じなのにぜんぜん気にしてなくて……お前を見てると自分がすっげえ小さく思えて惨めになる……！」

半分以上は愚痴だった。こんなこと、相沢だつて言われても困るだろう。でも、それでも情けないことに口から溢れ出てしまった。

「どうしてそう思うの？」

「だって、相沢は一人でも平気で、魔族だつてほとんどやつつけてでも平気な顔して、その後だつてのに浄化まで……」

俺が頑張っているところを、相沢は飄々とした顔でどんどん先に行く。

それがなんかとても悔しくて

「そうかな。でも、蒼井くんは『勇者』の肩書きに負けないように頑張つてると思うよ？」

「え……？」

「勇者つていえば、みんなが見るじゃない。大変なのに頑張つてるなーって思うけど。それに蒼井くんはこういうのを見るの、初めてでしょ？」

さらりと『頑張つてる』と言った相沢の言葉に嬉しくなり、その後、『こういうのを見るの初めて』といったのが気になった。

「こついつの、って？」

「いや、えっと…死体とかそういうの？」

「相沢はよく見てたのか？」

「さすがに死体はないけど、血みどろの霊とか結構見てるから、たぶん、その辺は蒼井くんより慣れてると思うよ」

ち、血みどろの霊！？

「あれ、言ってなかったっけ？ 私、靈感つてのがあって、霊とかよく見るの。怪我して入院してたときもよく出てきたし、治ってやつと学校に行ったのに、ああいうところって人が集まるせいかな、気を抜くと見ちゃうんだよね」

……も、もしかして、最初からその辺の耐性というか、レベルが違っていたのか？ だとしたら、俺が悩んでいたことは無駄なのだよっ！？

「あ、ちなみに油断していると霊に近寄られて無駄に怖い思いをするから、跳ね除けるくらいはできるようになってただけで、それがこつちでは『浄化』に近いみたい」

……決定。俺の悩みは全部無駄だった。

「ば……」

「ば？」

「馬鹿みてえ。俺、力使いこなしてる相沢に嫉妬してたんだ」

「うーん……確かにそれは馬鹿みたいだね」

「おい」

「だって力がぜんぜん違うもの。なんに使いたいかで変わるんだよ？ 魔法とより超能力に近いものだもん」

「そうか、超能力か！」

魔法より超能力という言葉が、なんとなく引つかかっていた心ですとんと落ちた。

そっか、イメージとか想像するとか、曖昧なことを言われてよく理解できなかったけど、なんか、超能力のようだといわれたら納得できた気がする。

「蒼井くん、あまり本見ないでしょ？」

「なんで分かる！？」

「だって力の使い方とか、想像するって言われてもピンとこなかったみたいだし」

「わ、悪かったな。還ったらちゃんと見るよ」

「うん、還るために頑張ろう」

「当たり前だ！」

さっきまでの心のもやもやは晴れて、気づくと相沢の言葉に思い切り答えていた。

18・5 勇者の苦悩（後書き）

それぞれ抱えているものはある…んだと思う。
ということ、今回は別の人の一人称、心情だだ漏れ話でした。

19 新たな謎と、勇者の修行（訂正、しじき）

旅が続くと疲労が溜まっていく。そのために、比較的穏やかな村で一日休みを取るようになった。

村の名前はエンテ。魔族の被害にあっていない、珍しい村だった。ディリアさんと二人で村の瘴気を確認して、ないことに驚いた。ディリアさんが驚いて村人達に尋ねると、村の人から。

「ああ、それはきつと、前の勇者様が置いていかれたクリスタルのおかげでしょう」

という返事が返ってきた。

前の勇者といっても、二年に一度の大会と勇者選定は最近まで行われていたため、ディリアさんが知る大会で最後に勇者になった人かと尋ねると、そうではなく前の魔王が現れたときに封印してくれた、勇者のことだという。

それに驚いてディリアさんは私を引っ張った。

「カリンさん、あなたいったいなにをしてたんですか!？」

「あ……えーと、確かいくつかの村にクリスタルを置いてきた覚えが……」

「それは分かりますが、どうしてこの村のことを覚えていないんですか!？」

「だって名前とかいろいろ変わってるし、あの時はそこまで余裕なかったし。ってか、そもそもそのときのクリスタルが、いまだに効果があるなんて思うわけないでしょう!？」

ひそひそと、側から見ればかなり怪しい会話を繰り広げる。

「確かにそうですが、隠したいのならどうしてそんなことをするんですか！」

「だからさっき言ったように、当時はお守り程度で危なさそうところにおいてきただけですってば。いまだに効力を持っているって聞いたこっちが驚いてます！」

力を使うアイテムは、身につけて使うのが主だけど、自分の力を染みこませて遠隔操作することもできる。でも、それは力の持ち主が生きている間で、しかもその力がアイテムの中で尽きてしまえばそれまでだ。

二百年もの間、ずっと保っていられる力の入ったアイテムなんて知らないし、そんな力作を作った覚えもない。

頭を左右に振る私に、デイリアさんはため息をついてから村の人にそのクリスタルを見せてほしいと頼んだ。

村の人は快く受けてくれて、デイリアさんは招かれるような家の中に入っていく　と思つたら、私の服を引っ張っている。引っ張りなおすと、デイリアさんは振り向いて、自分のものかどうか確認してくれという視線を送ってくる。仕方なくデイリアさんの後についていった。

見せられたクリスタルは占い師が使う水晶球のような大きさだった。とてもじゃないけどブレスレット（本当は数珠？）に使っていた水晶のサイズじゃない。どうなんですか？　せつつくデイリアさんに。

「あのですね、魔王を倒す旅をしているのに、あんな馬鹿でかいクリスタルを持ち歩くのがどこにいますか！？」

「そ、それもそうですね。でも……」

「だいぶ前のことみたいだし、どこかで話が食い違ったんですよ、きつと」

「そうかもしれませんね」

二百年前の話なんて、もう昔話に入る類のものだ。言い伝えられている間に、少しずつ変わっていつている可能性のほうが高い。ただ力を保ち続ける、あのクリスタルは気になったけど。

「相沢！」

外に出て冷たい水でももらおうかと思った矢先、蒼井くんは声をかけられた。

「なに？」

「いや……休みの日に悪いんだけど、力の使い方を教えてくれないか？」

「力の使い方？」

「相沢に言われて、それなりにイメージしてみるんだけど上手くいなくてさ。だから、その辺教えてくれ！」

と、手の平をあわせてお願いされた。

蒼井くんとは少し前から、少しずつ打ち解けられた感じで、少しずつ会話が増えていた。

「いいよ。でも暴走したら困るから、少し場所を移そうか？」

「ホントか？ 頼むぜ、相沢！」

さっきまでの気まずい表情がなくなつて、蒼井くんは人懐っこそ

うな笑顔で喜んだ。

ああ、こういうのが女の子が蒼井くんを気に入るのかな。すごくイケメンってわけじゃないけど、顔立ちはいいほう。で、人見知りをしてしないで誰とでも話をして、楽しいときは無邪気に笑う。どちらかというと弟にしたいキャラ　という感じ。

私の場合、こっちでの一年があるから、本当はみんなより一つ上になるんだよね。それもあるのかな？　見捨てておけないって思ったのも。なんだかんだ言っても一緒にいるし。

「なんだよ、相沢」

「ん？　なにが」

「いや、なんかニヤニヤしてるぞ」

「そう？　それはきつと蒼井くんのせいだよ。蒼井くんって見てたら犬っぽいなって思ったから、つい……」

黙っていようと思ったけど、意地悪く、思ったことを口にした。だって、人間なら弟。それ以外なら犬みたいなんだもの。

「なんだよ、それ？」

「ん？　かわいいってこと」

瞬間、蒼井くんの顔が真っ赤に染まった。

やりすぎてしまったか。さすがに、高校一年生の男の子にかわいいはなかったかな。ここでの一年間も年齢に入れるとすると、みんなより上になるんだもの。話してみると蒼井くんはかっこいいというより、かわいいと思うんだからしょうがないじゃない。

「ととととにかく、行くぞ」

「はいはい」

照れた蒼井くんはこれ以上言われたくないらしく、どもりながら話を元に戻した。でもやっぱりその姿がかわいく思えて、くすくす笑ってしまった。

同時に、自分の蟠りのせいでみんなをちゃんと見ていなかったことに気づいて「ごめん」と呟いた。その声は小さくて、蒼井くんには届かなかったみたいで、少しほっとした。

「じゃ、早速教えてくれよ」

村から外れて人が来なさそうな森まで行くと、蒼井くんはやる気満々だった。さあやるぞ、という意気込みが感じられる。

「うん、でもその前に、蒼井くんの剣を見せてもらってもいい？」

蒼井くんは勇者にと特別に作った剣を持っている。最初から作ったのなら蒼井くんが一番使いやすいだろうし、元あったものでも多少カスタマイズしてあるはずだ。

蒼井くんから剣を受け取って剣を見ると、やっぱり装飾過多だなと思う剣を渡される。ついた装飾類のせいか、普通の剣より重い気がする。

「ねえ、これ重くない？」

「そうか？ 確かに竹刀に比べりゃ重いけど、こっぴつたのと一緒にするのが間違いだろ」

「そりゃそうだけど……蒼井くんって思ったよりアバウトなんだね」「悪いかよ」

「うつん、いい意味で言ったんだよ」

蒼井くんに許可をもらって剣を鞘から抜き放つ。すると、鞘が装飾過多らしくて、剣のみになるとさほど重みを感じさせない。………
っていつても、私が持っているのよりかなり重いけど。

剣自体に風を象徴しているのか、薄い青緑の大きな宝石が剣首のところにはめ込まれていた。それ以外に鞘についている宝石は力の増幅ができるようなアイテムじゃなく、普通の宝石。

なんていうか、ガチガチに風の力のみ増幅といった感じ。これじゃあ超能力のようなもの、といってもいまいち分かりづらいだろうね、と納得してしまう。

「どうした？」

「うつん、あのね、蒼井くんが風だと思い込んでみたいで、この剣には風用のアイテムしかついてないみたい。でもこれだけ大きいし、ある程度は他のも使えると思うんだけど……」

「え、だって俺、風だって言われたし、なんの問題があるんだ？」

「だから……本当は風だけじゃなくて他の力だって使えるんだよ。超能力っていったらどんな力があると思う？」

「レポートだろ、それに……サイコ……なんだっけ、物を持ち上げるやつ、んで、透視とかもそうだよな。他には……」

私の問いかけに、蒼井くんは考えながらポツリポツリと思いつく単語を羅列していく。

「うん。その中に風とか火とか、そういつたのを連想させるものってある？」

「……………ねえな」

「そう、ないんだよ」

その後、超能力のようなものといったけど、厳密には違うんだよと説明する。

それでも、どういう風に使いたいかは自分の考え次第だから、こんなことはできないかなとか想像するのも一つの方法だと説明した。

「蒼井くんは風を使って戦うとしたら、どうやったら一番効果的にできると思う？」

尋ねると、蒼井くんは考え始めたのか腕を組んで首を傾げる。
あまりに考えすぎてかなり傾きかけた頃。

「吹き飛ばすとか。あとは……うう、あんまり思いつかねえよ」

「でも、蒼井くんは無意識には使ってるんだね」

「え？」

「だって、お城で私とやったとき、蒼井くんは風の勢いを利用して突っ込んできたじゃない？」

さらりと言うと、蒼井くんはものすごく驚いた顔をしていた。本当に無意識でやったんだね、蒼井くん。

でも無意識でそれができるなら、意識してやったら結構な力になるんじゃないのかな。だったら、デイリアさんが蒼井くんを選んだのは間違いじゃないんだね。

それから、風といってもそよ風のようなものから突風、竜巻、鎌鼬　さまざまあるから、その場で必要なものを考えればいいよ、説明した。

「たとえば、剣に石がくつついてるから、剣に風をまわせて剣圧で相手を斬ると同時に吹き飛ばしたり、風で渦作って真空状態にしてそれを飛ばしたり」

「鎌鼬か」

「うん」

「あと、危ないってときは、相手の足元を風でさらって姿勢を崩すのも手だよな」

とりあえず思いつく　　というか、昔使った手を思い出していくつか話すと、蒼井くんは感心した顔をして。

「相沢ってすげえな。ってか、よくそんな手をポンポン思いつくよな。なんか、最後のはちよつと卑怯な感じしたけど」

たぶん、別に悪気があって言っているわけじゃあないんだろう。

でも、その後もヴァイスさんに教わってたから剣の稽古って感じだけど、私の場合、いろんな手で狙ってきそうだから、すごいスバルタで怪我しそうとか言うんだよ！？　鬼教師みたいだって。

教えてもらうのに、もう少し考えてもの言おうよ、もうっ！

「……ほほう。力の使い方を教えてほしいと言ったのは蒼井くんなのに、そういうこと言うんだ？　じゃあ、実践やってみよっか。その、鬼教師と手合わせすれば、少しは上達するでしょうしねえ？」

嫌味と笑みを交えて言うと、蒼井くんは「やべっ」と慌てる。

うん、でももう遅いんだよね。みんなからすれば“敵とみなしたものを斬る剣”を抜き放つ。

蒼井くんは敵でもないし、この剣は私の言うことを聞いてくれるけど、それを知っているのはディアアさんくらい。だから、私が蒼井くんに向けて剣を振るい始めたのを見て、蒼井くんは本気で私を怒らせたと思ったようだった。

そうして日が暮れる頃まで、自称：蒼井くんの特訓。

でも側から見れば、一方的な蒼井くんいじめが続き、最後にはパタリと倒れた蒼井くんの姿を上から見下ろした。

鬼教師とか、スパルタとか、要らぬことを言うからそういうことになるんだよ、まったく。

19 新たな謎と、勇者の修行（訂正、しごき）（後書き）

だんだんカリンの隠していた性格（本性？）がじわじわ出てきてい
るような気がする；

20 割り切れないもの

ヨレヨレになってしまった蒼井くんを見て、さすがにやりすぎたかなと後悔する。

それにこのままだと借りた部屋にも戻れないので、体力はともかく傷だけは治療した。

「相沢、ちょっと反則過ぎねえ？」

「は？」

「あんなに力使いこなした拳句、治療もできるのかよ」

治療が終わってから蒼井くんの最初の一言は、「ありがとう」じゃなくて、ふてくされたばやきだった。

まあ分かるよ、いいたいことは。

「うん。私、みんなみたいに属性に縛られてないからね。みんなみたいにガツチリ属性決められちゃうと、他のを使ってみようって思わないでしょ？」

「そりゃ……でも、分からないのと使えないのと違うのか？」

「違うみたい。分からないって言われたのに力はあるっておかしいよね。だから、何が使えるかなって思っているいろいろ試したら、いろいろ使えるようになったよ」

人にはこの属性しか使えないっていう決まりなんてないし、アイテムには確かにそれぞれの属性（本当は精霊）が好む色があるけど、だからといってそれ以外の属性が使えないわけじゃないこと。

ついでお守りに持たされたクリスタルは浄化だけでなく増幅もできるから、それと上手く使い合わせれば、風だけでなくほかのものも使えるはずだということも。

「うわっひでえ。お前、それ知ってて教えなかったな!？」

「だってディリアさんだって知らないくらいだったし」

「え？」

「私の場合、属性ないってことで放っておかれたから、書庫で結構古い文献とか調べて知ったんだよ」

さすがに前にも召喚されました、なんてことはいえないので、それらしい言い訳をした。書庫に入り浸っていたのは本当だから、蒼井くんはそれ以上追及してこなかった。

いまだと、こういうすぐに人を信じちゃうところなんか、本当にかわいいと思っちゃうんだよね。弟にして遊び倒したくなる。

でもそこまで言っちゃうとかわいそうなんで、「早く戻ろう」とだけ言って、部屋を貸してくれた村長さんのところまで戻った。

戻ると大野くんが待っていて、力を使う練習なら自分も一緒にやりたかったと主張する。

でもあまり知られたくもないので、たまたま蒼井くんが練習相手を探していたら私が目の前を通ったからと答えた。それを端のほうで聞いていた蒼井くんは。

「相沢」

「ん？」

「なあ、さっきの……あまり知られたくないのか？」

「力のこと？ 確かにあまり知られたくないけど」

「なら黙ってる」

「ありがとう」

「俺こそ、使い方教えてもらったり、怪我治してもらったり……ありがとう」

「どういたしまして」

コソコソと蒼井くんとやり取りすると、蒼井くんも話をあわせて、属性が分からないからどんな手で来るか分からなくていい練習相手になった、と大野くんに力の練習をしていたことを話してる。

だからあまり知られたくないのに、そんなに細かく説明するなんて。新しいオモチャを手に入れた子どものようにはしゃぐ蒼井くんに心の中でツツコミを入れた。

それから夕食を貰ってお腹を満たした後、お風呂には入れないので、沸かした湯で体をきれいにする。そして貸してもらった部屋に戻った。今日はディリアさんと相部屋だった。

まだしっかり乾いていない髪の毛を櫛ですいて整えていると、ディリアさんも戻ってきた。

「もう戻っていたんですね」

「あ、はい。ディリアさんはどこへ行っていたんですか？」

ディリアさんのほうが年上なので、それなりに話をするようになったものの敬語は抜けていない。ディリアさんもそれを指摘することなかったなので、互いに敬語で話していた。

「例のクリスタルをもう一度見せていただいていたんです」

「ああ、あの。で、どうでした？」

「詳しいことは分かりませんでした。でも、あのクリスタルは力に満ちていて、当分の間この村を守ってくれるでしょう」

いまだに力に満ちたクリスタル。だとしたら、やっぱり私が置いてきたものとは違う気がする。

前の私は、水晶のブレスレットを左右の手首にしていた。霊などから身を守るためにはもつと高価な石のほうがいい。

でも中学生の私には、修学旅行で買った神社のお守りぐらいしか買うことはできなかった。だから二つ買って左右の手首にしていた。その片方をばらし、いくつかをこの世界の人に渡したことも覚えている。

でも、気休め程度のものではなかったはずだし、昼間も言ったけど、あんな大きいものではなかったとディリアさんに話した。

「……そうですか。あれがカリンさんのものなら、ある程度納得できたのですが」

「納得されても……ね。ずっと力を保ち続ける　なんて、自分の力を疑いますよ。そんなことまでできたら人間じゃないみたいで」

靈感などなければもつと穏やかな生活ができただろう。それに、それ以外に強いからと呼び出されるような要素などどこにもない。きっと、何も知らず幸せに高校入学し、普通に学校生活を送っていただろう　と思わずにいられない。

「でも、今までにない強力な魔王を封印できたというだけでも、十分すごいことですけど」

「あれは……偶然に偶然が重なって、奇跡といってもいいことだったから。その奇跡がなかったら、きっと私は死んでたと思います。あまり当てにしないほうがいいですよ」

あるとき、ただ一人、味方もなく圧倒的な力を誇る魔王を前にして死を覚悟した。

奇跡的にもそれは免れたけど　と、窓から空を見上げると、ちようど満ちた月が見えた。

ここも地球と同じで夜には月がある。それが夜はわずかな明かりをもたらしてくれる。それは、二百年前も変わらない。

「なら、皆で力を合わせたほうが言いということですね」
「たぶん」

それに新しい魔王は好戦的だ。勇者が来るのを待ち構えているだろう。遅くなれば遅くなるほど、魔王に時間を与えることになる。魔王を撃つチャンスが少なくなるに違いない。

「少し……お聞きしてもよろしいですか？」
「なにを？」

「カリンさんの気持ちです」

月から視線を戻すと、真面目な表情をしたディリアさんが立っている。

私の気持ち？

いったい何をというんだろう。今は多少薄らいだものの、心の中の複雑な感情は消え去ることはない。

「カリンさんは最初、他の方と違ってすごく嫌そうでした。いえ、今なら分かります。知らない世界のために戦ってほしいなど言われて、簡単に頷けることはありません」

「うん。私、前のときもずっと嫌だって言ってた。そしたら」
「そしたら？」

「魔王の居城まで勇者を守るって言う名目で、裏では私が逃げ出さないようにって監視になった」

ここまで知ったデイリアさんには、もう話しておこうと思って、当時のことを語りだした。とはいえ、デイリアさんの目を正面から受け止める勇気もなく、月夜にまた視線を戻して。

召喚されて嫌がった私は、元の世界に戻してほしいなら、魔王と倒してくれと言われた。それでは取引といえない。一方的に連れてきて、願いをかなえたら還すなど、どこが交渉なのかと文句を言ったこともある。

どちらにしろ、私用の剣を仕上げるまでは城から出れないので、そんなやり取りを何度もした。信じられないから、その返還陣を見せろとも言った。

当時の神官、巫女たちは自分達の力がなければ還れまいと高を括り、子どもを宥めるような感じで何度か見せた。あれを使えば、すぐにもこの世界に戻るから　と。

だからといって、素直に信じられるわけもなく、私は見るたびにひたすら返還陣を記憶しながら、当時持っていた紙に返還陣を書き足して覚えた。

彼らに期待しても駄目なら、自力で還つてやろと思いつながら。

「私の考えはばれてはいなかったけど、彼らは還れなくてももう一つの可能性を危惧して、魔王のところに行くのに私の護衛と称して数人を監視に付けた　」

「そんな、ことが……」

当時も瘴気でみんなおかしくなっていたから　と苦笑する。

もう一つの可能性とは、還れなくても、魔王と戦うという恐怖から逃れ、この世界でひっそりと暮らすことだった。

自分ひとりなら、魔族の手から身を守ること可能だろう。もっと遠くの国へ逃げて、なるべく静かに暮らせば、怖い思いをするこ

とも、命を失う可能性もほとんどない。

でも彼らにすれば、魔王を倒せるような強いものと望んでできた存在。それをむざむざ野放しにする気はなかったのだ。

たとえ本当に魔王を倒すことができなくても、勇者がいる間は魔族の、魔王の意識は勇者に向くであろうから。

「魔王を倒せたら還すという言葉も、私を護衛するといった周りの人も信じられなかった。でも」

こんな勝手な世界なんか知らないと思いつつも、外に出れば見方も変わる。

国の中枢ではなく、末端にいる村人は本当に死の恐怖に怯えていた。目の前で必死に助けると縋る姿を見れば、それを見てみぬふりはできなかった。

「助けてほしいと願うのに、その裏では逃げださないよう見張っている。最初の頃はこの世界と人を身勝手だと、そして憎いと思った」

月夜を見ながら呟けば、ディリアさんが動揺して身じろぐのが雰囲気で分かった。同じような気持ちで召喚陣を使ったディリアさんは、罪悪感を感じてるだろう。

それに気づきながらも「でも」と、話を続けた。

「でも、その気持ちをずっと保ち続けられるわけじゃない。最初に見た以外のものを見れば、それ以外の感情だって芽生える。全体を見れば憎い。でも個人を見ればそうでもない。憎いと思っても見捨てられるほど冷酷にもなれない。はつきり割り切れるほど、人の心は簡単じゃないんです」

長く語ると、深いため息をついて、ディリアさんを見た。

ディリアさんなんともいえない表情で、どう答えていいのかしばらくの間迷っていた。

そして。

「そう……ですね。そして、そういった感情は一人で制御できないほど、人の心は複雑なものですね」

そう答えると、ディリアさんも夜空に浮かぶ月を見つめた。

しばらくすると、ディリアさんは眠りについた。規則的な寝息を聞きながら、完全に眠っていることを確認する。それから。

「こんばんは、闇の精霊さん」

窓から闇夜に向かって話しかけた。

“わかるの？”

闇の精霊はリートたちみたいにはつきりと見えないけど、それでも存在は感じる。声をかけると、案の定、自分たちの存在が分かるのかという問いが返ってきた。

「分かるよ。しっかり見ることはできないけどね。あなたたちの力を借りたいんだけど、いいかな？」

今の私は、風、土、火、そして少し前に水の精霊に力を借りるこ

とと名を付けることで繋がった。後は光と闇のみ。

前に初めて魔王の前に立ったときのことはいまだに鮮明に覚えている。あの力を前にして、私はまったく勝てる気がしなかった。

今回の魔王は前より弱いと聞くけど、魔王は魔王。今相手にしている魔族なんてものじゃないだろう。三回目の異界の壁越えで付けた力を知られたくないからと、出し惜しみをしているわけにはいかない。

闇の精霊が“いいよ”と答えるのと同時に。

「ありがとう。あなたたちのことを、“アーベント”って呼ぶね」

名前をつけた。

20 割り切れないもの（後書き）

話には出てこなかったけど、蒼井くん一人称のときに水の精霊とは約束してます。

名前は“クヴェル”

次は番外編で、あまり出ていなかった堤さんの話。

20・5 彼女（前書き）

今回は堤さん一人称になります。

20・5 彼女

堤恵理^{つみ えり}、高校一年生。

愛美とは中学からの友だち。ふわふわした感じで、私と違って女の子っぽくて好き。

大野とは中学は違っても知り合いだった。

蒼井は大野がよく話をしてるから、一緒に混じって話をした。

愛美が蒼井のことを気にしてるのに気づいたときから、一緒にいることが多くなった。学校では四人で仲良くしていたと思う。

相沢花梨。

彼女が出てきたことで、愛美の嫌味が増えた。

理由？ それは蒼井が何かと彼女のことを気にするから。

私は別に彼女のことは好きでも嫌いでもなかった。愛美がいなかったら、私も彼女のようになっていたかもしれないから。一人でいられることは、それだけ自分というものがしっかりしているからだと思う。

そんな見方をしているせいか、私は彼女のことだけは『相沢さん』と、さんを付けていた。個人的に話をしたことはないけど、たぶん、彼女のことをそれだけ認めていた。

そんな中、五人で異世界へと呼び出された。

異世界召喚　は、なんの冗談？　愛美が好んでみたライトのベルのファンタジーじゃないんだから、現実的に考えてありえないでしょ。

そう思う反面、変わった日常が面白くも感じた。

それに私たちには、元の世界にはない不思議な力があつて、それを使えることができる。しかも還れるという約束つき。楽しまなきゃソンでしょ、って展開だった。

でも、わくわくした気持ちも、彼女の現実的な一言一言で潰されていく。しっかりしていると思ったけど、ここまで来ると少しうんざりした。

それに私は面白がってやってみた力の練習をぜんぜんしない。剣の使い方も覚えようとしない。

つい、「少しは使えないと足手まとい」と嫌味を言ってしまったほどだ。

嫌だな、こういうじめじめしたのは嫌いなのに。

そう思ったのに、彼女の態度に対してその気持ちは抑えられず膨らむばかりだった。

それが顕著になったのは、蒼井にケン力を売ったときだ。夕食を終えて部屋に戻って、愛美と話をした。

「まったくム力つくよね。そう思わない？ 愛美」

「相沢さんのこと？」

「そうよ、相沢さん！ 自分が中途半端だからって、蒼井にケン力売ってばかり。愛美だってあの子のこと、嫌ってたよね。ム力つかなかった？」

このとき、私のほうが怒っていた。意外にも愛美のほうが冷静だった。でも愛美の態度に余計に苛々した。

ずっと嫌味を言ってきたのに、なんで今になって庇うようなことを言うわけ！？

理不尽な怒りは収まらず、次の日も蒼井が負かされるのを見て、さらに苛々した。

旅に出てからずっと移動してたけど、やっと一日のんびりする日ができた。今日は何も考えずにゴロゴロしよう。最近、ずっと苛々しっぱなしだったから。

苛々の原因は彼女だ。

言うことは立派でも、役に立たなければ、ああ口だけか……と思ったのに、彼女は言うだけの力を持っていた。

剣で戦えば、誰よりも魔族を多くしとめてるし、その上ディリアさんの浄化の手伝いまでしてる。ここまでくれば文句も言えない。それでも、みんなの中で彼女だけ浮いているということだけが、気分的にはザマアミロという感じで小気味良かったのに、いつの間にかに蒼井と仲良くなっていた。

遠くから見えていたからなにを話していたのか分からない。でも途中で蒼井が真っ赤になって彼女が珍しく笑って　それを見て、心の中がざわつくのを感じた。

この気持ちはなにから来るのか。

蒼井のことは友だちとして好きだ。異性だって友情は成り立つ。大野とだってそうだ。

じゃあ、彼女に？　でもなんに？　この世界に来て、一番活躍している。逆に私の力のほうが必要ない。道案内のレーレンさんがいる以上、私が役に立つのは、防御くらいだ。

だから？　妙な嫉妬を感じるのは　そこまで考えて、自分がなりたくないと思った人間になっていることに気づいた。

そう思った矢先、隣にいた愛美が何かを呟いた。

「なにか言った？」

「……ううんっ、別に」

あのやり取りを見て、きつと妬いたか落ち込んだか分からないけど、愛美は悔しそうな表情をしながら私から視線を逸らした。

ああ、そうだ。私は友だちの愛美を傷つける彼女が嫌いなんだと改めて思いなおす。醜い自分の気持ちに蓋をして。

次の日、まだ薄暗いのに目覚めてしまった。実は、トイレ行きた
い。

ここは日本のように下水完備じゃないから、そういったのは家の外にある。面倒くさいけど、寒くないし行かないと二度寝ができないからと静かに外に出た。

外に出ると、空は朝焼けで地平線沿いが赤紫色をしていた。上のほうはまだ暗い色をしている。たぶん四時くらい……かな。空を見上げて今の時間を推測してから、視線を下に移した。

同時に、今見たくない人物が見えてしまった。

……って、こんな時間になにやってるわけ？

隠れて観察しようとしたら、逆に「誰？」と問いかけられてしまった。仕方なく彼女のところに歩いていくと、向こうから「おはよう、早いね」と声をかけられる。その声は至って普通で警戒心もない。

「おはよう。あなたこそ早いね」

「ちよつと早く目が覚めたから。それに、朝焼けはきれいだから眺めていたところ」

「ふうん。なんでもできる人は本当に余裕だよね」

落ち着いた口調で答える彼女に、また嫌な気持ちを感じてしまい、気づくと嫌味を言っていた。

前の愛美はこんな感じだったのかな　　と思いながらも、出た言葉は取り消せない。開き直ると、今度は私の言葉にどう反応するのか気になった。

「きれいなものをきれい、って思えない？」
「なっ!？」

逆に問いかけられて、言葉に詰まった。

「堤さんの言う『余裕』ってのが、なにを指しているのか分からないけど……私は周りが見えなくなったら終わりだと思うから、こういう時を大事にしたいだけ」

確かにそのとおりだ。だから悔しくて何か言い返そうと思ってもできなかった。

だいたい余裕ある人はいいいね、と嫌味を言っで、それに対して自分はこうだと答えている。ってことは、彼女は自分のことを言われている自覚はあるってことだ。

そう考えると、余計苛々して。

「私、あなたのこと、前は嫌いと思わなかった。でも今は　大嫌いい」

嫉妬とかそういったのと無縁でいたかった。

幸い、私はそこそこ勉強も運動もできて、さばさばしていいと愛美にも言われていた。他の人ともそれなりに上手くやっていたと思う。

恋愛もしつかりしたことがなかったから、そういったのとも無縁だったし。だから今まで気楽だった。

なのに今は 彼女に対して、嫉妬にまみれていた。

20・5 彼女（後書き）

すみません。今回はあまりいい話ではありません。

歩み寄って仲良くなる中で、こんな存在もいていいかなと思ってます。

嫌い 好き があるなら 好き 嫌い があってもいいと思うってことで。

でも気持ちは流れるように変わるので、最後のほうはどうなっているかわかりませんが。

21 違い

昨日の夜、ディリアさんに昔の話をしたせいか、深い眠りにつくことはできなかった。

何度が夢を見ては起きては、日本と違うことに驚いて、次に前にここに来たときと間違えそうになって、横で寝ているディリアさんを見てやっと現実気づいた。まるで悪い夢でも見ているようだった。

前と違うのに……。

前は一人とってよかったけど、今は仲間と呼べる人がいる。本当に仲がいいとはいえないけど、少しずつ普通の話もできるようになってきた。それに、この世界の人もみんな協力的だ。

ただ、自分だけが前のことのせいで人を信じきれずにいて、周りとの和を乱している。分かっているながらもどこか信じられない自分に嫌気が差し、頭に手を当てながら深いため息をついた。

明るくなってきた空を見て、気分転換に外に行こうとした。ディリアさんを起こさないように静かに、寝巻き代わりの服のまま部屋から出た。

家の近くの岩に腰掛けて、だんだん白んでくる空をしばらくの間見ていると、途中で人の気配がした。誰かと問いかけると、出てきたのは堤さんだった。

そういえば堤さんとはあまり話をしてないな。篠原さんは途中で心配してくれて話したけど。あのときは篠原さんに悪いことしちゃったつけ　と考えながら、とりあえず朝の挨拶をする。

「おはよう、早いね」

「おはよう。あなたこそ早いね」

返事から、あまり好意的でない印象を受ける。そうなるように言

ったりしたりしたので仕方ないかと思いながら、朝焼けがきれいだと話した。

すると、堤さんから「余裕だね」と言われる。本当に余裕だったこんな風にしてないよ……と思いつつも、話すことじゃないので喉元まででかかった反論を飲み込んで、「きれいなものをきれい、って思えない？」と問いかけた。

そう思えなくなるのは、精神的にまいっているとか、何かの問題に囚われてほかのことまで見てられないとか　どちらにしろいいことじゃない。

だから怒られそうだけど聞いてみた。そしたら。

「私、あなたのこと、前は嫌いと思わなかった。でも今は　大嫌いい」

はつきりと言われて、それからふんつと鼻息荒く部屋に戻っていつてしまった。面と向かって言われたため、どう反応していいかわからなかった。ただ、家に戻っていく堤さんの背中を見るしかなかった。

「私、馬鹿だ……」

分かっているくせに、相手をあおるようなことをいう。

人を信じられない自分が情けなくて嫌で　そこまで考えてから悩むのをやめた。暗い思考を止めるために、また朝焼けの空に視線を戻した。

朝食の後、泊めてくれた家の人にお礼を言って村から出た。

結局、村を守っているクリスタルの正体は分からなかったけど、そのクリスタルのおかげで昨日はゆっくり休めたからよしとしよう。蒼井くんと話をするようになったせいかな、今日は五人で固まって歩いていた。レーレンが少し不思議そうな顔をしたけど。

そのまま和やかな雰囲気歩いていくと、ふと急に朝焼けの中、堤さんとのやり取りを思い出す。

……あれも悪いことしたよね。自分がそう仕向けたとはいえ、面と向かって言われるのはやっぱり嫌なものだ。またそんな気持ちにさせてしまったことに対しての罪悪感もある。一步城からでて他の人と接して見方が変わって あの時と同じ思いをする。まったく学習能力がなくて同じことを繰り返している。

ため息をつく、ヴァイスさんが「どうした？」と尋ねてくる。

その表情は前よりも明るい。

「いえ、ヴァイスさんがそんなにおしゃべりだと思わなかったから、ちよつと驚いただけです」

そうとつさに言い訳するほど、ヴァイスさんはようやく気軽に話ができる雰囲気になったのが嬉しいのか、「はは、悪かったな。俺はおしゃべりさ」と陽気に答えて今までのことを熱く語ってくる。

最後には「細いのにスゲエな」と頭をなでるというよりくしゃくしゃにされた。ヴァイスさん、大きくて力があるから、なでられるというより押しつぶされている感じだ。

それを見て蒼井くんと大野くんが笑って、レーレンは「それくらいにしたほうが…」とヴァイスさんにやりすぎだと主張してくれた。

「おつ悪い悪い。ついなあ、カリンは女の子だったっけ」

「……完全に忘れてますね」

「わ、忘れてはいない……ぞ?」

「ならなんで疑問系なんですか？」

「俺は強いやつは男でも女で認めるんだ。だからこれくらい大丈夫だと思っただ」

あの、その無理やりな理論はなんですか。ってか、強いと認めたら男と一緒に？ それはそれで嫌なんだけど……と、非難めいた目でみると、大野くんが横から口を出す。

「でも分かる気がするよ。相沢さん強いし、蒼井のヤツも昨日さんざんやられたみたいだし」

「でも特訓って言ったらそれなりにしないと特訓にならないし」

剣じゃなくて力の特訓だったから無理やり力を使うような攻め方をしなきゃならなくて、私のほうも大変だった。この世界の力はイメージによつていくらでも使い方があって、とにかく使ってみることが一番なんだと思う。

「そうだけど……俺も頼んだけど、俺のときはお手柔らかにお願いしたいな」

「私、そんなに酷かった？」

「……………怖かった」

蒼井くん視線を移して尋ねると、少し考えたあと、はつきりと返された。青ざめた蒼井くんの顔を見れば、それが嘘じゃないんだろうと思える。

「ごめん。やりすぎた」

素直に謝って、その後は時間のあるときにはみんなで剣と力の特訓に決まった。他人事のように眺めていたレーレンを、あんたも身

を守るくらいはできるようになれ　　といって無理やり巻き込んだ。
そんなやり取りをしながら歩いていると、風が通り過ぎて髪の毛を揺らす。

“きけん”

“あぶない”

「なにが？」

リートたちの声に思わず声に出してしまうが、話の流れから聞いてもおかしくないタイミングだったらしく、大野くんが何か話し始める。

けど、私はリートたちの声に耳を傾けた。

“どらこんが、くる”

“にげないと、あぶない”

リートたちの言葉に思わず叫んでしまう。

「ドラゴン？」

ドラゴンとは人よりはるかに強くてでかい生き物だ。瘴気を持たないということ、魔族とは別の種族として見られているけど、力だけで見れば魔族と変わらないどころか、魔族でも強いほうに入る。しかも硬い皮膚にあの大きさは的にしたくない相手。

「あの、なんかドラゴンがくる……みたい？」

情報源をはっきりさせられないので、ヴァイスさんとレーレンの様子を窺うように小声でぼそりと呟く。リートたちから十分逃げるだけの距離があることを教えてもらったから、五感では感じ取れない。

い距離にいたのでどうやって知ったのかと聞かれるとちょっと困るけど、このままドラゴンと対面したほうがもっと怖い。ドラゴンの怖さを知っているヴァイスさんとレーレンはすかさず本当かと尋ねた。

「う、うん。たぶん。リ、風が……」

なんて説明したらいいんだろう？ と迷っていると、ヴァイスさんが急いで馬車のほうへ向かう。そして、早く出て逃げるように指示していた。

「ほら、カリンたちも早く！」

馬車に乗ってる三人をおろしてから、細かく突っ込まれなくてよかったと安心していると、腕をとられて引つ張られた。

ドラゴンはおくわしたら最後、というほど厄介な存在。魔族のように瘴気がないから精神的におかしくなったりしないんだけど、倒すとなると白旗を掲げるしかない。大きい体に硬い皮膚は並みの剣ならすぐに折れてしまう。

ただ、数が少ないのが人にとって不幸中の幸いで、運悪く出くわさなければただの怖い話で済む。魔族との違いはそんなところだ。だからヴァイスさんも無理やり倒そうとは思っていない。急いで全員で岩陰に隠れるように縮こまった。しばらくするとその上空を低い音が響き、その後大きな影が通り過ぎた。

「こ、怖かった……」

レーレンがぼそりと呟く。

旅をしているレーレンが一番ドラゴンの怖さを知っているんだろう。それにヴァイスさんも頷いた。

ドラゴンが通り過ぎてしばらくしてから、やっと馬車のところまで戻ると、風圧のせいか馬車は半壊状態だった。そのため荷物を取り出して、次の町まで歩いて向かうことになった。

21・5 立ち位置（前書き）

大野くん視点の話。

21・5 立ち位置

いつか歩きになると思っていたけど、こんな形で歩きになるとは思わなかった。

女の子に重い荷物を持たせるなんてことはできないけど、もし魔物が現れたときのためにと荷物はみんな均等に持つことになった。歩くのに慣れていない堤と愛美ちゃん、ディリアさんは少し辛そう。同じ女の子でも、今まで歩いてきた相沢さんの足取りはしっかりしている。

あ、遅くなっただけど、俺は^{おおの}大野^{よういち}洋一。この世界に『勇者』として召喚された蒼井の友だち。

『勇者』と一緒に召喚された友だちという立場は微妙なもので、蒼井のようなプレッシャーはないものの、役に立たないと思ったらどう扱うになるか分からない。

だから、俺なりに頑張るしかないと思った。俺にとって都合いいことに、『勇者』以外に召喚されたのは他にもいて、女ともだちの堤と彼女を通して仲良くなった愛美ちゃん。そして、ずっと休学していたせい、みんなに馴染めないでいる相沢さん。

戦力として数えるのは蒼井の他には俺と相沢さん。堤と愛美ちゃんは後方支援みたいなもの。でも勇者の肩書きを持つ蒼井と、それを凌ぐような強さ（実際今は彼女のほうが強い？）を持つ相沢さんの二人のために、俺の存在は微妙なところだった。

と、歩きながら一応なんとなく自分の立ち位置のようなものを考えてしまった。

それもこれも、突然現れたドラゴンのせいで全員歩きになったせい。慣れてるのはともかく、そうでない人たちが疲れて俯き加減で

ふらつきながら歩いているから。明るい会話をしようにも、ずずんと暗く沈んだ雰囲気話しかける勇気がない。

そついや、俺は蒼井よりそついうのが苦手だったもんな。あいつは明るい性格で物怖じしないせいかな、一緒にいるといろんなところであいつの知り合いに出くわす。

俺はといえば、それに便乗して気の合う人と適度に話しをするようになって。そうでない人は俺一人の場合、向こうも気づかないからそのままやり過ごして　　こういうのを事なかれ主義というんだろうか。

そつといえば、こつちに着てからも浮いている（いや、ケン力を売るような真似をしているからか？）相沢さんにも、元の世界にいるときは隣の席だし、とよく話しかけていたっけ。

俺からすれば、人を拒絶するような雰囲気を持った相沢さんが苦手だった。蒼井が話しかけると、なにを言っているのか困って怪我をしていたということを理由に、何かあると「大丈夫？」とだけ聞いていた。それが一番無難だったから。

こつちにきてもそれは変わらず、俺は適度に離れたところで傍観者になることにした。

『勇者』と言われてやる気になっている蒼井の気持ちもなんとなく分かる。物語の主人公になったようで、浮かれたくなる。

でも残念なことに、俺は『勇者』ではなく『その他』だった。

それに、のほほんと生活してきた俺たちがいきなり人より強いという魔族　　ひいては魔王を倒すなどというのは無謀だと思う気持ちから、相沢さんの言い分にも納得できる。

けど、自分達でも手に余るモノを押し付けようとしているこの世界の人たちに、俺ははつきりと嫌だと言えなかった。そのためどちらに転んでもいいように、適度に距離を保つことに決めた。

ズルイ、といえばそれまでだけど、俺だってこんなところで魔族なんて変なものにやられました、なんてバッドエンドは迎えたくない

い。

あ、バッドエンドで思い出したが、あれだけ危険だとか口にする相沢さんが、どうして俺たちから離れないのか不思議だった。

それに、痛いのが嫌だの言っていた割りに、敵とみなしたモノを斬る剣を持つて一緒に戦っているのかも。

まあ、それについては、蒼井の話（特訓のあと）を聞いて、どういった理由か知らないけど、俺たちより一步も二歩も『力』について先を行っているせいかな、と推測した。

今日の明け方の堤とのやり取りなんかも、それを感じさせる一面がある。（これは半分キレた堤に無理やり聞かされた）

蒼井や堤　みんなを怒らせて、相沢さんはいったいなにをしたのか。近くを歩いている彼女を盗み見ても、その表情からは何も分からなかった。

何度か休憩を入れて、あと少しすれば村につくという頃に、とうとう魔族の襲撃にあう。

できればなるべく会いたくないんだけど……とぼやいても始まらない。

ソレは、狼のような姿をしているものの、足が六本あり、犬よりも口が裂けていて、あれにガブリとやられたら致命傷になるだろうな、というのがすぐに想像がつく。

ソレが唸りながら数匹飛びつくように向かってきた。

ヴァイスさんの指示の下、ディリアさん、レーレンさん、堤、愛美ちゃんを後ろに下がらせる。ディリアさんは一定の位置にまともと結界のような光の壁をつくる。レーレンさんと堤がそれをサポートするようにしていた。愛美ちゃんはこのあとに出番だから、彼女が傷つかないように、壁の一番奥へとやってみんなで守っている。

蒼井と相沢さん、俺は剣を抜いて狼のような魔族に対抗する。

とはいえ、獣と違っていいソレは、動きが早い。剣を向けてもそれよりも早く動いてするりとかわす。

そんな中、蒼井がすごい速さで動いて魔族を一匹倒した。

なんで？ どうやって？

そう思った。そのあと、昨日の相沢さんの『特訓』を思い出す。

でもたった一日なのに！？ 城にいたときには対して俺と変わらなかったのに。相沢さんの『特訓』って、なにやるんだよ？ そんなにすぐに強くなれるのか？

疑問系ばかりが頭に浮かぶ。そう思っていると、横にいた魔族に気づくのが遅れた。

やられる、と思った瞬間、軽く突き飛ばされる。そして、魔族と俺の間に相沢さんが入り、その鋭い牙を剣で何とか受け止めていた。さすが……と思ったけど、とつさのことだったらしい。受け止めた場所は刀身ではなく、剣を持っている手のところだった。見れば、相沢さんの顔が痛みに歪んでいた。

慌てて体勢を整えて相沢さんに噛み付いている魔族に上から剣を振る。一刀両断、とまでいかなくても、動かなかったソレを傷つけることには成功する。耳を塞ぎたくなるようなわめき声に耐えながら、もう一度剣を魔族に向けた。

二匹くらい魔族は逃げたけど、それ以外はなんとかやつつけた。みんなも疲れているし、蒼井とヴァイスさんと俺は軽い怪我、相沢さんは深いのかどうか分からないけど、手の甲を噛み付かれない

たからそれなりの怪我をしているはず　　ということで、逃げていく魔族を深追いしなかった。

愛美ちゃんが蒼井と俺の怪我を治しはじめたとき、ディリアさんと相沢さんがその場の浄化を始めていた。

浄化の様子はクリスタルを胸の前で両手で持って、祈るような、また何かを占うようみも見える。浄化の力に合わせて周囲が淡く光るのが幻想的だった。

その様子に見入っていると、愛美ちゃんが治療を終えたのか「はい、終わり」と告げた。

「あ、愛美ちゃん、相沢さんなんだけど……」

「分かってる。怪我……してるんでしょ？」

「あ、うん」

相沢さんと蒼井との間も良くなり始めているし、とにかく仲違いしているような状態じゃない。それは愛美ちゃんも分かっているようだった。

「相沢さん」

浄化が終わるのを待って相沢さんに声をかける。

「……なに？」

「手、怪我してるよね？」

明らかに動揺した表情をしたけど、それに気づかないふりをして怪我をした手を取った。

「愛美ちゃん」

「うん。相沢さん、手を出して」

「……」

返事をしない相沢さんに、勝手に愛美ちゃんの前に怪我をした手を出すと石を持った手を上にかざして治療を始める。

相沢さんの手が逃げないように、俺は治療が終わるまで手首を押さえていた。

そう、明らかに、相沢さんは『逃げ』ようとしていた。

でもそこまでする原因が分からなくて、やっぱり気づかないふりをした。

「あ、ありがとう……」

治療を終えたあと、ちいさな声でそれだけ言う慌てて離れる。

午前中の話をしながらの和やかな雰囲気とも、棘のような言葉による拒絶とも違う。こういう態度をとればいいのか分からない、といったほうがいいのか。

「どうしたのかな？」

「さあ？ まあ、今までこっちも大人気ない態度とってきたから、怪我の治療をしてもらえと思うなかったから……とか？」

愛美ちゃんも相沢さんの態度がおかしく思ったのか、首を傾げながら呟いた。それに少し違うと思うけど、思いつくまま答える。
すると。

「そりゃ、確かにしなかったけど……気にはしてたんだよ。でも声かけにくくて。それに相沢さんも怪我しても痛いとも言わないし……って、言い訳だね。思っても動かなかったら意味ないのに」
「うん、まあ……それは俺も同じだから、ホント、言い訳になっちゃうけど」

愛美ちゃんは周りから強く言われたら反論できないような性格だし、俺は事なかれ主義だし。そんなのが二人揃っていても、なかなか踏み切れないんだ。

今回は、だいぶ周囲の空気が軟化したせいで動くことができたけど。でも、逆にいえば、雰囲気が変わらなければ動けなかったわけ

で
「情けないよなあ」

ぼやきながら空を見上げた。

21・5 立ち位置（後書き）

今まで主人公視点は番外編として X・5 で出しましたが、これからは主人公に代わって本編を進めることもあるので、普通に力ウントしていきます。

22 水晶の幻影（前書き）

ここからちょっと暗めな話になります。

22 水晶の幻影

歩きなれていない人たちと歩くと、どうしても歩く速度がゆっくりになっていく気がする。

かといって慣れない歩きとドラゴンの登場でみんな疲れきっていて、他愛無い会話などする気力もないようだった。

そのためひたすら黙々と歩く。

沈黙の中、ただ歩くという行為は、鬱々とした気持ちになってきて、ここに来てからの暴言に対しての罪悪感がぐるぐると頭の中を回り始める。

それは考えれば考えるほど、どんどん暗い思考になっていく。

確かに言い過ぎていることも認める。でも、必要なこともあったはず。知らない世界。知らない生活。知らない力。未知なるものに対して警戒心を持つのは当然だ。だから、みんなに対する忠告も至極当然。

……違う。

自分が知っているから忠告を、なんて、他の人を下に見ている証拠だ。

蒼井くんはじめ、みんなでなんとか乗り切ろうとしているのに、水を差すような発言をして、場合には実行して。そうして注意を促すふりをしながら、みんなより上にいるのだと誇示している。

頭の片隅でそれを理解しながら、それでもその態度を崩さない。

そうしなければ、私は

考え始めたら止まらなくて、歩いている間あれこれ考えてしまい、精神的に疲れてしまった。

駄目だ、考えては駄目。どんな目で見られようが、嫌われようがそれでいい。そう思ったのは私自身だ。

元の世界に戻ってから、こんなことに巻き込まれたわけじゃない

と。怪我をして遅れて入った学校に友だちに馴染めない　そんな私でなければいけない。ここであつたことをこれ以上、話すわけにはいかない。知られてはいけない、と。

深呼吸してもう一度頭にそれを叩き込んだ。

どれだけ歩いたのか分からないけど、とりあえず村に着いた。みんな疲れていて、早々に休めるところを探す。体力のあるヴァイスさんが探しにいつて、それからディリアさんが話をつける。泊る場所はや々に決まった。

ふ、と気づくと、この村からは瘴気が感じられず、澄んだ空気だということに気づく。

……………まさか……………ね。あるわけない。

「カリンさん」

頭をよぎった可能性と同時にディリアさんに声をかけられてびっくりした。

「は、はい」

「あの、例の……………クリスタルがまたあるそうなんです」

「……………やっぱり」

しかも話によれば前と同じくらい大きさだという。

確かに前にお守り代わりにおいてきた覚えはある。でも、あくまで『お守り』程度のものだ。使うには『力』のある人から常に力を送り続けてもらうしかない。

加えて一センチ程度の玉だった水晶を占い師が使うような大きさに成長させるなんて普通じゃない。

やっぱり私がおいてきたものじゃなくて、この世界の七不思議のひとつだったりして……。

なんとなく気になって、ディリアさんにもう一度見てみたいんだけど、と言ってみると、荷物を置いてからゆっくり見に行きましようと答えられた。

ディリアさんもあの水晶が気になるらしい。もう一度じっくり見てみたいと言われた。

部屋割りは前と同じくディリアさんと一緒。もともと篠原さんと堤さんは仲がいいから、二人部屋だと自然とこの組み合わせになる。野宿のときには馬車で雑魚寝状態だけど。

馬車が駄目になったせいで増えた荷物を部屋へと入れて適当に置くと、ディリアさんと一緒に水晶を祀ってある部屋へと向かう。

そう、あの水晶はその威力から大事に祀られているのだ。そのため普段は人が触れられないよう大事に保管されている。持ち去られないために、外から来る人には口外しないという暗黙の了解があるらしい。

どんな力が分らないけど、魔族を寄せ付けず浄化してくれる水晶は彼らにとって貴重だろう。そんな村を守る水晶を見ることができるのは、ディリアさんの巫女という立場のおかげだった。

普通より厚い木でできている扉を村の人が開けると、水晶は中央に厚手の布の上に置かれていた。

本当に、水晶のためだけの部屋。でも、中はこまめに掃除されているのか、埃っぽさはなかった。

「これが……」

ディリアさんが近づいて、それから案内してくれた村の人に触れ

てもいいか尋ねる。

村人は少し考えたものの、「どうぞ」と答えた。うーん、地位があると便利だねえ、などとそのやり取りを見ていたけど、ディリアさんが触ってあちこちから見た後、呼ばれた。

「はい？」

「カリンさんはこれを見てどう思いますか？」

と、水晶を目の前に出された。

水晶は傷や内包物がほとんどなく、澄んだ気を発している。これなら十分魔族避けになるだろうと思われるほどの、透明感のある『力』。

やっぱりおかしい。

あのとき置いてきたのは、お守りで売っているブレスレットをばらしたものだ。それも気休め程度にしか力をこめていない。こんなに長く続くはずもないし、大きくなることもない。

「カリンさん、どうですか？」

「どう、と言われても……やっぱり分かりませんよ。……って、あれ？　ちよつといいですか？」

ディリアさんが持っている水晶を眺めていると、きれいな曲線を描いているはずなのに、一部だけ小さくへこんだところを見つける。そのへこみが気になって、ディリアさんから水晶を受け取った。水晶の重みを感じた途端、ぐらりと視界が揺れる。

なに？

思わず落としそうになる水晶に力をこめる。すると、目の前が真っ暗になった。それから浮かんでくる光景。

ブレスレットを見て買ったところ。そして身につけてからの日常生活。

ああ、これは私が置いていったものの一つだったんだ。
目の前の光景は、水晶に残った記憶なんだろう。
それから次から次へと目の前の光景は変わっていく。

変わらない日常生活。

なのに、突然、呼ばれて、そして、剣を持たされ魔族と戦うことになった。

最初の頃は自分の意思で戦うというより、剣に主導権を握られていて、目の前にいて自分に敵意を持っているものは、すべて剣に敵とみなされ倒された。

そうだ。私は、ただ剣を持っているだけだった。剣に組み込まれたプログラムのようなものに逆らえず、ただ目の前の敵を倒し続けて

そして、目の前に赤い血が飛び散った。

「いやあああつー！」

目の前の光景に思わず悲鳴を上げる。

デイリアさんの声が聞こえた気がしたけど、自分の悲鳴に消されてしまつてよく分からない。

たぶん、水晶を抱えながら膝を突いたんだと思う。足に軽く衝撃を感じる。

それよりも、もう何も見たくない、と目を瞑った。

もう嫌だ、もう見たくない。変えられない過去などこれ以上見たくない。

これ以上、思い出させないで　　！

目を瞑って暗闇の中、そう願った。

その願いが届いたのか分からない。けど、目の前の光景は消えて、何も無い静かな状態になる。

あれ、デリアさんは？　さすがにいきなり叫び声を聞いて何もしないわけがないし、外には村の人だっている。

それなのにやけに静かで、それが気になって少しずつ目を開ける。すると、真っ暗だった周囲はある程度明るくなっていて、その中で夜を連想させる紫黒の双眸が私を見下ろしていた。

「あ……」

待って　　そう言いかけた途端、前から突風が吹いて腕でとつさに顔を隠して目を守る。

その風が収まると、今度は眩しいほどの光が溢れた。目の前には薄い青緑の髪を揺らしながら優しげに見つめる美女がいた。

「り、リート……？」

本物、の『リート』だ。

風の精霊王　　リート。前のときに、最初に会った精霊王。

風の精霊たちに『リート』と名づけたのは、彼女の名前だったから。そして、彼女とそっくりだったから。

「でも、どうして……」

ここには精霊王などがいなくて、みんな同じだと『リート』たちから聞いたのに。

私の疑問に答えることなく、風の精霊王リートはわずかに笑みを浮かべながら、その形を崩していく。彼女から離れたものはちいさな光になって、あちこちへと飛んでいった。

ああ、そうか。なぜこの世界に『精霊王』がないのか、やっと分かった。

それは、二百年前に魔族の瘴気で傷ついたから。

人もそうだったように、精霊たちもその数を減らした。特に、風、土、水が。だから、その数を補うために、精霊王たちは消えたのだ。王という圧倒的な力を捨てて、精霊を生み出す源になるために。

「好意的だったのは、なんとなくでも覚えていてくれたせいなのか……？」

自由気ままな風の精霊王は、異世界から呼ばれた私に興味を持って、彼女のほうから近づいてきた。私も人でなく、ただの好奇心で来る彼女には言葉の裏を探るような必要もなく、普通に会話ができた。

懐かしい存在を目にして、そしてどうして同じ世界なら『精霊王』と呼べるべきものがいなかったのか、やっと分かった。

そして、紛れもなく、ここは前にもきた世界なのだと改めて思い知る。それがいいのか悪いのか分らない。知っているから先が分かっていることもあり、知っているから嫌なことも突きつけられる。

「どちらにしろ、魔王を倒さないと戻れないんだろうね」

それでも、前の魔王より力はないのは少しばかりの幸運なのか。それとも、好戦的なために近づくまで厄介になるか。

でもそれをするのは……

「私じゃない」

召喚陣の真ん中にいたのは蒼井くんだった。今回必要なのは、きつと蒼井くんのほう。

「とりあえず……サポートに回ればいいのかな？」

魔王と対峙するのが自分じゃないと分かって、少しばかりほっとした。

僅かに気が緩んだ瞬間、雪崩のように押し寄せてきた光景に意識が押しつぶされて、今度こそ暗闇に包まれた。

22 水晶の幻影（後書き）

1 / 18 加筆修正。

23 感情と責任と（前書き）

今回はデリラア一人称で進みます。

23 感情と責任と

「デイリア」

「誰か！ 誰かいませんか！？」

倒れたカリンさんを起こしながら、外にいるであろう人たちに声をかけました。思ったとおり、すぐ外に人がいて、どうしたのかと尋ねてきます。

「連れが……突然倒れたのです」

突然というのは違うけれど、と思うものの、説明できないためそれは省きました。

彼らは倒れたカリンさんより、クリスタルのほうが心配だったようで、「それよりもクリスタルは……？」と心配そうな顔で尋ねてきます。少しムツとしたものの、少し前の自分もこのようだったのか、と思い知らされたようでした。

とりあえず、心のもやもやしているものはおいておいて、気づいてカリンさんの体を仰向けにさせると、クリスタルを抱えたまま涙を流して気を失っているカリンさんが目に入りました。

「クリスタルは！？」

カリンさんが抱えているクリスタルに傷がないか確認しようとする人たちにのけられて、倒れそうになったので手について体を支えました。

人よりも村を守る大事なクリスタルを それは分かります。それにカリンさんの過去を知っても、まだ魔王討伐の一員として使お

うとしている私に、それを言う権利もないことも。
それでも……

「クリスタルはカリンさんが抱えていたから大丈夫です。それよりも、彼女を部屋まで運んでください」

倒れたままのカリンさんを放っておくことはできません。彼らにそつと運ぶように指示して、なんとか借りた部屋の寝台へと寝かせました。

そつと上掛けをかけようとすると、いまだにカリンさんの目から涙が伝わってくるのが見えました。

「カリンさん……」

「……る……めん……りー……で……」

ちいさな泣きは掠れていてすべてが聞こえたわけではありませんでした。けれど、誰かの名前だということは分かりました。

昔の……仲間、でしょうか？

でも、カリンさんが言うには、一緒に旅をしていた人たちは見張りだといっていたはずです。なのに、なぜこのようなときに思い出すのでしょうか？

考えてみれば、私はカリンさんの本心をあまり知らないということに気づきました。

前に召喚された勇者であり、いやいやながら魔族を倒していたのは聞いています。そのときに、多少なりとも彼女の気持ちも聞きました。

けれど、それだけではないように見えてきました。
今思うと、あのときでさえ彼女は一段高い場所から　というより、他人事のように話をしていました。あれが嘘とは言い切れないけれど、でも、あのときの気持ちがカリンさんのすべてじゃない、

と思えました。

今になって、なぜそう思ったのかは分かりませんが……

思案していると、戸がたたかれる音がしました。

私は静かに椅子から立ち上がり、カリンさんから離れて戸をゆっくりと開けると、目の前には、ハヤト様はじめ、ヴァイス隊長にレーンさんまでいました。

「相沢が倒れたって聞いたけど……大丈夫なのか？」

ハヤト様が心配そうに尋ねます。

それに対して、私は今は眠っているだけ伝えました。泣いているということを話すと、どうしてか尋ねられると思ったからです。

でも、カリンさんはどちらかというと嫌われようとしていたので、揃って様子を見に来たのが不思議でした。

「どうしてこちらへ？」

気になって尋ねると、村の人から聞いたといいます。

でも、皆揃ってというのが不思議なのです。ヴァイス隊長は性格から分かります。レーンさんはカリンさんと親しげに話をしていたので、仲がいいのでしょう。この人も分かります。

分からないのは、勇者として召喚した方々のことです。

「そりゃ、倒れたって聞けば、心配するじゃないか」と、ハヤト様。

「そうだね、それでなくても相沢さんは前に大怪我してるみたいだし」

と、言ったのはヨーイチさんでした。

「怪我ならわたし、治せるし」

小さな声でそういったのは、マナミさんでした。

「私は別に……みんな来るから来ただけ」

そっけなくぼやいたのは、エリさん。

そういえば、この人はあからさまにカリンさんへの感情を出して
いました。

まあ、エリさんのほうが普通の反応かもしれません。敵意を向け
てくる人に対して、大丈夫だからと手を伸ばしてくれる人のほうが
少ないのですから。

「そうですか。とりあえず、今は眠って」

「どうしたの？」

私の言葉を遮るように後ろからカリンさんの声が聞こえました。
顔色はまだ悪いものの、意識はしっかりしているようです。

皆が心配して見に来てくれたことを伝えと、カリンさんは一言
だけ「そう」と答えました。

ふとした違和感を感じて、何か言おうとしたところ、カリンさん
のほうが先に。

「悪いけど、一人にしてくれる？ まだちょっとめまいが残ってる
みたい」

抑揚のない声に、いつものカリンさんに戻っていることに気づき
ました。

こうなると、カリンさんのほうから何か話してくれることはあり

ません。「分かりました」と答えて、ハヤト様たちを促して部屋の扉を閉めました。

その様子を見ていたエリさんから、「なにあの態度」という文句が出ます。それを宥めつつ、カリンさんには聞こえない場所まで移動しました。

「で、なにがどうしたんだ？」

「倒れたって聞いたけど、やっぱり過労？ 魔族退治と浄化の両方やっているからきつかったのかな？」

と、ハヤト様とヨーイチさんが心配して尋ねます。

カリンさんが前の勇者だったということは、本人も隠したがっていましたし、ハヤト様をはじめ、他の方からやる気がなくなってしまうと困ります。

前回勇者だったカリンさんがやればいいだろう、という流れになっってしまったのは私たちが困るのです。召喚陣を使って呼び出された人は、他の人より強いのです。その人たちが戦線離脱というのは、私たちにとって痛手。ここまで考えて、一方でカリンさんを気遣いながら、一方で都合よく利用しているのだと改めて気付かされます。

分かつては、いるのです。

ですが、皆と接触していると、この国の、この世界のためという気持ちの薄らぎ、個人を心配してしまう。でも、その心配も結局は魔王を討つために必要な人材だから、という理由がつきます。

そんな矛盾を、カリンさんは知っているのかもれない。

だから、彼女は自分の本心を明かさないのでしょう。それでなくとも、彼女は前回のときの同行者たちは“見張り”だったと言って

いました。そこから、私たちを信用していないのは明らかなのに。彼ら個人に対する気持ちと、この世界　自分たちの命とを常に天秤にかけて、釣り合いの取れるようにどっちつかずの状態にいる私を、信用してほしいと思うのが無理なのでしょう。

ここまでくると、自分の傲慢さや愚かさを受けとめるしかありませんでした。

「デイリアさん、デイリアさんまで……いったいどうしたんですか？」

マナミさんの高い声で現実に戻り、「すみませんでした」と答え

た。

「本当にどうしたんですか？」

ヨーイチさんがもう一度尋ねます。

とりあえず、あった事実だけを話しました。

「それが、村全体を浄化してくれるようなクリスタルがあったので、それをみさせてもらったのです。そのとき、浄化の力の強いカリンさんにも一緒に見てもらって……そうしたら、突然、カリンさんが倒れてしまったのです」

「どうしてですか？　浄化って、そんな誰かを倒したりするような力じゃないですよね？」

「分かりません。本当に、分からないのです」

浄化の力は人に作用しません。瘴気に蝕まれている場合は、それが消え正常な状態に戻ります。そのとき、長い間瘴気に当たっていた場合は疲労で倒れる人がいます。でも、カリンさんは瘴気に蝕まれてはいませんでした。

「やっぱり疲れが溜まっていたんじゃないか？」

「そうだなあ、カリンは戦闘と浄化の両方をしていたし」

と、ヨーイチさんが心配そうに言うのに、ヴァイス隊長が付け加えるように言います。

確かにそれに対しては申し訳ないと思うのです。戦って疲れているところに、さらに浄化の力まで使わせるのは、体に負担をかけるでしょう。

ですが、浄化できるのはこの中ではカリンさんと私だけです。マナミさんも少しはできますが、魔族を退治した後の強い瘴気を浄化できるまでの力はありません。

「とりあえず……ここで二、三日休ませてもらいましょう」

「そうだな」

「ですね」

気休めにしかりませんが、休息は必要です。それに、ここには村全体を浄化できるクリスタルがあるため、魔族の襲撃もないでしょう。

「皆さんも、少し休んでください。馬車もなくなってしまったので、徒歩による移動になるか、もしくは馬車を調達する必要がありますから」

と、ここで、いったん言葉を切った。

「ヴァイス隊長」

「はい？」

「あなたなら、ここから城まで一人で戻れますか？」

「え、まあ、一応。ここまででは道も浄化されてますからね」
「なら……」

カリンさんが呟いた言葉は、誰かの名前のはずです。

誰か それは、前回の魔王討伐のときにいた、誰かではないでしょうか？ なら、その人たちには多少なりとも心を許していたはずです。そこから、何か分かるかもしれない。

「戻ったら、前回の魔王討伐に加わった人たちのことを調べてください」

魔王討伐に加わるのは、腕に自信がある者にとっては名誉なこと。そして、その名は後世まで記録されます。

「いきなりなにを……」

「いえ、カリンさんが、もしかしたらクリスタルを通して何かを“視た”のかもしれないのです」

そう、カリンさんはきつと、心に触れる何かを視て、そしていつもどおりでいらなかった。でも、気がついて意識がはつきりしてきたら、それを取り繕うことをはじめた と、とっていいでしょう。

なら、あのとき呟いた“誰か”は、彼女にとって、それなりに大事な人たちでしょう。

「名前は……よく聞き取れなかったのですが、語尾に“ヨル”がつく者、そして、“リート”、“エルデ”、……“クヴェ”か“クヴェー”という名の者を」

今のままの私たちではあまりにも力が足りません。

でも、経験のあるカリンさんの協力が得られれば、かなり変わるでしょう。なにより、このギクシャクした関係が少しは変わるかもしれない。

その手がかりが、彼女の口から出た者たちのような気がするのです。

「お願いします、ヴァイス隊長。あと、皆さんはこのことはカリンさんには内密に」

24 思い出した約束

一人になりたかった。

水晶が見せた映像が頭の中に押し寄せてきて、それを整理するた
めにも、心を落ち着かせるためにも一人になりたかった。

心配して様子を見にきてくれたみんなを追い出してから、仰向け
になって天井を仰いだ。

「今になって……」

嫌というほど、この世界が前に呼び出された世界だと、認識せざ
るを得なかった。

どうして私だったんだろう？ 靈感があっただけど、それだけだ。
格闘技を身につけていたわけじゃない。どこかの軍隊なんかで生き
る術を叩き込まれたわけじゃない。

「まあ、それを言うなら、蒼井くんだってそうなんだけど……」

剣道を習っていたけど、そこで一番という強さじゃなかったはず。
大会に出るくらいだから、それなりの腕はあるけど、優勝したとは
聞いていない。

何をもって『強さ』の基準にするのか分からない。

『力』が強さの基準だというのなら、それは『意思』なんだろう
か？

そんなことはない。自分で言うのもなんだけど、私の気持ちは揺
らいばかりだ。人には見えないものを怖がって、それを見て怖が
っている自分を、他人に見られるのが嫌で なるべく親しい人は
作らなかった。

私に、“友人”と呼べる人はいない。それでいい、と思っていた。

この世界から戻って後は、それはさらに強くなった。
今もそれは変わって

「あーっもう、違うってば！ 強さの基準を考えていたのに……なんで自己嫌悪になってるかなあ？」

あまりの馬鹿らしさに、顔の上で両腕を交差させて、顔を隠すようにした。誰もいないから、そんな必要などどこにもないのは分かっていたけど。

はー、とため息をついて、また考え始める。

要するに、この世界の『力』について分かっているけど、その『力』が強ければ魔族を倒すことができること。また、他の世界から召喚された者は世界と世界の狭間を渡ってくるために、無意識にその『力』が強くなること。

前回とあわせて、私が知っているのはこのくらいか。

ああ、あと、その『力』には属性などないけど、この世界では属性に当てはめて、無意識に『力』の幅を狭めているこ。

なんにしろ、蒼井くんはじめ私たちは魔王を倒すということ以外に道がないこと。

「馬鹿馬鹿しい」

他の世界が繁栄しようと滅亡しようと、果ては魔王が支配したとしても、私たちには関係ない。

けど、還るためには魔王を倒さなければならない。

ただひとつ幸運といえるのは、還る方法がちゃんとあること。これは一度戻った私が実証済みだ。返還陣さえあれば戻ることができる。

その返還陣を使うのが問題だったけど。

残念なことに、返還陣の詳細まで覚えていない。あれを記した手

帳があれば別だったけど、戻って怪我をしたときに駄目になった。
ディリアさんに打ち明けたときは、それを知られたくなくて作れる
と言ったけど、実は詳細な部分はあやふやだった。

あとはこの国の返還陣。でも、あれを使うには、魔王を倒して戻
らなければ

「あつ！」

ああ、私としたことが失念してた。

あそこに行けば、自分が作った返還陣があることに。
完全に形を保っているかは不明だけど、新たに作るのも手間だし、
このまま皆というのなら、必然と魔王の居城まで行く。

まあ、場所が場所だけに、魔王を倒さなければ返還陣は使えない
だろうけど、一人で行くより皆と一緒にいったほうが返還陣までた
どり着ける確率が高い。

「よしっ！」

思い切り起きて掛け声を上げた。弱気になってきた自分の喝を入
れるために。

この世界の人の思惑にのるのは癪だけど。でも、自分のためだと
思えばいい。最終的に還るのなら、後のことなど

ああ、でも……こんな身勝手な自分を、案じてくれる存在が、こ
の世界にはいたんだっけ……

ふ、と昔に思いを馳せると、少し懐かしい気持ちと寂しさを感じ
て胸が痛んだ。

リート、エルデ、クヴェル……人ではないものたちだったけれど
……でも、私にとって大事な存在だった。

そして

「ごめんなさい。あなたとの約束を忘れてた……」

守りたいと言ったあなたの気持ちを、私はすっかり忘れていた。
その気持ちのために、あなたはすべてを投げ出したのに。

それなのに、私は自分のことばかり考えている。ここであつたことは“夢”で終わらせることなんてできないのに。
やっぱり皆と魔王の居城に向かおう。そして

「約束は……まもらなくちゃ、ね？ ヨル」

窓から、すでに暗くなつた空を見つめて呟いた。

25 気持ち

夕食の時間になって呼ばれていくと、皆に心配された。「大丈夫か？」と尋ねてくるみんなに、なんとか「もう大丈夫」と答えた。心配の度合いは違うけど、心配されるというのが信じられなかった。心配されるほど仲がよくないのは自分でも分かっている。

でも考えてみれば、みんなはここに来るまで普通に高校生をしてたんだ。本当だったら、学校に通って友だちと話して、その後は家に帰ってテレビを見たりゲームをしたり……そんな生活。

その中には、人間でなくても生き物を“殺す”というようなことはほとんどないだろうし、また、殺されるという心配もない。

そんな人たちだから、私が皆に合わせなくても嫌味を言っても、それでもこうして歩み寄ろうとしてくれるんだろう。

一番、大人気ないのは自分だ。この世界を知っている、『力』の使い方を知っているという驕り。そのくせ、二度も巻き込まれたという自己憐憫。

なんて考えていると、篠原さんが「本当に大丈夫？」と聞いてくる。

どうもぐるぐる考えていたのを、調子が悪くて返事できなかったと見られたようだった。

「あ、ありがとう。大丈夫、心配かけてごめんなさい」

「そう、よかった」

するりとでた言葉に、篠原さんは安心したのか、緊張が解けて笑みを浮かべた。つられて蒼井くん、大野くんも表情が柔らかくなり、堤さんは少し呆れた顔で肩を竦めた。

みんなの表情になんともいえない気持ちになって横を向くと、デイリアさんと目が合った。

そして、そこにヴァイスさんとレーレンがいないことに気づく。

「あれ、ヴァイスさんとレーレンは？」

「あ、それは……」

ちよつと答えにくそうなディリアさん。

私が倒れている間に何かあったんだろうか？ それとなく聞いてみようかと思つたとき。

「レーレンさんはこの村で必要なものをそろえてもらつてゐるって。あと、ヴァイスさんは調べ物でちよつと城まで戻るってさ」

答えたのは蒼井くんだった。

「調べ物？」

「ああ、ディリアさんに頼まれて」

「なにを？」

「さあ？ 俺には分かんね。でも、今戻るってことは大事なことになるじゃないのか。だからディリアさんも言いにくそうだったみたいだし」

なあ、と蒼井くんがディリアさんのほうを向けば、ディリアさんはためらいがちに頷いた。

「俺たちって、ここの世界のことほとんど知らないだろ。だから俺たちに話しても仕方ないって判断したんじゃないのか」

「そ、だね」

そういうことなら仕方ないか。

それに、すべてを知ろうとしても無理があるし。なにより、あの水晶のほうに気になるんだよね。できればもう一回見たいんだけど

……

「じゃあ、ヴァイスさんが戻るまでどうするの？」

先に進むのか、それとも待つのか。

それによつて、あの水晶をもう一度見ることができるかもしれない。

この辺の決定権はディリアさんかな、と思つてディリアさんを見る。

すると。

「待つ予定です。カリンさんも倒れた後ですし、皆さんも疲れていますから。その間、少しは休憩することにしました」

「それってどれくらい？」

「魔族討伐をしながら……というわけではないので、数日で戻つてこれるはずです。その間、体を休めるのもいいですし、力の鍛錬など何をしていても構いません」

「分かった。私はしばらくは休ませてもらう」

正直、いまだにあの変な感覚が残っていて、足元がなんとなく覺束ない。しばらくすれば治ると思うけど。だから、数日休めるのは嬉しかった。

「え？ 相沢、俺の練習に付き合つてくれないのか？」

「は？ いつそんな話になったわけ？」

「そういえば、俺のも見えてくれるって言つてなかったっけ？」

「ええ？ 大野くんまでなに言つてるの？」

なにより、私、倒れたばかりなんだけど……

そう思うけど、二人とも真面目な表情で尋ねてくる。

「もうっ、二人とも相沢さんが困ってるじゃない」

どうしようかと思っていると篠原さんが助けてくれる。

あー、本当に篠原さんっていい子だったんだなあ、なんて浸っている、今度は堤さんが。

「ヴァイスさんが戻ってくるまで数日はかかるんでしょ。だったら、とりあえず二日間は自主練。その間相沢さんは休むこと。その後に練習の成果を見てもらったら？」

と、具体的な提案をしてくれた。

「そうだね。相沢さんのこと考えてなかった」

「悪い」

「ううん。それより、篠原さん、堤さんありがとう」

「じゃあ、それぞれ予定が決まったみたいだから、ご飯にしようよ」

と、この話はとりあえず終わりになる。

確かにご飯を目の前にして、延々話をするのもなんだし。

というか、話が長かったせいで、シチュー冷めはじめてるよ……。

みんなもそう思ったのか、一同に微妙な表情をした。

それにしても意外だったな、本当に。

最後の台詞は早くご飯を食いたいから、という感じに思えたけど、でも、助け舟を出してくれたのは確かだ。

結局、一介の高校生（もとの世界で、だけど）が、なにかもを背負えるわけでもないし、いきなり聖人君子にも、悪人にもなれないのかもしれない。

知らない場所、知らない世界だけど、今いる自分を形作ったのは日本でも平和な生活だ。

すでももとが出来ているのに、他所に行つたからと早々変わるわけではないのかもしれない。

「デイリアさん」

「なんですか？」

部屋に戻つてデイリアさんと二人きりになつた後、ベッドに腰掛けながら話しかけた。

「今日はありがとう」

「いえ、当然のことです。それより、カリンさんに負担をかけさせてしまつてすみませんでした」

「ううん。今思つと」

「カリンさん？」

口に出すのは恥ずかしい。

こと、自分の失態については、
でも言わなければ。

「私が皆との間を険悪にしてたから」

「でも、仕方ないことかもしれません。誰もが協力的にしてくれるわけではありません。特に自分に関係ないことに対してなんて……」

「うん、私、そう思つてた。でも……」

他の皆はそうじゃなかった。

気持ちの大きさはあるけど、デイリアさんたちの願いをかなえてやりたいと思つたり、一緒に来た人たちを思いやつたり。

思いやり 私に欠けていたものだ。

「すぐには無理かもしれない。でも、皆との溝が埋まるように心がけるよ。ただ、まだ……」

「まだ？」

「話せないこともあるから。私の中で整理できてないことだから」

それでも、みんなの思いやりを目の前にして、少しだけ、視野が広がった気がした。

上手く言葉で表現できないけど、ここにきて私は一歩も動いていなかった。

でも、今は少しだけ周りが見えるようになって、近くにいる人に近づいていく気になった。

それはきっと、みんなの気持ちのおかげなんだろう。

26 和解

予定通り、最初の二日はのんびり休んだ。

できればその間にもう一度あの水晶を見たかったんだけど、倒れた原因があればにあると思っっているディリアさんに止められてしまった。

そうこうして三日目　目の前には、蒼井くんと大野くんが立っている。

前にいったように、本当に特訓するらしい。

でも、このままいっても互いに力不足なのは違う。力を存分に使えるように慣れておいたほうがいいのは確かだ。

私も経験があるとはいえ、ブランクがある。以前と同じレベルじゃない、という、理由から二人に付き合っ、同じように特訓したほうがいい。

この世界の『力』というのは、どういった原理で起こるのかまったく解析されていない。

ただ、力を使える人と使えない人がいて、使える中でも強さが違うということ。使える属性が決まっていると誤解されていること。

でも、それは違っていて、想像力で力の使い方は広くなる。

たとえば、風ひとつでも

「単純」

ぼつり、と呟きながら、風を先に打ち出しながら向かってくる蒼井くんに対して、私は風を少しばかり向きを変えたあとに、蒼井くんの剣を受けた。

受けたといっても、蒼井くんは男の子だし、剣道をやっていただけあって、正面からの攻撃はかなり重い。だから、このままつばぜ

り合いなどしても、すぐに私のほうが押し負ける。

意識を集中して、土の精霊、エルデに心の中で頼む。

すると、蒼井くんの足元が崩れ、「うわっ」という声とともに剣にかかっていた重圧がなくなった。

そして、意地悪にも体勢を崩した蒼井くんに、追い討ちをかけるように一歩踏み込んで懐に入って、剣の柄をお腹に叩き込んだ。

「ぐっ……」

うん、痛いよね。分かってはいるんだけど……弱点を知ってそれを直さないと特訓の意味ないし。と、言い訳しつつ、お腹を押さえた蒼井くんを見た。

「……わる、い。ちょっと待って、くれ……」

なんか……私、蒼井くんと稽古(?)してると性格悪くなる? と思いつつも、現実的なことを言ってみる。

「魔族は待つてくれないよ?」

「分かって、る。が……」

「はいはい。少し休憩」

「サンキュ」

「……と、同時に攻撃方法のおさらいね」

「……」

「実践じゃないよ。ただのイメージ」

「……」

「時間もつたいないしね」

「……鬼」

「なにか言った?」

「いや……」

こんなやり取りを見ていた大野くんが、横でぼそりと呟く。

「本当にスパルタなんだね、相沢さん」

「わたしもびつくりした」

大野くんの呟きに同意したのは篠原さん。怪我をしたらすぐ治せるようにと、そばで見ているといつて一緒にいる。

篠原さんの分野は治癒系だし、その治癒の稽古（？）も怪我人がいなければできないので、駄目とは言わなかった。

ただ、刺激が強いかもしれないよ、とは言っておいたけど。

目の前で、好きな人と知り合いが切りあって、どちらでも怪我をした　というのは、世間一般（日本基準）では十分な刺激だろうから。日本を基準にしてはいけなと思うけど、生粋の日本人なので、それは無理。日本の平和が懐かしい。

あれ、違った。

日本のことはおいといて、そんな理由で篠原さんが来ていて、堤さんも隣にいる。二人は仲がいいから何かとセットでいるという感じがあるから、あまり違和感ないんだよね、と思っていると、強張った表情した堤さんに声をかけられる。

「ちょっと、相沢さん」

「なに？」

「さっき地の力を使ったよね？」

堤さんは地の属性を持つていていると思っっているので、地の力に関しては敏感なんだろう。少しばかり使った力に気づいたようだった。使ったというより、動いてもらったというほうが正しいんだけど、でも精霊が動けば、力が使える人はそれなりに分かるから、それで

分かったんだろう。タイミング的にも、私になにかしたとしか思えないだろうし。

「あ、うん。ちょっと」

「なんで地の力が使えるわけ？ それに、さっき蒼井とやりあう前だつて風の力をなんとかしてたし……」

「それは俺も聞きたい。どうしてできるの？」

「うーん、それは……」

力に関しては蒼井くんにある程度説明してあつたけど……他の人は知らないんだよね。

さて、どうやって説明しようかな。

「ええと、私は属性が分からないってことで、この剣を渡されたよね？」

「うん」

「だけど、属性がないのに力が使えるって変だから、図書館で調べたり自分でいろいろ試してみて」

とりあえず、以前もここに来てるんで、力の使い方については詳しいんです、なんてことは言えないので、自分で調べたり試した結果、属性なんて本当は合ってないものだとなつたと説明した。

「まさか……」

「本当。一応相性みたいなものがあるから、たぶん一番あつてる相性のものが属性として判断されるんだと思う」

確かに相性というのはあると思うんだよね。相性というか、自分に特化してる力の使い方みたいなのが。

蒼井くんは勢いがあつて、あちこち愛想がよくて、人懐っこくて
そう、リートみたい。

大野くんは蒼井くんより一步引いて周りを見てる感じ。落ち着いてるよう
に見えて、それが、静かな湖とかを連想させる。

篠原さんは戦うつて感じじゃなくて、いると和ませてくれるような
雰囲気を持つてる。(つて、最近観察しだして分かったんだけど
ね)まさに癒しという感じ。

で、堤さん。日本にいたときも、しっかりとしているお姉さんとい
うイメージだった。そして、仲のいい篠原さんを守らなきゃ、つ
て気持ち、守護の力になっている気がする。

と、改めて四人を見た。

そして、それを言葉を選んで伝えと、四人は意外そうな顔を
した。

「なんか変？」

気になつて尋ねると、篠原さんが。

「ううん。ただ……相沢さんつてわたしたちと距離を置いてるよう
だったから、そんな風に見られているなんて思つてなかった」

「俺も。かなり意外」

「ホント、私も」

「いろいろ考えてると思つてたけど、人が嫌いな感じに見えたか
らそこまでみてるとは思わなかった」

口々に、実に意外だと言われ、私は一言「失礼な」とだけしかめ
っ面で返す。

「いや、悪い悪い」

と、あまり悪いと思っていなない蒼井くんの声。それに続くように、みんな口々に「ごめんね」とか言う。

でも、みんなと一線を引いていたのは私のほう。だから仕方ないんだよね。そういう風に見られていても。

「ううん、私のほうが悪かった。大野くんが言うように、人嫌いなのは確かだし……だから、みんなで力を合わせて　なんての、すごく違和感あったし」

だって、四人はよくしゃべっていて仲が良かったのが分かっていった。

でも、その中に私が入るのは、違和感があつて。手を差し伸べてくれているのに、どうしてもその手を取れなかった。今まで。

「で、でも……ありがとう。それでも私に話しかけてくれて」

お礼を言うのはなんか照れくさかったけど。でも、『優しさ』とこのを思い出したせいか、それに気づいたら嬉しくなったのは本当。

「べ、別に……当たり前だろ。一緒にこの世界に来ちまって、帰るためには皆で頑張らないといけないんだから」

「そうそう」

みんなで協力して魔王を倒して還る。

目的は分かっているけど、成し遂げるには困難な道。だから協力しあわなければならない。

「うん。頑張ろう」

「そだな。あ、やっと意見が一致したから、あれやろうぜ、あれ！」

はしゃいでいる蒼井くんに、あれと言われて首をかしげた。

「ん？ とりあえず手を出して」

「は？」

一応、言われたとおりに出すと、「両手じゃない。片方」と言われたので右手を残す。

すると、そこに蒼井くんの手が重なる。さらに大野くん、篠原さん、堤さんが重ねていく。

ああ、これって手を合わせてみんなで「頑張るぞ、おー！」ってのね。と思っていると、案の定、蒼井くんが。

「頑張って魔王倒して日本帰るぞー！」

と、声高に宣言した。

で、大野くんがそれに続けて「おー！」とか言ってる。女の子の篠原さんと堤さんも同じように、ちょっと声が小さいけど同じように「おー！」と続く。

恥ずかしいな……と、思いつつも、一緒に頑張ると決めたので、小声ながらも「おー」と応えた。

27 巫女

その日の夜は羽目を外しすぎた　かもしれない。

昼間のノリで夕食時も過ごしていたら、すっかり果実酒に手をつけてしまった。いつもなら、黙々と食べて終わるだけだったのに。

この世界には飲酒に関して年齢制限がない。そのため、怒られることはなかったけど、確実に酔っ払いが五人出来上がった。（いやほら、私達はまだ未成年でお酒を飲むのには慣れていないから……って、言い訳なのは分かってるけど、口当たりはいいし、冷えていてお酒だと気づいたときにはある程度飲んじやった後だったから）

と、言い訳に言い訳を重ねても仕方ないけど、そんな感じでいつもとは違う夕食になった。

もちろんこれで心を許した本当の仲間になったわけじゃないのは分かっている。それはみんなも同じだと思うし。

でも、みんなと私の間にあった壁が薄くなったのは確かだ。少なくとも、形からでも入ろうとしている。それは、きつといいことなんでしょう。

はーっと大きく息を吐きながら、寝台にゴロリと転がった。

「なにかあったのですか？」

上のほうから聞こえる声は、もう耳に馴染んでしまったディリアさんのものだった。

「まあ、いろいろ」

「私には言えないことですか？」

「うーん、別にそういうわけじゃないけど。ただ、本当にいろいろありすぎて……自分の中でも整理するのが大変なくらい」

少し寂しそうな表情のデイリアさんに、苦笑しながら答える。

そういえば、デイリアさんともなんだかんだ言いながら、同じ部屋で寝泊りしたり、みんなにはまだ言えない話をしてる。

言えることと、言えないこと　それは相手によって違う。

「ねえ、デイリアさんはどうして巫女をしているの？　どうやって選ばれるの？」

ふと気づいた疑問を尋ねると、デイリアさんは目を瞠った。聞かれるとは思わなかったことなのか、聞かれたくなかったことなのか。「デイリアさん？」ともう一度名前を呼ぶと、デイリアさんは気を取り直したのか、緊張した表情が諦めのような寂しそうな表情になった。

「すみません。そんなことを聞かれるとは思いませんでしたので」

「んー…深い意味はないんだけど……」

「そう、ですか。私にすると、カリンさんは何でも知ってそうな気がして　」

「は？　ないない」

蒼井くんたちよりは知っているだろうけど、デイリアさんほどの世界について詳しくはない。一部詳しいのは、二百年前の魔王討伐に関してのみだ。

この世界の事情　特に、今に関してはデイリアさんのほうがぜったい詳しい　なんて思っていると。

「前に……」

「はい？」

「カリンさんに、この世界のことを聞かれましたよね」

「あ、うん。それが？」

「あるとき分からないと答えたのは、嘘ではありません。もちろん、意地悪でもないですよ」

と、ディリアさんは少し軽い口調に戻し、茶目つ気を出そうとした。

けど、その表情はどこかこわばっていて……

「ディリアさん？」

「すみません。本当に、私は知らないのです。この世界のことを。自分のことすらも……」

「……ええと、それって……？」

ディリアさんの話が理解できないでいると、ディリアさんが困ったような顔をして。

「物心ついたときには、すでに城の一角にある神殿にいたのです。

ですから、私には家族の記憶ありませんし、神殿の中のことが分からないんです」

「物心ついたときから？ 家族も知らないの？」

「ええ、『巫女』としての力は少し特殊で……十二年毎にその年の一番最初に生まれた力を持つ子どもがなるのです」

「なんか……特殊な決まりだね。なんかあるの？」

十二年に一度、力を持って生まれた一番最初の子ども どこからそんな選び方をするんだろうか。

まあ、そもそも魔法とは違う力があつたりするし、今では属性がどののというけど、実際は方向性だけで、どんな力でも使える。その日に生まれたから、あなたは巫女だといわれ、そのための力を学べば、その力だけが秀でるってこともある。

が、なんで十二年？

と疑問に思っていると、ディリアさんは私の疑問を読み取ったのか、十二年の意味を教えてくれた。

「この世界で、私たちが住む国は、最後にできた十二番めの国になります」

「え？ でも、地図を見たとき……」

「ええ、その後いろいろあつて、国の名前と違っていますが……はるか昔、まだ、人が国を作っている間の話です。まだ魔族と対抗するだけの力もろくになく、魔王の居城より離れたところからまとまり、国ができ始めました。そうして、最後に、一番魔王の居城に近いこの地にできたのが、この国 ツヴェルフなんです」

「それが十二番め……」

どうやら、今はあちこちに魔族が点在するようになって、国として機能しなくなったところや、そういったところを避けるために分裂して、国の数は増えたり減ったりという状態らしい。

逆にこの国は魔王の居城に一番近いけど、他の国より土地はやたら広いらしい。半分が魔族に占められているから、どこまでが国と呼べるのかは分からないけど。

とりあえず、十二番めにできた国ということで、この国は十二というのが特別になっているらしい。

そして、ディリアさんはその年に力を持って生まれた最初の子のため、すぐに親と引き離され、神殿の中で育ったという。ちなみに、どこで生まれようが、先代巫女が感じ取るため見逃したことはないという。

先代といってもまだ健在。十二年だからね。先代も先々代も、そして、ディリアさんの後継者も。

彼女たち、すべてが特別な『巫女』なのだという。その中で、十代後半から二十台前半の人が、最高責任者になるらしい。

最高位の巫女　なんて言われているから、お嬢さんなイメージが強かったけど、今の話を聞いて少しだけディリアさんに対する見方が変わった。

世間を知らないお嬢さんなのは変わらないけど、それ以上に、普通の人の生活をまったく知らないのだ。

ディリアさんたちは、巫女に選ばれてしまった以上、一生この国に対してその身を捧げることになる。この世界の力は純潔でなければならぬという必要性はない。そのため、死ぬまで巫女という枷から逃れられないという。

しかも、結婚できても、ほぼ政略結婚でしかない、と。

「カリンさんでも驚きましたか？」

「う、うん。前のときはそんな話なかったし……そもそも、召喚した本人は城にいたときまでしか顔を合わせなかったからね。私も、会えば元の世界に還せとしか言わなかったから、向こうのほうを避けていたし」

「あら……そうだったんですか」

「うん、まあ。逆に、巫女であるディリアさんと、ここまで話をするような関係になるとは思わなかった……かな？」

人のつながりとは、意外なところで繋がっていくのかもしれない。今のディリアさんを見てから、昼間のみんなの顔を思い出した。壁がすべて取り払われたわけじゃないけど、それでも最初のときから変わってきている。

少しずつでも一緒に力の使い方を試して、そのたびに会話が増えて、笑って……皆ともっといろいろな経験をするんだろう。

きつと、この旅が終わる頃には、皆のことは一生忘れられない存

在なっている

改めて、そう感じた。

28 軽い衝撃

三日のんびりして　　というわけでもないけど、稽古とかしてたし、四日目にこれからどうするのかという話になった。

ディリアさんは城に戻ったヴァイスさんを待ちたいようで、もうしばらく滞在して、それからという。

でも、蒼井くんたちは、急がなくてもいいのかと心配になっていくようだった。

確かに、一度平和な状態に戻ってしまうと、またあの緊張状態に慣れるには時間がかかるし、抵抗も出る。

まあ、一番は　戻ったときのことだろう。

ふと、稽古の途中で、大野くんが急に自分たちは今、向こうでどういう状態なんだろう　と呟いたところから始まった。急にいなくなっただから、失踪、行方不明、誘拐という単語が口からこぼれていく。

それらを聞いて、みんな急に慌てた。

……そりゃそうだろう。戻るって安心してたけど、いざ戻ってみると、こっちで過ごした時間の分、向こうでも過ぎていくんじゃないかって思うのは当然だろうし。

私はこっちの世界と向こうの世界との時間の流れの違いを知っているけど、さすがにその辺はまだ言えない。言えば、どうして知っているんだと聞かれてしまうから。

そしてそれは……私が前にこの世界に来たことが分かってしまうから……

みんなすごく心配しているのに、本当のことをいえないのがもどかしい。みんなとの距離が縮まる分、罪悪感が増える気がする。

結局、六日間の間、ヴァイスさんは戻ってこなくて、七日目の朝を迎えた。

最近では食堂にしている部屋に入ると、すぐに「おはよう」とみんなど挨拶を交わす。ぎこちなさはあまり感じられず、努力して笑顔を作らなくても済んだ。

「今日はどうするの？」

「もちろん、ヴァイスさん待ちなら、また稽古さ！ この世界の力って、使い始めると結構面白いからな」

「蒼井くんたら……」

「でも、私もそう思うよ。私の場合、『地』だから、できることはあまりないって思ってたけど、そうでもないし」

「堤さんまで……」

最近では模擬戦のようなこともして、力の使い方のバリエーションを増やしている。それに堤さんも加わるようになって、昨日、攻撃方法を思いついたところだった。そのせいか、堤さんも楽しそうに加わる。

篠原さんの力はほとんど癒しの力のみで、模擬戦で負った傷を癒すのが、篠原さんの特訓になっていた。

浄化や癒しは思ったより大変な力だから、それのみになるのも分かる。

目に見えるような攻撃的な力とは違って、浄化や癒しは目に見えないものを相手にするようなもの。癒しは傷が治っていくのは分かるけど、傷の状態を見て、どう癒すかを決めるのは、力の使い手による。表面的なものだけ見て、そこだけに癒しの力を使うと、中の傷が治らないまま塞いでしまう……という恐ろしいことがおきてし

まうのだ。腕や足ならまだしも（これでも十分怖いけど）、内臓とかが傷ついているのに、表面だけ癒してしまうと、中で内出血や雑菌による炎症などが起きてしまう。

そのため、癒しの力を使う人は、治療するその傷を間近でよく見なければならぬ。どこまで傷ついているのか、どこまで癒しの力を必要とするのか。

たぶん、篠原さんは精神的に強くなったと思う。みんなのように目に見えて強くなったという感じではないけど、芯が強くなったと思う。

蒼井くんと大野くんは、力を想像したとおりに使いながら、剣と力を上手く使い合わせてきている。

蒼井くんは自分の手から離れたところの空気 風を操ることを覚えた。これで多方面からの攻撃にもある程度対応できる。

大野くんは空中にある水分を集めて形にできるようになった。蒼井くんに比べて進んでいないように見えるけど、集める量が違うんだからそう見えても仕方ない。代わりに、水の近くであれば、たくさん水を直接操ることができる。

結局、属性に縛られたままだけど、それでも力の使い方のバリエーションは増えた。

六日間 城にいたときよりも、はるかに強くなった。

力の使い方のコツを覚えだしたおかげだろうけど……みんな、大野くんの言葉が影響しているところもあるだろう。

ただ、それが、焦りに繋がらなければいいのだけど……

その日の昼過ぎ、ヴァイスさんが戻ってきた。
馬を駆ってたどり着くと、汗だくで馬から下りた。

「遅くなつてすみませんでした」

ディリアさんに頭を下げるヴァイスさん。

そういえば、向こうの世界とあまり代わらない姿や、使用目的（乗ったりして移動手段に使ったり）するものは、向こうの世界で当てはまる言葉になるのだろう。形も完全に同じじゃないし、色も奇抜な色をしている。

でも、ヴァイスさんが乗ってきたのは『馬』と呼ばれている。たぶん、こっちの世界の言葉をしゃべっているけど、元いた世界に同じようなものが存在すると、馴染んだ言葉に自動的に翻訳されるんだろう。

でもって、それも召喚するときの条件に入っているんだろう。召喚した相手と意思疎通ができなければ、とてもじゃないけど、魔王を討ってください、なんてお願いできないもの。

なんて、つらつら余計なことを考えていると、ディリアさんとヴァイスさんが二人して私を見ていた。

私、なにかした？

「あの……？」

「ああ、すみません、カリンさん」

ちよつととまどつた雰囲気ディリアさんが答える。

……って、そういえば、私、ヴァイスさんがどうしてお城に戻つたのか、理由知らないんだけど。

「そついえば、ヴァイスさんはどうしてお城に？」

「それは……」

言いよどむヴァイスさんは、ディリアさんに助けを求めるように視線を移す。

ディリアさんは一拍おいた後。

「ヴァイス隊長には今までの魔王討伐について調べてもらったんです」

「はあ……今ごろ？」

「ええ、まあ。その……カリンさんがクリスタルを通して何かを視たのでしょうか？ あれは前回の勇者が置いていったものだといっていましたし……それで、それらを調べたら、今回の魔王討伐に少しは有益な情報はないかと……」

初耳なんです、それ。

あ、でも、蒼井くんたちは理由を知っていたみたい。私が何か『視た』といっても驚かないし、逆にそれで と促している。

でも、私が視たのって 魔王討伐のことより、その後のことを教えてくれたようなものだったからなあ。精霊王云々はあまり必要ないことだろうし。

……って、私って何か変なことを言ったから、ディリアさんが調べようとしたんじゃない……うーん、調べられるとマズイこととかあるし。いやいや、あれは城に記憶されるようなものじゃあ……

あれこれ考えてると、ヴァイスさんが報告書と思しきものを取り出してディリアさんに渡した。

ディリアさんはそれを受け取り見はじめると、蒼井くんたちが興味津々で覗き込んだ。それを感じたのか、ディリアさんは声に出して読み始める。

私は内心、ひえーっやめてー！ という状態。
バレないだろうけど、やっぱり心臓に悪いよ……

「ツエーン暦七百九十九年、魔王の出現　いつにない魔王誕生により、魔族の固体数が倍増、当代勇者を魔王討伐に向けるが、たどり着けずに死亡　」

感情を交えず読み上げていくディリアさんと逆に、たどり着けずに途中で勇者が亡くなったというところでみんなが動揺する。

この辺りの話は図書館へに行けばおのずと知れる情報なんだけど、みんなは力に慣れる稽古と称して、ほとんどそういった情報を手にすることがなかっただろう。もちろん、それを知って嫌がられても困るから、周りもそうだった情報排除していたところもある。

好き勝手していた私だけが、まあ、あれこれ知っているわけだけど……その辺はすでに知っていた情報だったし。

「　勇者死亡の報告を受け、すぐにまた勇者選定を行う。が、新たな勇者は魔王討伐を辞退。その後、この事態をどうすべきか協議が始まり、話し合いの後、魔王を討てる存在を呼び出す召喚陣を作ることになった　」

魔王には寿命がある。しかも、人より短い寿命が。

けれど、その寿命を待ってられないほど、魔族の被害があつてそして、魔王を滅ぼすために力を持ったものを呼び出す召喚陣を作ることになった。

確か、当時の力ある者たちが集まって、力を込めながら一文字というか記号？を書き込んで……一年近くかけて召喚陣を作り上げたといっていた。

成功するかどうか、現れた人物が引き受けてくれるかどうか、そんなことは考えられないほど切羽詰っていたほど。

そして……

「召喚陣によって呼び出されたのは、当時、十代前半の少年。名は

リン

冷や汗がたらりと頬を伝う。

にしても、そういえばあの時名を聞かれたとき、花梨と答えたけど、呼ばれた衝撃でくらくらしていて、こっちの人に聞こえたのは『りん』のみだった。で、『リン』と呼ばれることになったんだけど……

十代前半の少年ですか。

そんな風に伝わっていたとは……ちょっと衝撃だわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8281m/>

二度目の勇者

2011年10月8日22時17分発行